元総社蒼海遺跡群（141）

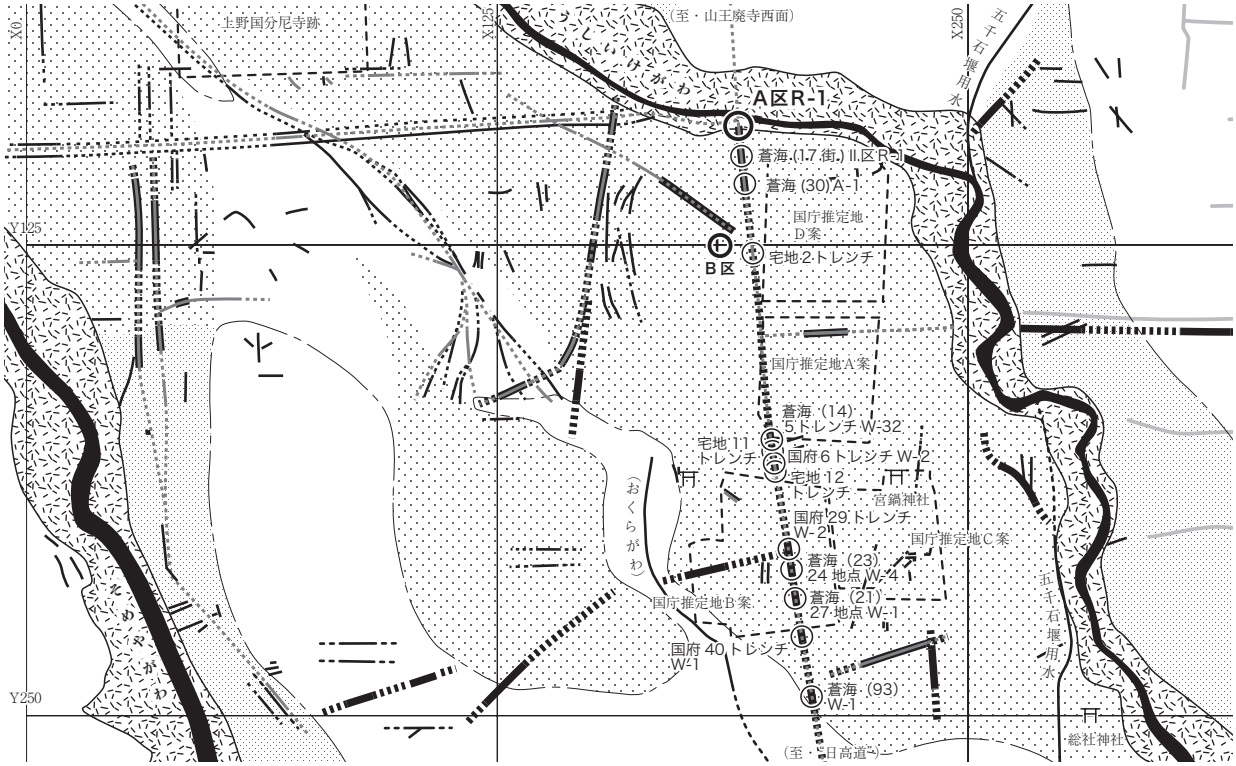
前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２０．１０

前橋市教育委員会

元総社蒼海遺跡群（141）

前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



A区R－1周辺の古代溝と道（S＝1／8000）

２０２０．１０

前橋市教育委員会

【扉絵解説】

前橋市教育委員会 2017、中村 2018 で検討した、元総社蒼海遺跡群周辺で調査された古代の溝跡と道路状遺構に、本遺跡Ａ区Ｒ－１号道路状遺構の位置を示した。粗い網掛けは微高地、細かい網掛けは自然堤防、不規則な網掛けは低地平野、濃色の線は溝跡、淡色の線は道路状遺構と硬化面、破線は推定走向方向を表す。

この道路状遺構は巨視的には、近藤 1981 によって指摘されている山王廃寺西側の南北古道と「日高道」の中間地点に位置している。牛池川の浸食崖に接する本遺跡Ａ区では、深さ約 3.0 ｍにおよぶ切通しを開削し、一部砂礫敷きの斜路を作道することで、対岸へ渡河していたようだ。このような、谷や川も克服しながら小地域間を直線的かつ平坦に縦断する広域的な計画性に、この道路状遺構の意義を推し量ることができる。

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構　全景（上が北）

巻頭図版2

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構　土層断面（南から）

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構　全景（南西から）

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構　砂礫敷き検出状況（南から）

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構　砂礫敷き断面（南から）

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構　As - Ｂ直下旧地表面の状態（南西から）

はじめに

前橋市は、関東平野の北西部に位置し、名山赤城山を背に利根川や広瀬川が市街地を貫流する、四季折々の風情に溢れる群馬県の県都です。市域は豊かな自然環境に恵まれ、２万年前から人々が生活を始め、市内のいたる所にその息吹を感ぜられる遺跡や史跡、多くの歴史遺産が存在します。

古代において前橋台地には、広大に分布する穀倉地帯を控え、前橋天神山古墳などの初期古墳をはじめ、王山古墳・天川二子山古墳といった首長墓が連綿と築かれ、上毛野国の中心地として栄えました。また、続く律令時代になってからは総社・元総社地区に山王廃寺、国府、国分僧寺、国分尼寺など上野国の中枢をなす施設が次々に造られました。

中世になると、戦国武将の長尾氏、上杉氏、武田氏、北条氏が鎬をけずった地として知られ、近世においては、譜代大名の酒井氏、松平氏が居城した関東三名城の一つに数えられ、「関東の華」とも呼ばれた厩橋城が築かれました。

やがて近代になると、生糸の一大生産地となり、横浜港から前橋シルクの名前で遠く海外に輸出され日本の発展の一翼を担いました。

今回、報告書を上梓する元総社蒼海遺跡群(141）は古代上野国の中枢地域の調査であり、上野国府推定地域にも近接することから、調査成果に多くの注目を集めております。今回の調査では、国府に関連すると考えられる「切通道路遺構」が発見されました。これまでの発掘調査で得られた成果が少しずつ積み重なり、徐々に「国府の解明」に近づいていると感じています。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、関係機関や各方面の多大なるご配慮・ご尽力により調査事業を円滑に進められことができました。また、直接調査に携わってくださった担当者・作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

令和２年10月

前橋市教育委員会
教育長　　吉川　真由美

例　　言

1　本報告書は前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う元総社蒼海遺跡群（141）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査の要項は次のとおりである。

遺跡名	元総社蒼海遺跡群（141）
調査場所	前橋市元総社町 1811-3、1812-1、1860-1、1860-2、前橋市総社町総社 3090-4、3090-9、3090-10、3090-12、3090-13、3091-1、3091-2、3091-3
遺跡コード	２Ａ 255
発掘・整理担当者	中村岳彦（技研コンサル株式会社）
発掘調査期間	令和２年６月 12 日～令和２年７月 20 日
整理・報告書作成期間	令和２年７月 21 日～令和２年 10 月 30 日

3　本書の原稿執筆はＩを小峰　篤（前橋市教育委員会）、他を中村が担当した。

4　発掘調査および整理作業参加者は次のとおりである。

（発掘調査）池田正恵　伊丹茂一　大山四郎　川野京子　木暮朱美　小林克宏　後藤次雄　塩野谷和夫　高見壽美子　永井憲一　平澤小夜子　星野一江

（整理作業）大川明子　石川承子　小林　和　曽根　祐　杉田友香　土屋利治　福島禄子　細野竹美

5　本書における図面・写真・遺物は、前橋市教育委員会事務局文化財保護課で保管している。

6　下記の諸氏および機関にご指導・ご協力を賜りました。記して謝意を表します。

後藤圭一　関　茂雄　高橋清文　永井智教　中島啓治　中村正八　野村　満　吉川和男　山下工業株式会社

凡　　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に国土地理院発行 1/200,000『宇都宮』『長野』、1/25,000『前橋』、前橋市発行 1/2,500 都市計画図を使用した。

3　遺構名称は、住居跡：H、溝跡：W、道路状遺構：R、土坑：D、ピット：P、性格不明遺構：Xである。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は原則的に次のとおりである。その他各図スケールを参照されたい。

遺構　住居跡・溝跡・土坑・ピット・道路状遺構・その他・・・1/60　カマド・・・1/30
全体図・・・1/150、1/250

遺物　土器・石製品・瓦・・・1/3、1/4、1/6　金属製品・・・1/2

5　本文および表中の計測値については（　）は現存値を、〔　〕は復元値を表す。遺物の単位は cm、遺構の単位はm表す。

6　遺構図、遺物実測図のトーン表現は以下のとおりである。

遺構　焼土範囲：　粘土範囲：　灰範囲：　硬化面範囲：　地山：

遺物　須恵器（還元焔）断面：　須恵器（酸化焔）断面：　灰釉陶器断面：
灰釉施釉範囲：　研磨範囲：

7　主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-A（浅間Ａテフラ：1783）、As-B（浅間Ｂテフラ：1108）、Hr-FP（榛名二ッ岳伊香保テフラ：６世紀中葉）、Hr-FA（榛名二ッ岳渋川テフラ：６世紀初頭）、As-C（浅間Ｃテフラ：３世紀後半～４世紀中葉）

目　　次

巻頭図版１・２
はじめに
例言・凡例・目次

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅲ　調査の方針と経過
　1　調査範囲と基本方針…… 7
　2　調査経過…… 7
Ⅳ　基本層序…… 9
Ⅴ　遺構と遺物
　（1）竪穴住居跡…… 9
　（2）道路状遺構…… 13
　（3）溝跡…… 14
　（4）土坑・ピット…… 15
　（5）性格不明遺構…… 15
　（6）遺構外出土遺物…… 15
Ⅵ　発掘調査の成果と課題…… 26

挿図目次

Fig.1　遺跡の位置 …… 1
Fig.2　周辺遺跡図 …… 3
Fig.3　周辺調査地点とグリッド設定図 …… 6
Fig.4　全体図 …… 8
Fig.5　基本層序 …… 9
Fig.6　Ａ区Ｈ－１・３号住居跡 …… 16
Fig.7　Ａ区Ｈ－２、Ｂ区Ｈ－１～３号住居跡 …… 17
Fig.8　Ｂ区Ｈ－３～６号住居跡、Ｒ－１号道路状遺構、Ｘ－１号性格不明遺構 …… 18
Fig.9　Ｂ区Ｈ－６・７号住居跡、Ａ区Ｒ－１号道路状遺構 …… 19
Fig.10　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構 …… 20
Fig.11　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構、Ｗ－１号溝跡 …… 21
Fig.12　Ａ区Ｄ－１～９号土坑、Ｂ区Ｗ－１号溝跡、Ｂ区Ｄ－１・３～５号土坑 …… 22
Fig.13　Ａ区Ｐ－１～18号ピット、Ｂ区Ｄ－２・６～８号土坑、Ｂ区Ｐ－１～９号ピット …… 23
Fig.14　Ａ区Ｈ－１～３、Ａ区Ｒ－１、Ｂ区Ｈ－１～３出土遺物 … 24
Fig.15　Ｂ区Ｈ－４・６・７、Ｂ区Ｄ－２出土遺物 …… 25
Fig.16　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構の勾配 …… 26
Fig.17　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構の推定路線と関連遺構 …… 28
Fig.18　蒼海城築城以降における地形改変の想定６～９地点付近 … 30
Fig.19　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構と関連遺構の出土土器 …… 30
Fig.20　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構砂礫敷き偏光顕微鏡写真 …… 32

表目次

Tab.1　周辺遺跡一覧表…… 3
Tab.2　土坑、ピット計測表…… 15
Tab.3　出土遺物観察表…… 25
Tab.4　関連遺構等一覧…… 27

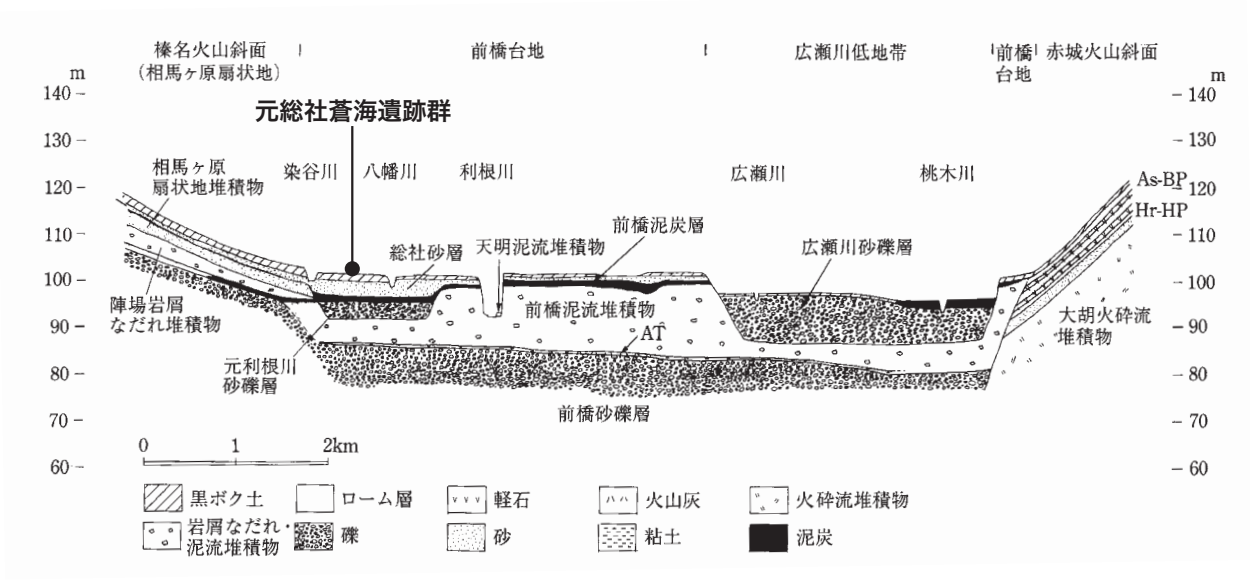
写真図版目次

PL.1　Ａ区全景（上が北）　Ｂ区西半部全景（上が北）　Ｂ区東半部全景（上が北）　Ａ区Ｈ－１全景（南西から）　Ａ区Ｈ－１カマド全景（南西から）　Ａ区Ｈ－２全景（北西から）　Ａ区Ｈ－３全景（北東から）
PL.2　Ａ区Ｒ－１路面②（新段階）検出状況（西から）　Ａ区Ｒ－１路面①（古段階）検出状況（西から）　Ａ区Ｒ－１西壁中段平坦面検出状況（南東から）　Ａ区Ｒ－１東壁中段平坦面検出状況（南西から）　Ａ区Ｒ－１As-Kk直上馬骨出土状況（南から）　Ａ区Ｒ－１調査風景（北西から）
PL.3　Ａ区Ｒ－１路床検出状況（西から）　Ｂ区Ｈ－１全景（北から）　Ｂ区Ｈ－２全景（西から）　Ｂ区Ｈ－２カマド全景（西から）　Ｂ区Ｈ－３全景（北西から）　Ｂ区Ｈ－３カマド全景（西から）　Ｂ区Ｈ－４東半部全景（南西から）
PL.4　Ｂ区Ｈ－４西半部全景（北西から）　Ｂ区Ｈ－４カマド全景（西から）　Ｂ区Ｈ－５全景（北西から）　Ｂ区Ｈ－６全景（西から）　Ｂ区Ｈ－６カマド全景（西から）　Ｂ区Ｈ－７全景（南から）　Ｂ区Ｄ－２全景（南から）　Ａ区調査風景（北東から）
PL.5　遺物写真

引用・参考文献

近江俊秀 1994「古代道路遺構の構造」『文化財論集』　文化財論集刊行会
近江俊秀 2006『古代国家と道路』　青木書店
小鹿野亮 2003「古代道における路体施工の複合性－道路に残された痕跡の分別理解－」『九州考古学』第 78 号　九州考古学会
尾野善裕 2008「第Ⅲ章　古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」『来姓古窯跡群－ 10 世紀～ 13 世紀の窯跡　灰釉陶器・緑釉陶器・山茶碗－』　豊田市教育委員会
川原嘉久治 2011『上野国府跡』第１集　前編
木津博明 1988「第３章　歴史的環境　第１節　周辺遺跡」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（３）』　群馬県埋蔵文化財調査事業団
木津博明 1999「国府に地割はあったか　上野国」『幻の国府を掘る－東国の歩みから－』　雄山閣
桐生直彦 1987「遺物の出土状態の分析に関する覚書」『貝塚』38　物質文化研究会
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997『出土した古代の土器　展示レポート』
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007『総社閑泉明神北Ⅳ遺跡・元総社牛池川遺跡・元総社北川遺跡・元総社小見内Ⅴ遺跡』
群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009『上強戸遺跡群（１）』
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７～ 19 世紀－』　京都編集工房
近藤義雄『天狗岩用水の研究』　群馬郡総社小学校　（出版年不詳）
近藤義雄 1981「上野国府をめぐる古代交通路」『信濃』第 33 巻第２号　信濃刊行会
坂井　隆 1989「東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴－上野地方の陸上交通史序論－」『研究紀要』６　群馬県埋蔵文化財調査事業団
坂口　一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年－住居の重複と共伴関係による土器型式組列の検討－」『群馬県史研究』24　群馬県史編さん委員会
坂爪久純 2008「「開削四地型直線駅路」の提案－『十六夜日記』を示唆として－」『考古学の窓－巾 隆之氏定年退職記念特集号－』　國學院大學卒業生有志 in 群馬
坂本和俊 2015「古墳時代東国の土器を使わない製塩と塩の流通痕跡」『埼玉考古』第 50 号　埼玉考古学会
桜岡正信 1991「７世紀代以降の土師器坏の画期とその要因について－群馬県地域を中心として－」『群馬考古学手帳』Vol.2　群馬土器観会
鈴木徳雄 1984「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態－古代武蔵国における土師器生産と交易－」　土曜考古学研究会
竹井治雄 1996「轍（わだち）雑考」『京都府埋蔵文化財論集　第３集　－創立十五周年記念誌－』　京都府埋蔵文化財調査研究センター
都丸十九一 1947『天狗岩堰開鑿史－江戸初期水利開發の一例－』　群馬國語文化研究所
早田　勉 1990「第一章　第五節　前橋台地と広瀬川低地帯」『群馬県史』通史編１　原始古代１　群馬県
早田　勉 2000「5-3 関東平野北西部－山間・山麓部を流れる河川流域に見られる地形変化　（１）火山活動の影響を受けた利根川扇状地の地形」『関東・伊豆小笠原』日本の地形４　東京大学出版会
田中　信 2004「関東における在地土器食器」『中近世土器の基礎研究ＸＶⅢ　中世土器研究の今日的課題－土器編年と中世史研究－』　日本中世土器研究会
中村潤子 2016「Ⅲ 交通に関わる技術　一 運ぶ手段」『日本古代の交通・交流・情報３　遺跡と技術』　吉川弘文館
中村岳彦 2018「“推定上野国府”周辺の古代景観－元総社蒼海遺跡群の溝と道－」『群馬文化』332　群馬県地域文化研究協議会
奈良国立文化財研究所 1982『平城宮発掘調査報告Ⅺ』
日沖剛史 2016「群馬県前橋市元総社地域における地形の形成と土地利用」『地域考古学』１号　地域考古学研究会
前橋市教育委員会 2013a『推定上野国府～平成 23 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2013b『推定上野国府～平成 24 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2015『推定上野国府～平成 25 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2016a『元総社蒼海遺跡群（17 街区）』
前橋市教育委員会 2016b『推定上野国府～平成 26 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2016c『元総社蒼海遺跡群（65）』
前橋市教育委員会 2017a『推定上野国府～平成 27 年度調査報告～』
前橋市教育委員会 2017b『元総社蒼海遺跡群（74）～（80）・（92）～（94）』
前橋市教育委員会 2017c『元総社蒼海遺跡群（121）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2000『元総社宅地遺跡・上野国分尼寺寺域確認調査Ⅱ』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2004『元総社蒼海遺跡群（14）・元総社蒼海遺跡群（19）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009a『元総社蒼海遺跡群（21）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009b『元総社蒼海遺跡群（23）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010a『元総社蒼海遺跡群（30）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010b『元総社蒼海遺跡群（27）』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010c『元総社蒼海遺跡群（28）』
松田徳松・新井房夫 1971「第一編　第三節　自然の推移」『前橋市史』第一巻　前橋市
松本太郎 2008「戦国城館の遺物」『後北条氏の城－合戦と支配－』　博物館周辺文化財の複合的活用事業実行委員会
松本政春 1991「貴族官人の騎馬と乗車」『日本歴史』第 515 号　吉川弘文館
山崎　一 1978『群馬県古城塁址の研究』上巻　群馬県文化事業振興会
山村信榮 1993「大宰府周辺の道路状遺構」『古代交通研究』第２号　古代交通研究会

※主要な文献以外は割愛した。



付図　高崎市棟高町～高崎市街地をへて前橋市荒口町に至る利根川扇状地の地質断面と遺跡の位置
（早田 1990　一部加筆）

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴い実施され、22 年目にあたる。本調査地は、周辺で埋蔵文化財調査が長年にわたって行われていることから、遺跡地であることが確認されている。

令和２年４月 10 日付で前橋市長　山　本　　龍（区画整理課）（以下「前橋市」という。）より、埋蔵文化財発掘調査・整理業務に係る依頼が前橋市教育委員会（以下「市教委」という。）に提出された。市教委では既に他の発掘調査を実施中のため、市教委直営による調査実施が困難であると判断し、民間調査組織へ発掘調査業務を委託することで合意に至った。業務実施にあたっては市教委の作成する調査仕様書に則り、市教委による監理・指導のもと発掘調査を実施することとなった。同年６月２日付で前橋市と民間調査組織である技研コンサル株式会社との間で業務委託契約が締結され発掘調査着手に至った。

なお、遺跡名称「元総社蒼海遺跡群（141）」（遺跡コード：2A255）の「元総社蒼海」は土地区画整理事業名を採用し、「（141）」は過年度に実施した発掘調査と区別するために付したものである。

Fig.1　遺跡の位置

Ⅱ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置（Fig. １・２、付図）　元総社町は前橋市の南西部に位置し、元総社蒼海遺跡群は、その北西域を占める。遺跡地は 1960 年代まで主に畑地だったが、1998 年から始まった元総社蒼海土地区画整理事業の進展によって急速に市街化が進み、今では大型店舗やマンションも建ち並ぶ、現代的な街並みへと変貌を遂げつつある。

遺跡地は、相馬ヶ原扇状地と前橋台地の移行地帯にあたり、牛池川と染谷川で画された、南北に長い台地上にある。約２万年前、浅間山の山体崩落により生じた前橋泥流は、前橋台地の母体となった。この頃の元利根川は、現利根川よりも西側の総社や元総社の辺りを流れていたと考えられる（早田 1990）。約 1.7 万年前、榛名山の山体崩落により生じた陣場岩屑なだれは、相馬ヶ原扇状地を形成した。約 1.4 ～ 1.3 万年前頃には前橋泥炭層が形成され、遺跡地の周辺は針葉樹林や草本類が繁茂する環境下にあったと考えられる（早田 2000）。相馬ヶ原扇状地を水源とする染谷川・牛池川・八幡川などの中小河川は榛名山の裾を南東へ流れるが、元利根川が残した低地の影響を受け、遺跡地周辺で流れを大きく南へ変える。急激な流れの変化は洪水の温床となり、度重なる洪水層の堆積によって、遺跡地の周辺には総社砂層が形成されたと考えられる（日沖 2016）。総社砂層の堆積と中小河川による開析の反復は、微高地と低地を残しつつ台地を形成した。台地が安定すると、中小河川の流れも現在の場所に落ち着き、今日まで下刻を続けている。その後、台地上には黒ボク土が形成され、歴史時代に起きた度重なる火山災害や人為的な地形改変の累積を経て、台地表層は次第に平坦化してきたと推測できる。

歴史的環境（Fig. ２・３、Tab. １）　紙数の都合上、本節では元総社蒼海遺跡群を中心に、歴史的環境を概観する。

総社砂層より上層で確認される最も古い遺構は現在のところ、縄文時代前期に遡る。該期の住居跡は、蒼海遺跡群（３・４・40・41・94 街区※以下「蒼海」）などで確認され、染谷川左岸の自然堤防に沿って帯状に分布

する。中期の住居跡は、蒼海（３・40・116・123）・小見内Ⅶ遺跡などに確認される。蒼海（10）を除くこの一帯は、染谷川自然堤防の北端と、榛名山南東裾の最末端にあたり、広い微高地が展開する。後期～晩期の遺構は少ないが、蒼海（10・101）に確認され、遺物は蒼海（100）・小見Ⅴ遺跡などにも確認される。台地内の谷地や中小河川の低地にも、この時期の遺構は分布する。本遺跡では、わずかながら前期の土器片が出土した。

弥生時代の遺構は少ないが、前期末～後期の遺物は、蒼海（37・39・61）・小見内Ⅲ遺跡などで出土しており、現状の分布は台地の北端をなす牛池川右岸の一帯に集中する。

古墳時代前期の遺構は、蒼海（38・39・17 街区）・小見内Ⅲ遺跡のように、前代の分布を踏襲する。他方、蒼海（40・48）など染谷川の自然堤防上と、蒼海（38・56・61）など牛池川左岸の一帯にも分布する。牛池川左岸では集落域のほか、蒼海（128）で畠跡、低地平野内の閑泉明神北Ⅳ・Ⅴ遺跡などで水田跡が確認され、蒼海（62・81・100）などには周溝墓が推定されており、集落域・生産域・墓域を含む、一体的な生活の単位が確認されつつある。中期になると、牛池川の一帯では左岸を中心に遺構が分布し、蒼海（35・81・91）・元総社中学校遺跡などで、多くの住居跡が確認される。元総社北川遺跡・閑泉明神北Ⅳ・Ⅴ遺跡など、低地内には Hr-FA 洪水層に覆われた小区画水田跡が確認され、この頃までには、牛池川低地平野の広い範囲が開発されたと推測できる。後期になると遺跡は増え、ほぼ全域で住居跡が確認される。一方、該期の古墳は確認されず、蒼海（10・23・28・78）などで埴輪片が出土した程度である。約１km 東に稲荷山古墳［43］が位置し、直径約 30 m程度の円墳で、６世紀後半頃の築造と推定される。７世紀になると、約２km 北に総社古墳群の愛宕山古墳［ロ］・宝塔山古墳［ハ］・蛇穴山古墳［ニ］や山王廃寺［ホ］が建立されて、政治的中枢を形成する。本遺跡周辺では蒼海（７・９・10・35）で、大規模な掘立柱建物跡群と区画溝、飛鳥Ⅱの畿内産暗文坏が出土しており、遺構の主軸方向は、山王廃寺下層の大規模掘立柱建物跡群に近似する。７世紀の住居跡は広く分布するが、前代に比べると減少し、数軒単位の小規模な群構成が点在する。本遺跡でも該期の住居跡を調査した。

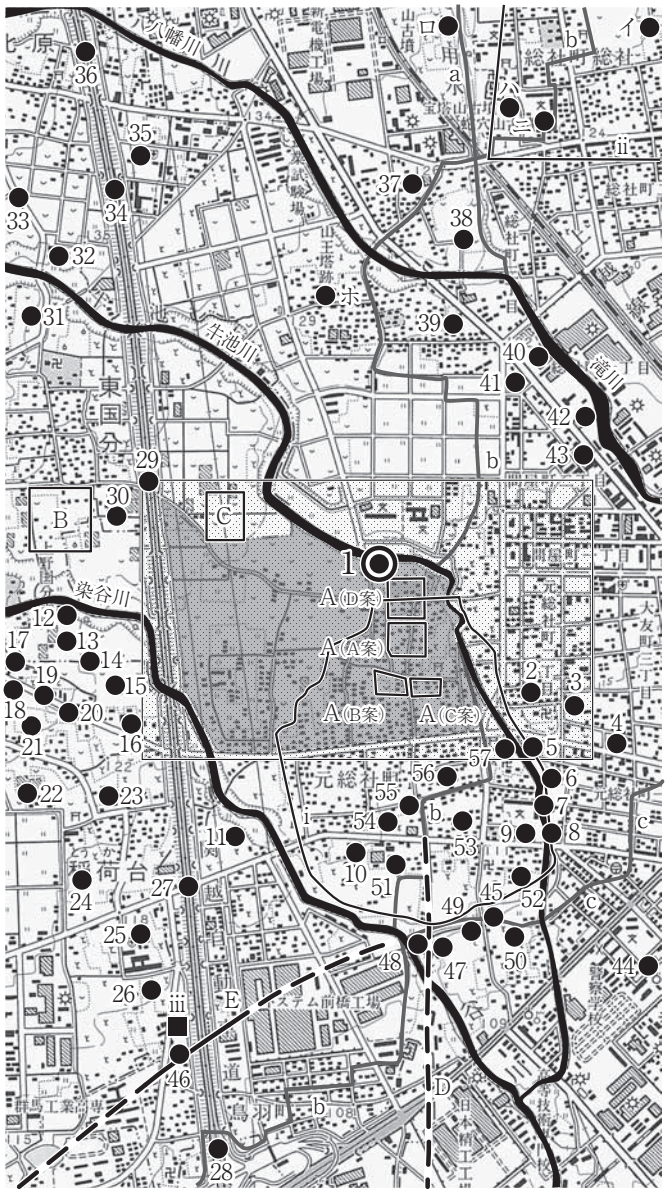
奈良時代、本遺跡の周辺は上野国府の推定域にあたり、国庁の位置には Ａ～Ｄの４案が推定される。宮鍋神社南面の国庁Ｃ案推定域やその周囲では、蒼海（99・127・136）・上野国府等範囲内容確認調査（※以下「国府」）28・33・34 トレンチで掘込地業をもつ建物跡が確認され、蒼海（95・136）では大型掘立柱建物跡が確認されている。一方、この域内では８世紀後半から９世紀末葉まで、住居跡は確認されていない。該期には直進性を指向する大規模な道路網も整備され、蒼海（１）・小見内Ⅲ・Ⅶ遺跡・上野国分僧寺・尼寺中間地域などでは、国分僧寺・尼寺の南面を走る東西道路が、蒼海（２・13・20）・小見Ⅱ・Ⅶ遺跡などでは、染谷川自然堤防上を走る南北道路が確認されている。また、蒼海（14・30・17 街区）・国府６トレンチなどで確認された南北道路は、推定「日高道」（Ｄ）と山王廃寺西側に推定される「南北古道」（近藤 1981）を直線的に繋ぐ一連の道路の一部と予想され、本遺跡Ａ区Ｒ－１号道路状遺構も、この道路の一部と判断できる。国府域の特殊性は出土遺物にも反映され、暗文坏や、須恵器盤・高盤の出土率は他地域に比べて高く、30 地点以上に出土例があり、蒼海（13・41）で三彩陶器、蒼海（１・38・40）で腰帯具、蒼海（26・60）では円面硯なども出土している。

平安時代になると、中小規模の住居跡が無数に確認され、本遺跡でも該期の住居跡を調査した。上野国府域の空間構成は、近年では地点毎の特徴を示す遺物も増加し、検討の俎上にある。例えば、国府域の北西端で国分僧寺・尼寺にも近い、蒼海（26・40・41・116）、小見Ⅱ遺跡などでは、腰帯具・円面硯の出土率が高く、鉄鉢形土器・三足盤・金の付着した灰釉陶器、富壽神寶などの特徴的な遺物や、「大館」「市」「金」などの墨書土器が出土している。国府域の西端にあたる染谷川左岸自然堤防上の蒼海（８・13）では緑釉陶器の出土率が特に高い。国府域の北東端にあたる牛池川右岸の蒼海（37・39・53）などでは、馬具・小札・刀装具・鉄鏃など武器・武具の出土が目立つ。なお、国府に関連すると考えられる区画溝は、蒼海（２・９・36・58）、閑泉樋遺跡などで確認されている。上野国府がいつまで本来的な意味を有していたかは不明だが、平安時代後半期の国府域を特徴づける遺物も地点的に確認できる。国庁Ｂ案推定域の国府 50 トレンチでは「阿部私印」銅印が出土した。国

庁Ｃ案推定域の蒼海（99・127）では、多角柱状の長い棒状脚部をもつ白色の酸化焔焼成高坏が数点出土し、元総社小学校寄贈資料の同一器種や蒼海（127）で出土した「ての字状口縁」皿とともに、都城の器種組成との類似性が指摘される。蒼海（137）では八稜鏡を含む複数の鏡・鉄鐸・鉄鈴などが集中的に出土し、遺物の質において周囲と隔絶している。また、蒼海（75 街区）では、小銅仏や銅印の鋳型・取瓶・金属箔などが鋳造工房から出土し、類似の小銅仏は蒼海（95）から出土している。なお、天慶２年（939 年）、国府域は平将門の乱の舞台となるが、関連する考古資料は確認されていない。

国府域は、蒼海城［ｉ］により大規模に地形改変されている。国庁推定域内の、蒼海（23・29・65・122・124・126）などでは蒼海城中枢部の堀跡群が、蒼海（21）では、二の丸の柱穴群が確認され、帰属時期は 15 世紀を中心とする。関連遺物は、蒼海（23・25）で、12 ～ 15 世紀の青白磁梅瓶、青磁酒会壺蓋・袴腰香炉などの貿易陶磁が多数出土している。室町時代、総社長尾氏は、往時に「総社城」と呼ばれたこの城を本拠とした。

慶長６年（1601 年）、秋元長朝が総社領主になると蒼海城は廃城し、総社城［ii］が築城された。長朝は領内の灌漑体系の整備を行い、天狗岩用水［ａ］を開削した。天狗岩用水の水路網は、五千石堰用水［ｂ］や小笠原堰用水［ｃ］により補われるが、これらは相馬ヶ原扇状地を水源とする午王頭川や八幡川の中小河川から取水し、一方で、利根川から取水する天狗岩用水とは、異なる灌漑系統をもつ。その開削時期は天狗岩用水を遡る可能性があり、上野国神名帳に残る「小笠原溝口明神」の記載は、小笠原堰用水を指すとの指摘もある（都丸 1943、近藤［出版年不詳］）。また、甲稲荷塚大道西遺跡Ａ区や、西部第一落合遺跡群（１）［45］では、これらの用水路と同一方向に流下する、As-B 降下以前に埋没した大規模な溝跡が確認されている。



＝元総社蒼海遺跡群　＝Fig.３の範囲

1.元総社蒼海遺跡群(141)　2.屋敷･屋敷Ⅱ遺跡　3.堰越Ⅱ遺跡　4.堰越遺跡　5.大友屋敷Ⅱ･大友屋敷Ⅲ遺跡　6.元総社明神遺跡Ⅰ～Ⅶ　7.元総社寺田遺跡Ⅰ～Ⅲ　8.寺田遺跡　9.元総社小学校遺跡､国府20･21･30･41･42･48･51トレンチ　10.天神･天神Ⅱ遺跡　11.弥勒･弥勒Ⅱ遺跡　12.元総社西川遺跡　13.上野国分寺参道遺跡　14.元総社西川･塚田中原遺跡　15.塚田中原遺跡　16.塚田村東遺跡　17.引間松葉遺跡Ⅲ区　18.塚田中原遺跡　19.塚田中原遺跡Ｏ区　20.塚田村東Ⅳ遺跡　21.塚田村東Ⅲ遺跡　22.塚田村前遺跡　23.塚田村東Ⅱ･稲荷台村北遺跡　24.稲荷台村南遺跡　25.稲荷台･北金尾遺跡　26.稲荷台東金尾遺跡　27.鳥羽遺跡　28.中尾遺跡　29.上野国分僧寺･尼寺中間地域遺跡　30.上野国分二寺中間地域遺跡　31.西国分薬師廻り遺跡　32.国分境Ⅲ遺跡　33.西国分Ⅱ遺跡　34.国分境遺跡　35.北原一町畑Ⅲ遺跡　36.北原遺跡　37.村東遺跡　38.大屋敷遺跡Ⅰ～Ⅳ　39.昌楽寺廻向･昌楽寺廻向Ⅱ遺跡　40.産業道路東遺跡　41.産業道路西遺跡　42.稲荷塚東遺跡　43.稲荷山古墳　44.元総社稲葉遺跡　45.西部第一落合遺跡群(1)　46.国府45トレンチ　47.国府52トレンチ　48.国府53トレンチ　49.国府24a･bトレンチ　50.国府25トレンチ　51.国府26･46トレンチ　52.国府23トレンチ　53.国府31･32トレンチ　54.国府54トレンチ　55.国府15･16トレンチ　56.国府43･44トレンチ　57.国府17～19･22トレンチ
イ.遠見山古墳　ロ.愛宕山古墳　ハ.宝塔山古墳　ニ.蛇穴山古墳　ホ.山王廃寺跡
A.上野国庁推定地(A～D案)　B.上野国分僧寺　C.上野国分尼寺　D.日高道推定地　E.東山道駅路国府ルート推定地
i.蒼海城跡　ii.総社城跡　iii.金尾城跡
a.天狗岩用水　b.五千石堰用水　c.小笠原堰用水

Fig.２　周辺遺跡図（Ｓ＝1/25,000）

Tab. 1　周辺遺跡一覧表（Fig. ３範囲）

遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
元総社蒼海遺跡群（１）	2005	**古墳～平安**：住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構ヵ、**中世**：堀跡（蒼海城）　◇縄文土器（前期）・緑釉・灰釉・盤・こね鉢・鉄鏃・鉄鋌・腰帯具・権ヵ
元総社蒼海遺跡群（２）	2005	**奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構・大溝・土坑墓、**中世以降**：土坑墓・道路状遺構　◇灰釉・盤・高盤・鉄鏃・埴輪
元総社蒼海遺跡群（３）・元総社小見Ⅶ遺跡	2005	**縄文**：住居跡、**古墳・奈良・平安**：住居跡・掘立柱建物跡・道路状遺構、**中世**：畠跡　◇縄文土器（前～後期）・灰釉・円面硯・権ヵ・紡錘車・墨書「墓」・土錘
元総社蒼海遺跡群（４）	2005	**縄文**：住居跡、**古墳・奈良・平安**：住居跡・竪穴状遺構　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・盤・鉄鉢形土器・飾金具・墨書「連」ヵ・紡錘車・土錘・臼玉・石製模造品
元総社蒼海遺跡群（５）	2005	**古墳**：住居跡、**奈良・平安**：住居跡、**中世**：道路状遺構・周溝状遺構・土坑墓・火葬墓　◇暗文坏・板碑・管玉・臼玉

遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
元総社蒼海遺跡群（６）	2005	古墳：砂岩採掘坑、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構・鍛冶遺構・区画溝、中世：堀跡（蒼海城）・土坑墓　◇灰釉・鉄鏃
元総社蒼海遺跡群（７）	2005	飛鳥：区画溝、平安：住居跡・大溝・砂岩採掘坑、中世：大溝　◇灰釉・羽口・埴輪
元総社蒼海遺跡群（８）	2006	古墳・奈良・平安：住居跡、中世以降：道路状遺構　◇緑釉・灰釉・三足土器・灯明具・鉄鏃・鉄鍋・勾玉
元総社蒼海遺跡群（９）（10）	2006	縄文：住居跡、古墳：住居跡・竪穴状遺構、飛鳥：住居跡・掘立柱建物跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構・大溝・砂岩採掘坑　◇縄文土器（中期～晩期）・弥生土器（中期）・灰釉・鉄鏃・小札・鉄鎌・紡錘車・土錘・石製模造品・埴輪
元総社蒼海遺跡群（11）	2006	古墳～平安：住居跡・竪穴状遺構、中世：堀跡（蒼海城）　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・暗文坏・土錘・勾玉・臼玉
元総社蒼海遺跡群（12）	2006	古墳・奈良・平安：住居跡、中世以降：土坑墓　◇灰釉・暗文坏・鉄鏃
元総社蒼海遺跡群（13）	2008	縄文：住居跡、古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・工房跡・道路状遺構・大溝、中世：土坑墓　◇縄文土器（前期）・緑釉・灰釉・馬具・鉄鏃・鉄釜ヵ・紡錘車・鬼瓦
元総社蒼海遺跡群（14）	2008	古墳：住居跡・水田跡・畠跡、飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：堀跡（蒼海城）・竪穴状遺構　◇灰釉・暗文坏　［国庁Ａ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（15）	2008	奈良・平安：住居跡、中世：土坑墓　◇灰釉・灯明具
元総社蒼海遺跡群（16）	2008	奈良・平安：住居跡・畠跡　◇灰釉・盤
元総社蒼海遺跡群（17）	2008	古墳：住居跡・竪穴状遺構・区画溝、平安：住居跡、中世：土坑墓　◇縄文土器（前期）・弥生土器（後期）・灰釉・灯明具
元総社蒼海遺跡群（18）	2008	平安：住居跡、中世以降：土坑墓　◇灰釉・盤・鉗子ヵ・青磁（12c）
元総社蒼海遺跡群（19）	2008	古墳：水田跡　◇木製舟形容器
元総社蒼海遺跡群（20）	2008	古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構・道路状遺構、中世：土坑墓　◇縄文土器（前～後期）・灰釉陶器・盤・須恵器「壺Ｇ」・暗文坏・灯明具・鉄鏃・鉄鎌・腰帯具・鬼瓦　［国庁Ａ案推定域、国分尼寺南辺含む］
元総社蒼海遺跡群（21）	2009	奈良・平安：大溝、中世：堀跡（蒼海城）・盛土状遺構・方形竪穴　◇灰釉・白磁（12c）・青磁（15c）　［国庁Ｂ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（22）	2009	古墳・飛鳥：住居跡、平安：住居跡・竪穴状遺構・道路状遺構ヵ　◇灰釉・暗文坏・洗（大形盤）ヵ・灯明具・鉄鍵
元総社蒼海遺跡群（23）	2009	古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・大溝、中世：堀跡（蒼海城）　◇白磁（15c）・青磁（13～15c）・天目茶碗　［国庁Ｂ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（24）	2009	縄文：住居跡、古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構、中世：方形竪穴・道路状遺構　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・盤・竈形土製品・腰帯具・鉄鏃・紡錘車・土錘・青磁（14c）
元総社蒼海遺跡群（25）	2009	古墳・平安：住居跡　◇灰釉・鉄鏃・青白磁梅瓶（12～14c）　［国庁Ａ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（26）	2009	飛鳥・奈良：住居跡、平安：住居跡・竪穴状遺構、土坑墓、中世：堀跡（蒼海城）　◇緑釉・灰釉・円面硯・盤・高盤・暗文坏・紡錘車・鉄鏃・腰帯具・土錘・墨書「大舘」
元総社蒼海遺跡群（27）	2009	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構、中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴　◇縄文土器（前～晩期）・弥生土器（後期）・灰釉・盤・洗ヵ・灯明具・鉄鏃・埴輪
元総社蒼海遺跡群（28）	2009	古墳：住居跡・大溝、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構、中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴　◇縄文土器（前～晩期）・弥生土器（後期）・灰釉・盤・鉄鏃・馬具・紡錘車・羽口・埴輪
元総社蒼海遺跡群（29）	2009	古墳～平安：住居跡、中世以降：堀跡（蒼海城）・掘立柱建物跡・地下式坑・土坑墓・火葬跡　◇灰釉・鉄鏃・鉄滓　［国庁Ｂ・Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（30）	2009	古墳・平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）・道路状遺構・土坑墓・火葬跡　◇縄文土器（前・中期）・鉄鏃
元総社蒼海遺跡群（31）	2009	古墳：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）、時期不明：道路状遺構　◇土錘・埴輪　［国庁Ａ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（32）	2010	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）・竪穴状遺構　◇縄文土器（前期）・灰釉・鉄鏃　［国庁Ｄ案推定域含む］
元総社蒼海遺跡群（33）	2010	古墳：粘土採掘坑、飛鳥・奈良：住居跡、平安：住居跡・大溝ヵ・土坑墓　中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴・土坑墓　◇高盤・こね鉢・鉄鉢形土器
元総社蒼海遺跡群（34）	2010	奈良・平安：住居跡、中世以降：堀跡（蒼海城）・竪穴状遺構　◇灰釉・暗文坏・羽口・紡錘車
元総社蒼海遺跡群（35）	2010	縄文：住居跡、古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・布掘掘立柱建物跡・掘立柱建物跡、中世：堀跡（蒼海城）・土坑墓　◇縄文土器（前期）・灰釉・高盤・盤・畿内産暗文坏・鉄斧・鉄鑿ヵ・紡錘車・墨書「田」「天（則天文字）」
元総社蒼海遺跡群（36）	2010	古墳：畠跡、平安：住居跡・水田跡・大溝・砂岩採掘坑、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・盤・灯明具・鉄鏃・埴輪・板碑　［国庁Ｂ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（37）	2011	古墳・飛鳥：住居跡、平安：住居跡・竪穴状遺構・土坑墓、中世：堀跡（蒼海城）　◇縄文土器（後期）・弥生土器（後期）・灰釉・こね鉢・灯明具・榷ヵ・鉄鏃・弓筈ヵ・馬具・羽口・鉄滓・炉壁・紡錘車・土錘・耳環・臼玉・石製模造品　［国庁Ａ・Ｄ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（38）	2012	古墳：住居跡・竪穴状遺構・砂岩採掘坑・前方後方形周溝墓ヵ・土器集積・水田跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・大溝・道路状遺構、中世以降：堀跡（蒼海城）・大溝　◇灰釉・高盤・灯明具・腰帯具・鉄鏃・銅鈴・鉄鏃・土錘　［国庁Ａ・Ｄ案推定域含む］
元総社蒼海遺跡群（39）	2012	古墳：住居跡、平安：住居跡・土坑墓、中世以降：大溝　◇弥生土器（前～中期）・灰釉・獣脚土器・灯明具・鉄鏃・鉗子ヵ・小札・刀装具・馬具・腰帯具・鉄鏃・羽口・紡錘車・土錘・切子玉・臼玉　［国庁Ｄ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（40）	2013	縄文：住居跡、古墳・飛鳥：住居跡・竪穴状遺構、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・鍛冶遺構・道路状遺構　◇縄文土器（前～後期）・灰釉・盤・円面硯ヵ・鉄鏃・腰帯具・紡錘車
元総社蒼海遺跡群（41）	2013	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・鍛冶遺構、中世：掘立柱建物跡・道路状遺構　◇縄文土器（前期）・青磁・奈良三彩・緑釉・灰釉（金付着）・盤・鉄鉢形土器・暗文坏・円面硯・須恵器「壺Ｇ」・灯明具・鉄鏃・鉄鉗・腰帯具・羽口・紡錘車・臼玉・刻書「☆（五芒星）」・墨書「金」
元総社蒼海遺跡群（42）	2013	（遺構なし）
元総社蒼海遺跡群（43）	2013	奈良・平安：住居跡、中世：道路状遺構　◇高盤
元総社蒼海遺跡群（44）	2013	奈良・平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（45）	2013	古墳・平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）・地下式坑　◇三足土器・鉄滓・羽口　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（46）	2013	平安：住居跡
元総社蒼海遺跡群（47）	2013	中世：堀跡（蒼海城）・柱列跡
元総社蒼海遺跡群（48）	2013	縄文：住居跡、古墳～奈良：住居跡、平安：住居跡・竪穴状遺構・埋没谷　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・高盤・盤・暗文坏・鉄鏃・鉄鎌・鉄鋤・鉄滓・紡錘車・臼玉
元総社蒼海遺跡群（49）	2013	平安：住居跡
元総社蒼海遺跡群（50）	2013	縄文：住居跡、奈良・平安：住居跡　◇灰釉
元総社蒼海遺跡群（51）	2013	古墳・奈良：住居跡　◇盤・暗文坏
元総社蒼海遺跡群（52）	2013	（遺構なし）
元総社蒼海遺跡群（53）	2013	古墳～平安：住居跡　◇灰釉・灯明具・紡錘車・石製模造品　［国庁Ｄ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（54）	2013	（遺構なし）
元総社蒼海遺跡群（55）	2013	奈良：住居跡
元総社蒼海遺跡群（56）（61）	2013	古墳：方形周溝墓・住居跡・竪穴状遺構、奈良・平安：住居跡　◇縄文土器（前・中期）・弥生土器（後期）・紡錘車
元総社蒼海遺跡群（57）	2014	中世：堀跡（蒼海城）　◇高盤・馬骨・青磁（15～16c）　［国庁Ｂ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（58）	2014	平安：大溝、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・温石　［国庁Ｂ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（59）	2014	平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴
元総社蒼海遺跡群（60）	2014	古墳：住居跡、飛鳥：大溝、平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇緑釉・灰釉（朱墨転用硯）・盤・円面硯・刀装具・鉄滓
元総社蒼海遺跡群（62）	2014	古墳：周溝墓
元総社蒼海遺跡群（63）	2014	古墳・平安：住居跡　◇紡錘車・管玉・臼玉
元総社蒼海遺跡群（64）	2014	奈良ヵ：製鉄炉、平安：住居跡、中世：方形竪穴・土坑墓　◇鉄滓・炉壁　［国庁Ａ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（65）	2014	古墳・平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（66）	2013	古墳：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（67）	2013	古墳：住居跡
元総社蒼海遺跡群（68）	2013	奈良：住居跡、中世以降：方形竪穴
元総社蒼海遺跡群（72）	2013	平安：住居跡　◇灰釉
元総社蒼海遺跡群（73）	2013	時期不明：道路状遺構
元総社蒼海遺跡群（74）	2014	古墳・平安：住居跡
元総社蒼海遺跡群（75）	2014	平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（76）	2014	平安：住居跡　◇灰釉
元総社蒼海遺跡群（77）	2014	（遺構僅か）
元総社蒼海遺跡群（78）	2014	古墳～平安：住居跡　◇灰釉・円筒埴輪
元総社蒼海遺跡群（79）	2014	古墳～平安：住居跡　◇緑釉・灰釉・墨画ヵ・鉄鏃・羽口
元総社蒼海遺跡群（80）	2014	古墳・奈良：住居跡
元総社蒼海遺跡群（81）	2014	古墳：方形周溝墓・住居跡、飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構　◇紡錘車・管玉・臼玉・石製模造品
元総社蒼海遺跡群（82）	2014	古墳・平安：住居跡
元総社蒼海遺跡群（83）	2014	（遺構僅か）
元総社蒼海遺跡群（84）	2014	飛鳥：住居跡　◇高盤
元総社蒼海遺跡群（85）	2014	飛鳥～平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇緑釉・灰釉・羽口
元総社蒼海遺跡群（88）	2014	時期不明：畠跡
元総社蒼海遺跡群（89）	2014	中世：竪穴状遺構

遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
元総社蒼海遺跡群（90）	2014	中世：竪穴状遺構
元総社蒼海遺跡群（91）	2014	飛鳥～平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・盤・金銅小仏
元総社蒼海遺跡群（92）	2014	（遺構なし）
元総社蒼海遺跡群（93）	2014	奈良・平安：大溝、中世：堀跡（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（94）	2014	中世：堀跡
元総社蒼海遺跡群（95）	2014	古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・大溝　◇灰釉・灯明具　　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（96）	2014	（遺構なし）　　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（97）	2014	平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇灰釉・灯明具・馬具
元総社蒼海遺跡群（98）	2014	中世：掘立柱建物跡　　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（99）・国府 33・34 トレンチ	2015	奈良・平安：掘込地業建物跡　　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（100）	2014	古墳：周溝墓、飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：掘立柱建物跡・道路状遺構　◇縄文土器（晩期）・灰釉・鉄滓・埴輪
元総社蒼海遺跡群（101）	2014	縄文：竪穴状遺構・土坑墓、飛鳥・奈良：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓、中世：堀跡（蒼海城）・掘立柱建物跡 ◇縄文土器（後期）・灰釉・槍鉋ヵ
元総社蒼海遺跡群（102）	2015	中世：堀跡　◇灯明具　　［国庁Ｂ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（103）	2015	縄文：住居跡、古墳～平安：住居跡　◇縄文土器（前・中期）・灰釉・盤状坏・灯明具・「有鍔台付鉢」
元総社蒼海遺跡群（116）	2016	縄文・古墳～奈良：住居跡、平安：住居跡・道路状遺構、中世：道路状遺構　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・高盤・暗文坏・灯明具・「有鍔台付鉢」・墨書「財」ヵ「朝」、墨書瓦「（那）波郡朝倉」、「国分寺」銘瓦、富壽神寶、錫杖、鉄鏃、羽口
元総社蒼海遺跡群（117）	2016	飛鳥：住居跡、奈良・平安：区画溝
元総社蒼海遺跡群（118）	2016	平安：住居跡・土坑墓、中世以降：粘土採掘坑　◇灰釉・国分寺鬼瓦・鉄鏃
元総社蒼海遺跡群（120）	2016	平安：掘立柱建物跡　◇縄文土器（前期）
元総社蒼海遺跡群（121）	2016	飛鳥：住居跡・区画溝、奈良・平安：区画溝・土坑墓　◇貝巣穴痕軟質泥岩
元総社蒼海遺跡群（122）	2016	古墳：住居跡・竪穴状遺構、飛鳥・奈良：住居跡、平安：住居跡・掘込地業建物跡・道路状遺構・竪穴状遺構、中世：堀跡（蒼海城）・土塁（蒼海城） ◇緑釉・灰釉・円面硯・墨書「十」「国」ヵ「代」ヵ・刻書「泰」・馬具（轡・鐙）・鉄鏃・紡錘車・臼玉
元総社蒼海遺跡群（123）	2016	縄文・古墳・飛鳥：住居跡、奈良：道路状遺構、平安：住居跡：道路状遺構、中世：道路状遺構　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・暗文坏・墨書「吉」「田」「七」ヵ・鬼瓦・鉄鏃・鉄滓・石製模造品
元総社蒼海遺跡群（124）	2017	中世：堀跡（蒼海城）・土塁（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（126）	2017	平安：住居、中世：堀跡（蒼海城）・土塁（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（127）	2018	古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：掘込地業建物跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇青磁・白磁・緑釉・灰釉・円面硯・こね鉢・「ての字状口縁」皿、羽口・臼玉　　［国庁Ｃ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（128）	2018	古墳：住居跡・水田、飛鳥～平安：鍛冶炉、平安：水田
元総社蒼海遺跡群（129）	2018	中世：堀跡（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（130）	2018	飛鳥・奈良：住居跡、平安：住居跡・土坑墓、中世：堀跡（蒼海城）　◇羽口・紡錘車
元総社蒼海遺跡群（131）	2018	飛鳥～平安：住居跡、中世：堀跡
元総社蒼海遺跡群（134）	2019	古墳：住居跡　奈良・平安：大溝　　◇緑釉・灰釉・鉄滓
元総社蒼海遺跡群（135）	2019	中世：堀跡（蒼海城）　◇羽口・板碑
元総社蒼海遺跡群（136）	2019	飛鳥：住居跡、奈良～平安：掘込地業建物跡・掘立柱建物跡、平安：住居跡　　［国庁Ｃ・Ｄ案推定域］
元総社蒼海遺跡群（137）	2019	古墳～平安：住居跡、中世：堀跡（蒼海城）　◇八稜鏡・五花鏡・素文鏡・鉄鐸・鉄鈴・鉄鏃
元総社蒼海遺跡群（138）	2019	中世：堀跡（蒼海城）
元総社蒼海遺跡群（139）	2019	奈良・平安：住居跡・道路状遺構
元総社蒼海遺跡群（141）	2020	古墳・飛鳥：住居跡、奈良：道路状遺構、平安：住居跡・道路状遺構　◇灰釉・畿内系暗文坏・鉄滓
元総社蒼海遺跡群（17 街区）	2015	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・道路状遺構、中世：土坑墓・火葬跡　◇こね鉢ヵ・板碑
元総社蒼海遺跡群（93 街区）	2016	古墳：畠・粘土採掘坑、奈良・平安：住居跡・粘土採掘坑、中世：堀跡（蒼海城）・掘立柱建物跡　◇縄文土器（中・後期）・灰釉・暗文坏・転用硯・紡錘車・鉄滓
元総社蒼海遺跡群（94 街区）	2017	縄文・古墳・奈良・平安：住居跡　◇縄文土器（前～中）・墨書「馬」「太」「入田」「天（則天文字）」・土錘・鉄鏃・紡錘車・臼玉
元総社小見遺跡	2000	縄文・古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・道路状遺構　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・水瓶・円面硯・馬具・鉄鏃・紡錘車・臼玉
元総社小見Ⅱ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：道路状遺構　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・三足盤・双耳坏・灯明具・鉄鏃・鉄斧・鉗子・墨書「市」・紡錘車・臼玉
元総社小見Ⅲ遺跡	2002	縄文：住居跡、古墳・飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡、中世以降：堀跡（蒼海城）・道路状遺構・土坑墓　◇縄文土器（中期）・緑釉・灰釉・暗文坏・国分寺鬼瓦・耳環・臼玉
元総社小見Ⅳ遺跡	2003	縄文・古墳～平安：住居跡、中世：道路跡　◇縄文土器（中期）・灰釉・灯明具・鉄鏃・弓筈ヵ・紡錘車・土錘
元総社小見Ⅴ遺跡	2003	縄文：住居跡、古墳・平安：住居跡・掘立柱建物跡、中世：畠跡　◇縄文土器（前～後期）・灰釉
元総社小見Ⅵ遺跡	2004	縄文・古墳～平安：住居跡　◇縄文土器（前・中期）・緑釉・灰釉・水瓶・鉄鏃・鉄斧・鉄鋤・鉄鎌・腰帯具・紡錘車・権ヵ・墨書「庄」
元総社小見内Ⅲ遺跡	2001	弥生：住居跡、古墳：住居跡、飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構・土坑墓、中世：掘立柱建物跡・方形竪穴・堀跡（蒼海城）・道路状遺構・土坑墓・火葬墓　◇縄文土器（中期）・弥生土器（中期）・緑釉・灰釉・盤・こね鉢・暗文坏・風字硯・鉄鏃・火打金・鉗子・飾金具・腰帯具・竈形土製品・臼玉
元総社小見内Ⅳ遺跡	2002	飛鳥：住居跡、奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・竪穴状遺構・道路状遺構・周溝状遺構、中世：堀跡（蒼海城）・土坑墓　◇灰釉・盤・こね鉢
元総社小見内Ⅵ遺跡	2003	古墳・飛鳥：住居跡、平安：住居跡・掘立柱建物跡・区画溝・道路状遺構・砂岩採掘坑、中世：掘立柱建物跡　◇灰釉・須恵器「壺Ｇ」・鉄鏃・臼玉
元総社小見内Ⅶ遺跡	2003	縄文：住居跡、飛鳥：住居跡、奈良・平安：大溝　◇縄文土器（中期）・盤
元総社小見内Ⅷ遺跡	2003	奈良・平安：住居跡、中世：方形竪穴　◇高盤・こね鉢・暗文坏
元総社小見内Ⅸ遺跡	2004	奈良・平安：住居跡・竪穴状遺構・土器埋納坑　◇灰釉・盤・灯明具・鉄鏃・紡錘車
元総社小見内Ⅹ遺跡	2004	奈良・平安：住居跡・工房跡・粘土採掘坑、中世：堀跡（蒼海城）・土坑墓・火葬跡・道路状遺構　◇縄文土器（晩期）・灰釉・金片・金粒
元総社草作遺跡	1984	飛鳥～平安：住居跡　◇縄文土器（中期）・高盤・腰帯具・白磁（15c）・青磁（13c）
元総社草作Ⅴ遺跡	2002	古墳～平安：住居跡・粘土採掘坑、中世以降：堀跡（蒼海城）・土坑墓・火葬跡　◇白磁（11c ～ 12c）・鉄鏃・臼玉
元総社宅地遺跡１～８トレンチ	2000	古墳・平安：住居跡　◇紡錘車　　［国庁Ｄ案推定域］
元総社宅地遺跡９～ 18・21 トレンチ	2000	中世：堀跡（蒼海城）・方形竪穴　　［国庁Ｂ案推定域］
元総社宅地遺跡 19 トレンチ	2000	中世：堀跡（蒼海城）　　［国庁Ｃ案推定域］
元総社宅地遺跡 20 トレンチ	2000	（遺構僅か）　　［国庁Ａ案推定域］
元総社宅地遺跡 22・23 トレンチ・国府 13 トレンチ	2000・2012	古墳：住居跡、飛鳥～平安：住居跡（平安）・掘立柱建物跡（奈良）・大溝・道路状遺構　◇獣脚土器
国府１～７トレンチ	2011	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡（平安）・大溝・道路状遺構　　［国庁Ａ案推定域］
国府8～11・13・14・28トレンチ	2012	古墳：住居跡、奈良（8c 前半）：住居跡、奈良～平安：住居跡・掘込地業建物跡　◇石製模造品　　［国庁Ｃ案推定域］
国府 12 トレンチ	2012	古墳・平安：住居跡
国府 27 トレンチ	2016	平安：住居跡　◇緑釉・灰釉
国府 28 トレンチ	2016	古墳：住居跡、奈良：掘込地業建物跡、平安：住居跡・掘込地業建物跡　◇銅滓
国府 29 トレンチ	2016	奈良・平安：大溝、中世：堀跡（蒼海城）　◇墨書「夫」ヵ
国府 35 トレンチ	2017	古墳：住居跡　奈良・平安：掘込地業建物跡　中世：竪穴状遺構　◇灰釉　　［国庁Ｂ案推定域］
国府 36 トレンチ	2017	平安：住居跡　◇盤・転用硯・碁石　　［国庁Ｂ案推定域］
国府 37 トレンチ	2017	古墳：住居跡　古墳～飛鳥：区画溝　　［国庁Ｂ案推定域］
国府 38 トレンチ	2017	古墳：住居　奈良～平安：掘立柱建物跡　平安：住居跡　中世：掘立柱建物跡　◇灰釉・転用硯・碁石　　［国庁Ｂ案推定域］
国府 39 トレンチ	2017	（遺構僅か）
国府 40 トレンチ	2017	奈良・平安：大溝
国府 49 トレンチ	2018	（遺構僅か）
国府 50 トレンチ	2019	飛鳥：住居跡　平安：住居跡・道路状遺構　◇白磁・灰釉・托・銅印「阿部私印」　　［国庁Ｂ案推定域］
上野国分尼寺 （上野国分尼寺寺域確認調査）	1969・1970・1999・2000	奈良：講堂跡・金堂跡・中門跡・東門跡・築地塀跡・住居跡、平安：住居跡
総社甲稲荷塚大道西遺跡	2001	奈良・平安：住居跡・掘立柱建物跡・用水路ヵ、中世：畠跡　◇緑釉・灰釉・勾玉・管玉
総社甲稲荷塚大道西Ⅱ遺跡	2001	古墳：住居跡、平安：住居跡　◇緑釉・灰釉・銅鉢・紡錘車・管玉・鉄滓
総社甲稲荷塚大道西Ⅲ遺跡	2002	古墳：住居跡、奈良・平安：住居跡・畠跡　◇緑釉・灰釉・石製模造品・紡錘車
総社甲稲荷塚大道西Ⅳ遺跡	2003	古墳：畠跡、中世以降：道路状遺構・畠跡
総社閑泉明神北遺跡	1999	古墳：水田跡・畠跡　◇縄文土器（前～晩期）・灰釉・鉄滓・勾玉

遺跡名	調査年度	時代：主な遺構・遺物
総社閑泉明神北Ⅱ遺跡	2001	**古墳・平安**：住居跡　◇灰釉・管玉
総社閑泉明神北Ⅲ遺跡	2002	**縄文・古墳～平安**：住居跡　◇灯明具
総社閑泉明神北Ⅳ遺跡	2002 ～ 2004	**古墳**：水田跡・畠跡
総社閑泉明神北Ⅴ遺跡	2004	**古墳**：水田跡、**奈良・平安**：住居跡
閑泉樋遺跡	1983	**古墳**：住居跡、**奈良・平安**：大溝
閑泉樋南遺跡	1985	**古墳**：住居跡　◇紡錘車
元総社北川遺跡	2002 ～ 2004	**縄文～弥生**：旧河道、**古墳**：住居跡・水田跡・粘土採掘坑・旧河道、**平安**：住居跡・掘立柱建物跡・畠跡、**中世以降**：掘立柱建物跡・水田跡・火葬墓 ◇縄文土器（晩期）・弥生土器（後期）・灰釉・盤・暗文坏
元総社牛池川遺跡	2002 ～ 2004	**古墳**：水田跡・土器集積遺構、**中世**：火葬跡

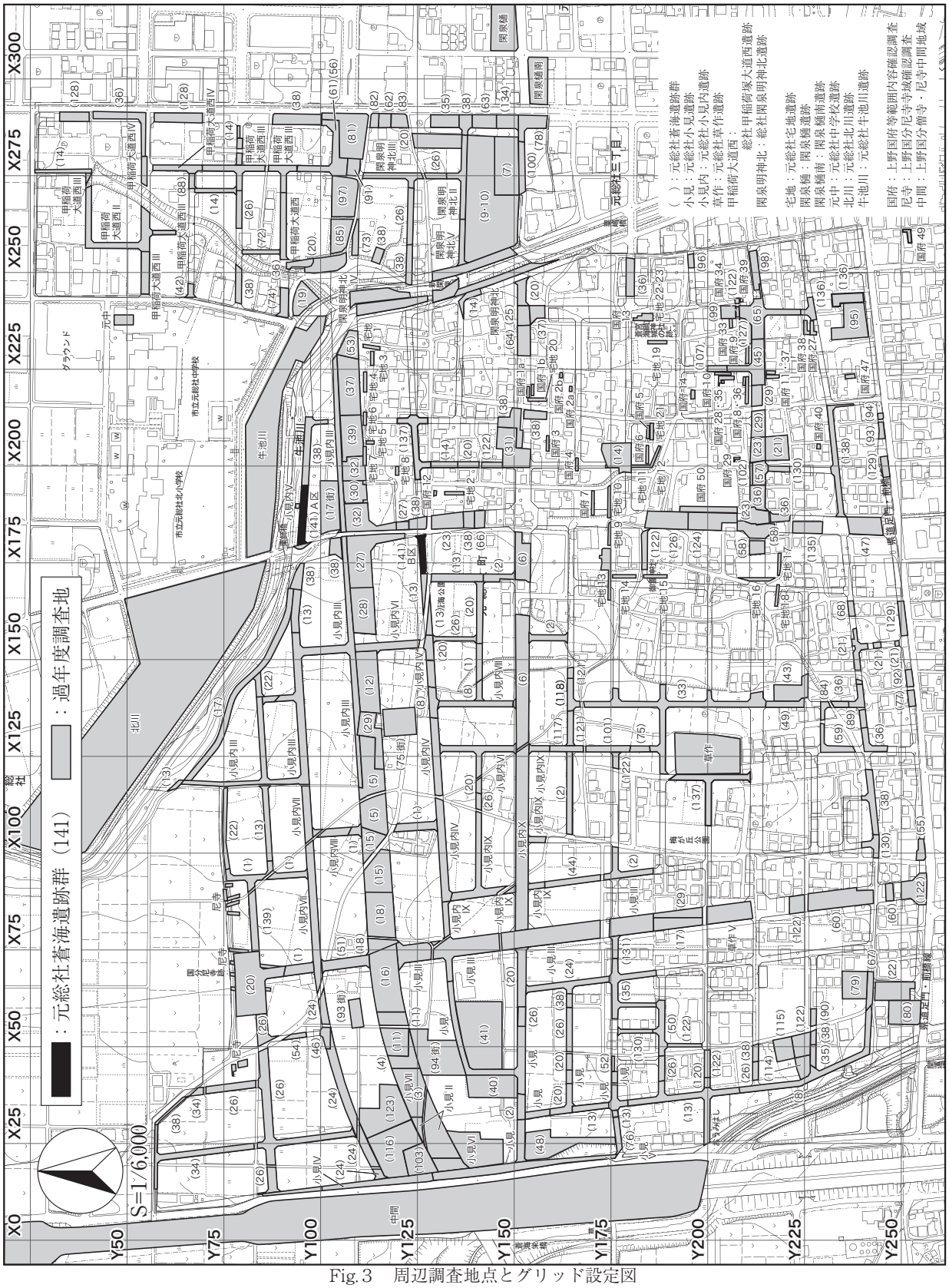


Fig.3　周辺調査地点とグリッド設定図

Ⅲ　調査の方針と経過

１　調査範囲と基本方針

委託調査箇所は、前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業の道路予定地であり、調査面積は、559 ㎡である。グリッド座標については国家座標（日本測地系第Ⅸ系）X = 44000.000、Y = － 72200.000 を基点とする４ｍピッチのものを使用し、経線をＸ、緯線をＹとして北西隅を基点に番付して呼称とした。調査区の公共座標は次のとおりである。

測点	日本測地系（第Ⅸ系）	世界測地系（第Ⅸ系）
X 135、Y 165	X = 43340.000 m、Y = － 71660.000 m	X = 43694.9094 m、Y = － 71951.7596 m

発掘調査にあたり、北側調査区をＡ区、南側調査区をＢ区とした。表土除去には重機（0.45 ㎥級バックホウ）を用いた。表土除去は As-B 混入土層の下層を目安とし、いずれの調査区でも As-C 混入黒色土層～総社砂層を遺構確認面とした。遺構確認面はジョレンで精査し、平面的な土質の差により遺構を判断した。遺構の掘り下げは、埋没過程を観察するため土層断面を残しつつ行った。遺構に伴う遺物は、出土位置を記録した上で取り上げた。なおＡ区Ｒ－１の調査では、掘削深度が３ｍ以上に達したため、調査区壁に法面による養生を施した。

遺構の図面記録は、断面図・平面図・遺物の出土位置について、トータルステーション・電子平板を用い、オルソーフォトを用いた写真測量も多用した。写真記録は、土層断面・完掘状況・遺物出土状況に対し、35mm 判モノクロ・リバーサルフィルム（CanonEOS55・EF28-105mm/ACROS・ISO100/PROVIA・ISO100）とデジタルカメラ（CanonEOS ６D・EF24-70mmL）を用い、基本的に絞り値ｆ８～11・広角端で撮影を行った。なお、調査区の全景写真撮影にはドローン（DJI Phantom ４）を用いた。

報告書の作成に際しては、DTP の手法を用いた。遺構図については、原図の作図から報告書掲載の編集図に至るまで一貫してデジタルデータを用い、遺物図については、断面形の計測と外面調整の描画に３Ｄスキャナ型三次元測定機（KEYENCE VL-300series）を多用し、一部の大型品は手測りでの原図作成後、デジタルトレースを行った。遺物写真の撮影にはデジタルカメラ（CanonEOS ５D/EF200mmL）を用いた。データ化されたこれら一切の調査記録を、レイアウトソフトを用いて組版し、刊行した。

２　調査経過

令和２年６月４日に市教委・区画整理課・技研の三者で事前打ち合わせを行い、発掘調査は６月 12 日から開始した。先行して除草作業や、周辺の安全対策を行った上で、Ａ区から表土除去を行い、並行して遺構確認や基本層序の確認を進めた。遺構調査は 15 日から開始。16 日にＡ区の表土除去を終了し、翌 17 日には重機を回送してＢ区西半の表土除去を行った。Ｂ区は排土処理の都合、東西で排土を置き換えての調査となったため、調査を優先的に進め、７月２日にＢ区西半の調査と全景写真撮影を終えた。同日、市教委による終了確認が行われ、７～８日にはＢ区西半の埋め戻しと、東半の表土除去を行った。梅雨入りとともに調査を始め、例年にない長梅雨の中、荒天を押しての調査となったが、９日には、今回の主要な調査課題であったＡ区Ｒ－１号道路状遺構も完掘し、10 日にはＡ・Ｂ区ともにすべての遺構を完掘し、各調査区の全景写真撮影と市教委による終了確認が行われた。13 ～ 14 日に掘り方調査などの補足調査と残務を行い、15 ～ 20 日に各調査区を埋め戻し、梅雨明けとともに現地における全ての調査を終えた。

整理作業は、令和２年７月 21 日から着手した。22 日に遺物の洗浄と注記、29 日に分類と報告対象の抽出、31 日には遺物写真撮影を終え、実測を始めた。これらの作業に並行して遺構図面の編集作業を進め、８月７日には遺物実測と遺構図の編集を終えた。原稿執筆と組版は 11 日から行った。13 日に遺物挿図と遺物図版、９月２日に遺構挿図の版下が完成した。25 日には原稿執筆と組版を終了。市教委による査読の後、10 月２日に入稿した。10 月 30 日に報告書を刊行し、全ての作業を終了した。

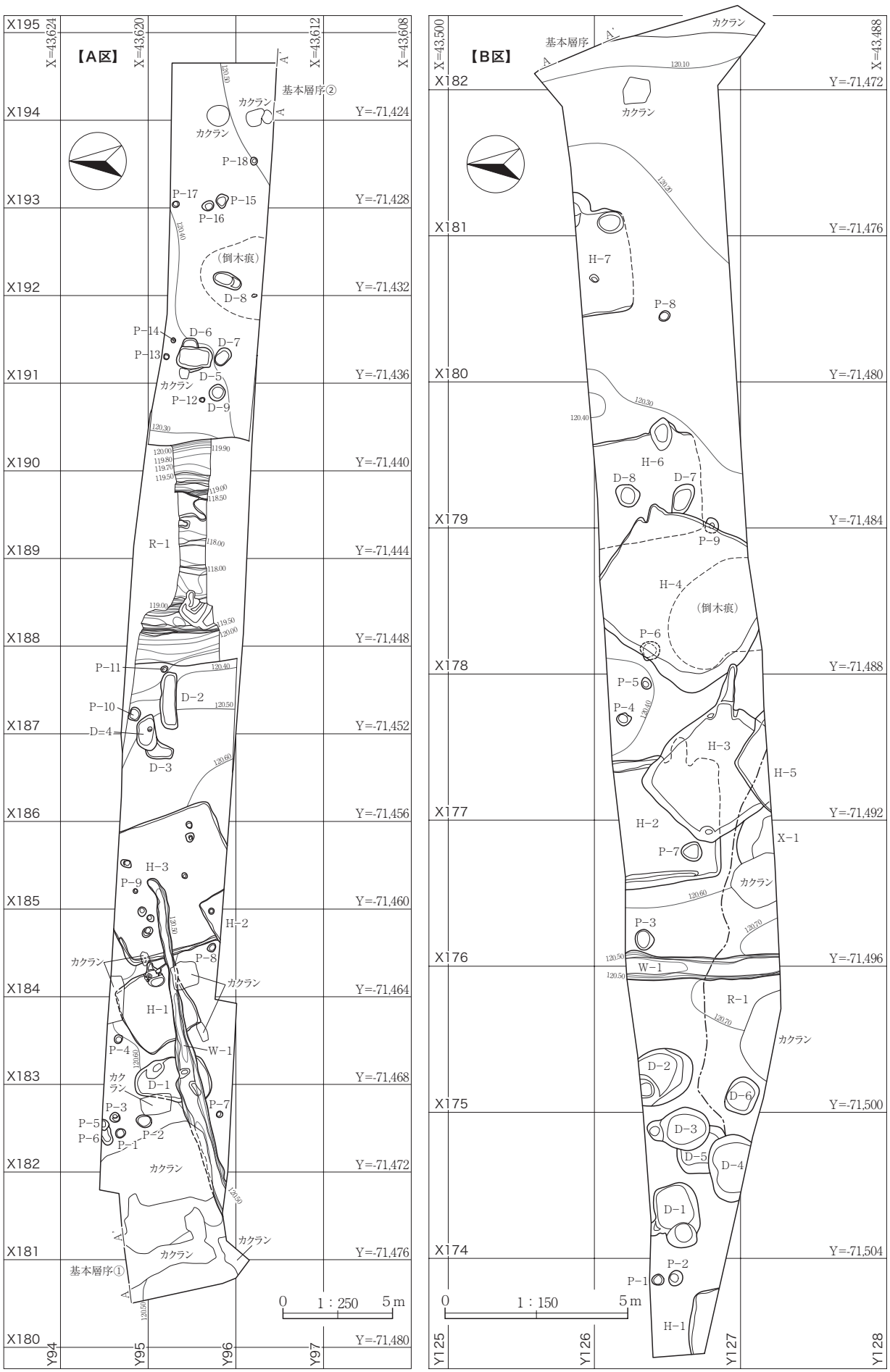

【A区】
【B区】
X=43,624
X=43,620
X=43,612
X=43,608
X=43,500
X=43,488
X195
X194
X193
X192
X191
X190
X189
X188
X187
X186
X185
X184
X183
X182
X181
X180
X182
X181
X180
X179
X178
X177
X176
X175
X174
Y=-71,424
Y=-71,428
Y=-71,432
Y=-71,436
Y=-71,440
Y=-71,444
Y=-71,448
Y=-71,452
Y=-71,456
Y=-71,460
Y=-71,464
Y=-71,468
Y=-71,472
Y=-71,476
Y=-71,480
Y=-71,472
Y=-71,476
Y=-71,480
Y=-71,484
Y=-71,488
Y=-71,492
Y=-71,496
Y=-71,500
Y=-71,504
Y94
Y95
Y96
Y97
Y125
Y126
Y127
Y128
基本層序①
基本層序②
基本層序
カクラン
（倒木痕）
P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
P-7
P-8
P-9
P-10
P-11
P-12
P-13
P-14
P-15
P-16
P-17
P-18
D-1
D-2
D-3
D-4
D-5
D-6
D-7
D-8
D-9
H-1
H-2
H-3
H-4
H-5
H-6
H-7
R-1
W-1
X-1
0
1：250
5m
1：150

Fig. 4　全体図

Ⅳ　基本層序

Ａ区は区画整理以前は畑地で、西端部には墓地が営まれていた。そのため西端部は改葬時の掘削孔によって大きく攪乱されている。東西に長い調査区の旧地形は、東へ下る緩い傾斜地であり、東半部では表土（Ⅰ層）直下に As-B 混入土の上部を構成する暗褐色土（Ⅱ層）が安定的に堆積する。以下には As-B 混入土の下部を構成する黒色砂質土（Ⅲ層）と、Hr-FA の混土層（Ⅳ層）が部分的に観察できるが、堆積は安定しない。その下層には、いわゆる「Ｃ黒」と通称される As-C 混入黒色土（Ⅴ層）～淡色クロボク土（Ⅵ層）が、層厚は薄いものの安定的に堆積しており、東半部ではこのⅤ～Ⅵ層直上を遺構確認面と判断した。西半部は東半よりも地形がやや高いため、Ⅱ～Ⅵ層は流出ないし削平されており、Ⅰ層直下に間層を挟まずに総社砂層のⅧ層が露出する。そのため西半部ではこのⅧ層と、その漸移層（Ⅶ層）直上を確認面と判断した。なお、Ａ区Ｒ－１号道路状遺構壁面の観察では、Ⅷ層土の下部は、密度は高いがしまりの弱い極細粒砂で構成されており、Ⅷ層の約 2.5 m下位には前橋泥炭層の堆積が観察できた。

Ｂ区は区画整理以前は宅地であったが、Ⅰ層の堆積が厚いため、遺構確認面はさほど影響を受けていない。Ａ区東半部同様、Ⅰ層直下にⅡ層が安定的に堆積し、Ⅲ層の堆積は部分的だが、Ⅳ層は安定的に堆積している。Ⅳ層の層位は７世紀前半のＢ区Ｈ－３よりも上位で、10 世紀後半のＢ区Ｈ－７より下位にあり、この間に形成された古代の耕起層と判断できる。以下には、Ⅴ～Ⅵ層が安定的に堆積しており、この直上を遺構確認面と判断した。旧地形は本来、西へ下る緩い傾斜地であったようで、Ⅵ層の堆積は調査区の西側に向かって層厚を増し、湿性でやや粘質土化している。以下にはⅦ～Ⅷ層が安定的に堆積している。

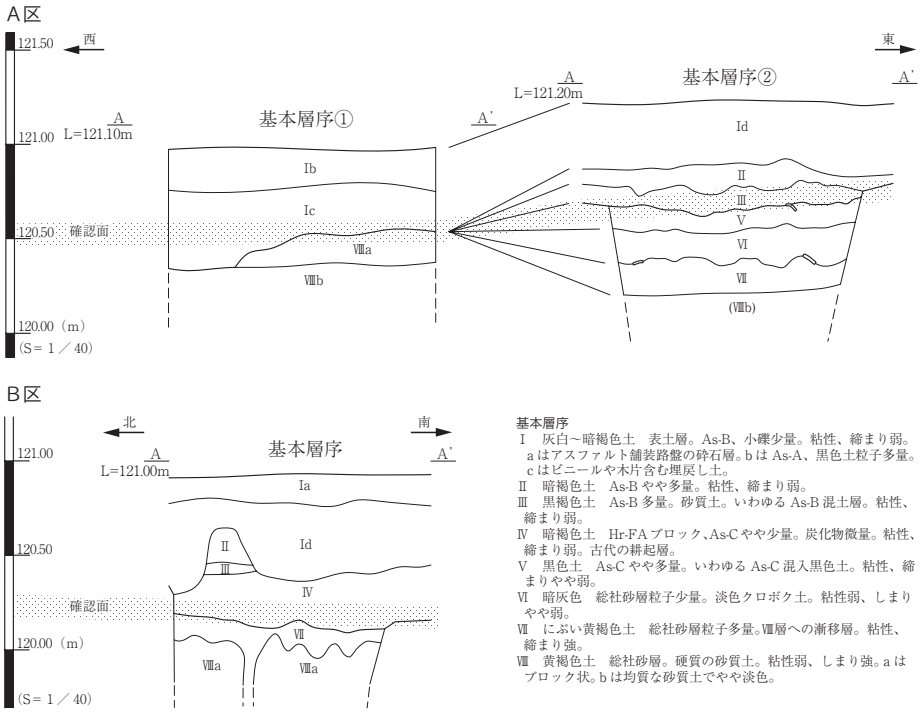


Fig.５　基本層序

Ⅴ　遺構と遺物

（１）竪穴住居跡

Ａ区Ｈ－１号住居跡（Fig. ６・14、PL. １・５）

位置　Ｘ 183・184、Ｙ 94・95　**主軸方向**　Ｅ－33°－Ｎ　**規模**　東西軸 3.61 m・南北軸 3.17 m・深さ 0.18 m　**面積**　12.66 ㎡　**覆土**　As-C を含む暗褐色土を基調とする。　**床面**　カマド手前から西壁際中央付近にかけて帯状に、ややしまりの強い硬化面。　**重複**　Ａ区Ｗ－１と重複。新旧関係は本遺構→Ａ区Ｗ－１。　**カマド**　東壁のやや南寄りで確認。全長 0.81m・燃焼室内幅 0.51m・煙道内幅 0.32m。焚口部付近は廃絶後に掘り込まれている。燃焼室は両袖の構築材に総社砂層の切石を用いるが、右袖の焚口部は抜き取られており、据え穴のみ残る。火床面や灰層は残存しておらず、燃焼室内も廃絶時に相当攪拌されている可能性が高い。燃焼室内の小穴も、支

脚据え穴とするには側壁に寄り過ぎており、廃絶時の攪拌に伴うものと推測できる。燃焼室と煙道部の境は有段で、煙道は短く、底面は平坦。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　北壁際から北西隅部が、不整形な溝状に浅く窪む。南壁際西寄りには掘削工具痕が複数箇所確認できる。　**出土遺物**　１の長胴甕はカマド右側の床面直上に破片が散在する。口縁部に最大径があり胴部は張らず、長胴化が顕著。外面は体部下端から口縁部下端まで１単位の縦位ヘラケズリで最終調整される。２の北武蔵型坏は竪穴部中央付近の床面直上に破片が散在する。口縁部は短く内屈し、やや深身。３は鋺状の鉄製品だが、細片のため詳細は不明。覆土上層出土で、帰属時期も判断しがたい。　**時期**　床面直上出土の１・２から７世紀前半と推定する。隣接するＡ区Ｈ－２と同時期。

Ａ区Ｈ－２号住居跡（Fig. 7・14、PL. 1・5）

位置　X 184・185、Y 95　**主軸方向**　E－29°－N　**規模**　東西軸（2.05）m・南北軸（1.39）m・深さ 0.18 m。竪穴部北東隅部のみ調査。　**面積**　（1.16）㎡　**覆土**　As-C を含む暗褐色土を基調とし、下層は炭化物を含む。**床面**　ほぼ全面に硬化面。　**重複**　Ａ区Ｈ－３と重複。新旧関係はＡ区Ｈ－３→本遺構。　**カマド**　確認できず。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　壁際が不整形でやや深い溝状に窪む。　**出土遺物**　１の模倣坏は、床面直上から正位で出土。小径で浅く、稜部はやや不明瞭。　**時期**　床面直上の１から７世紀前半と推定する。隣接するＡ区Ｈ－１と同時期。

Ａ区Ｈ－３号住居跡（Fig. 6・14、PL. 1・5）

位置　X 184・185、Y 94・95　**主軸方向**　N－20°－W　**規模**　東西軸 6.13 m・南北軸 6.22 m・深さ 0.08 m。周辺は基本層序Ⅱ～Ⅵ層が流出ないし削平されており、遺構の残存状態は悪い。　**面積**　28.49 ㎡　**覆土**　わずかに残存するのみだが、As-C を含む黒褐色土を基調とする。　**床面**　直床。竪穴部の北西部と南東部を除き、広範囲に明瞭な硬化面。　**重複**　Ａ区Ｈ－２、Ａ区Ｗ－１、Ａ区Ｐ－９と重複。新旧関係は本遺構→Ａ区Ｈ－２→Ａ区Ｗ－１、Ａ区Ｐ－９。**カマド**　確認できず。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　Ｐ１～４は主柱穴。深さはＰ１・46cm、Ｐ２・45cm、Ｐ３・57cm、Ｐ４・（13）cm。いずれも明瞭な柱痕跡は確認できず。Ｐ５・６は覆土や底面標高が主柱穴に類似しており、Ｐ１の差し換えに伴う柱穴の可能性がある。　**壁周溝**　西壁際から北西隅部にかけて、細いが明瞭に確認できる。　**掘り方**　なし。　**出土遺物**　１の高坏脚部は床面直上出土。中実で短脚。　**時期**　重複関係と出土遺物の傾向から６世紀と推定する。

Ｂ区Ｈ－１号住居跡（Fig. 7・14、PL. 3・5）

位置　X 173、Y 126　**主軸方向**　N－3°－W　**規模**　東西軸（1.79）m・南北軸（0.90）m・深さ 0.46 m。竪穴部北東隅部のみ調査。　**面積**　（0.80）㎡　**覆土**　As-C を含む暗褐色土を基調とし、最下層は総社砂層ブロックが目立つ。　**床面**　直床で、やや起伏が多い。硬化面は確認できない。　**重複**　なし。　**カマド**　確認できず。**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　なし。　**出土遺物**　覆土下層から出土した１の高台付坏は酸化焔焼成。覆土中から出土した２の坏も酸化焔焼成で、底径は口径の 1/2 程度を示す。覆土には武蔵型甕や羽釜の破片を含むが、細片のため掲載せず。　**時期**　覆土出土も含めた出土遺物の全体的な傾向から、10 世紀前半と推定する。

Ｂ区Ｈ－２号住居跡（Fig. 7・14、PL. 1・5）

位置　X 176・177、Y 126　**主軸方向**　E－5°－N　**規模**　東西軸 4.05 m・南北軸（2.83）m・深さ 0.22 m　**面積**　（8.04）㎡　**覆土**　As-C と炭化物を含む暗褐色土を基調とし、最下層に炭化物の薄層が堆積。　**床面**竪穴部西・南壁際を除き、明瞭な硬化面。　**重複**　Ｂ区Ｈ－３、Ｂ区Ｐ－７と重複。新旧関係はＢ区Ｈ－３→本遺構→Ｂ区Ｐ－７。　**カマド**　東壁の南寄りで確認。竪穴部主軸に対してわずかに南偏する。全長 0.82m・燃焼室内幅 0.36m・煙道内幅 0.24m。燃焼室は、両袖に白色粘土を多く含む褐色の粘質土を用いる。燃焼室中央の支脚手前に火床面が確認できるが、被熱は弱い。カマドの周囲には瓦片が散在し、構築材の一部に瓦を転用していた

可能性がある。支脚は棒状の割石を用いる。燃焼室の奥手に立位で残存し、カマド主軸より若干右に寄る。燃焼室と煙道部の境は不明瞭で、煙道は短く底面は平坦。煙出し部付近の両側壁に、やや扁平な転石が一対配置されており、煙道構造に関わる造作と推測できる。　**火床面**　竪穴部中央やや西寄りの床面に、地床炉状の火床面が確認できる。掘り込みなどの構造は伴わず、鍛造剥片等も含まない。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　東西の壁際に、細いが明瞭に確認できる。　**掘り方**　壁際は不整形な円周状に窪み、中央は島状に高い。中央には不整楕円形の床下土坑が１基確認できる（SPA・SPB の８層）。　**出土遺物**　１の甑と３・４の瓦はカマド崩落土内出土。覆土中には武蔵型甕の破片がやや目立ち、羽釜や酸化焔焼成の須恵器坏の破片はごく少ない。　**時期**　重複関係と、覆土出土も含めた出土遺物の全体的な傾向から、９世紀後半と推定する。

Ｂ区Ｈ－３号住居跡（Fig. ７・８・14、PL. ３・５）

位置　X 176 ～ 178、Y 126・127　**主軸方向**　N － 45°－ E　**規模**　東西軸 4.11 m・南北軸 3.49 m・深さ 0.34 m　**面積**　（7.04）㎡　**覆土**　As-C を含む暗褐色土を基調とし、中層以下は炭化物を含む。　**床面**　カマド手前から竪穴部中央に、ややしまりの強い硬化面。　**重複**　Ｂ区Ｈ－２・４・５、Ｂ区Ｘ－１と重複。新旧関係はＢ区Ｈ－４・５→Ｂ区Ｘ－１→本遺構→Ｂ区Ｈ－２。　**カマド**　東隅角で確認。竪穴部主軸に対して大きく南偏する。いわゆる隅カマドで該期のカマド配置としては特異。全長 1.69m・燃焼室内幅 0.47m・煙道内幅 0.19m。燃焼室は、両袖に白色粘土を多く含む褐色の粘質土を用いる。煙道構造の影響か、焚口部から煙道口付近の左側壁際にかけて帯状にやや強く被熱するため、火床面は分別しがたいが、灰層は焚口部から燃焼室中央にかけて確認できる。支脚は確認できない。燃焼室と煙道部の境は有段で、煙道は長く底面は平坦。左袖直上に１の蓋が逆位で遺棄されており、カマドの廃棄行為に関わるものと推測できる。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　全体的に平坦だが、北隅角のみ不整円形に浅く窪む。　**出土遺物**　１の長胴甕は、カマド手前の床面直上から破損遺棄した状態で出土した。口縁部に最大径があり胴部中位がわずかに張る。外面は体部下半と中位から口縁部下端までの２単位の縦位ヘラケズリで最終調整される。２の蓋はカマド左袖直上出土。TK-209 ～ TK-217 型式の古相に並行する形態的特徴をもつ。３～５は床面直上から正位に重なった状態で出土。いずれも明るい橙色で、やや軟質。３の模倣坏の稜部は不明瞭。４・５は北武蔵型坏で、５はやや大形。外面ヘラケズリの範囲は広く、口縁部は短く直立する。６は覆土出土。胎土は非常にきめ細かく、外面に横位のミガキ、内面は螺旋状暗文で区画した上下に放射状暗文を施す。暗文はごく細密。畿内系暗文坏と判断できる。細片のため詳細不明だが、平城宮分類土師器坏Ａの体部片と推定でき、上下２段の放射状暗文の間に螺旋状暗文を施す手法は飛鳥Ⅲ～Ⅳに散見できる。　**時期**　床面直上出土遺物の全体的な傾向から、７世紀前半と推定する。

Ｂ区Ｈ－４号住居跡（Fig. ８・14、PL. ３～５）

位置　X 177 ～ 179、Y 126・127　**主軸方向**　N － 39°－ E　**規模**　東西軸 4.60 m・南北軸 4.32 m・深さ 0.20 m　**面積**　（13.68）㎡　**覆土**　As-C と炭化物を含む暗褐色土を基調とする。　**床面**　カマド手前から竪穴部中央に、ややしまりの強い硬化面。　**重複**　Ｂ区Ｈ－３・６、Ｂ区Ｄ－７、Ｂ区Ｐ－６・９と重複。新旧関係は本遺構→Ｂ区Ｈ－３→Ｂ区Ｄ－７→Ｂ区Ｈ－６、Ｂ区Ｐ－６・９。　**カマド**　東隅角で確認。竪穴部主軸に対して大きく南偏する。残存状態は悪い。いわゆる隅カマドで該期のカマド配置としては特異。全長 0.50m・燃焼室内幅 0.42m・煙道内幅不明。燃焼室は、両袖に白色粘土を用いる。火床面は確認できず、灰層がわずかに点在する。支脚は確認できない。煙道部はほとんど残存しておらず詳細不明。掘り方は浅い土坑状に窪む。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　北東壁際が浅く窪む。のみ不整円形に浅く窪む。竪穴部中央付近には掘削工具痕が複数個所確認できる。　**出土遺物**　１の長胴甕は、竪穴部中央の覆土下層に破片が散在する。口縁部に最大径があり胴部は張らない。外面はやや変則的だが体部中位と上半から口縁部下端までの２単位の斜位ヘラケズリで最終調整される。２・３は模倣坏。２は１の破片に混在して覆土下層から出

土した。口縁部下端を沈線状にヨコナデし、やや不明瞭な稜部を作出する。３はカマド内から出土。やや扁平化しているが稜部は明瞭で、底部から口縁部へいたる内面の器形変化も明瞭。　**時期**　床面直上出土遺物の全体的な傾向から、６世紀後半と推定する。

Ｂ区Ｈ－５号住居跡（Fig. 8、PL. 4・5）

位置　X 177、Y 127　**主軸方向**　N－48°－E　**規模**　東西軸（2.23）m・南北軸（2.34）m・深さ 0.45 m。竪穴部北隅部のみ調査。　**面積**　（1.12）㎡　**覆土**　As-C と炭化物を含む黒褐色土を基調とし、下層は焼土を多く含む。　**床面**　硬化面は確認できない。　**重複**　Ｂ区Ｈ－３、Ｂ区Ｒ－１、Ｂ区Ｘ－１と重複。新旧関係は本遺構→Ｂ区Ｘ－１→Ｂ区Ｈ－３→Ｂ区Ｒ－１。　**カマド**　確認できず。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　壁際がやや幅広な溝状に窪む。　**出土遺物**　覆土中から、長胴甕や模倣坏・北武蔵型坏の破片が出土したが、細片のため詳細不明。　**時期**　重複関係から、６世紀後半以前と推定する。

Ｂ区Ｈ－６号住居跡（Fig. 8・9・15、PL. 4・5）

位置　X 178・179、Y 126　**主軸方向**　E－10°－N　**規模**　東西軸 3.24 m・南北軸（3.11）m・深さ 0.05 m。残存状態悪く、硬化面とカマドの使用面が残存するのみ。　**面積**　（7.77）㎡　**覆土**　わずかに残存するのみだが、As-C を含む暗褐色土を基調とする。　**床面**　直床。カマド手間から竪穴部南半に明瞭な硬化面。　**重複**Ｂ区Ｈ－４、Ｂ区Ｄ－７・８と重複。新旧関係はＢ区Ｈ－４→Ｂ区Ｄ－７→本遺構→Ｂ区Ｄ－７。　**カマド**　東壁の南寄りで確認。残存状態は悪い。全長 0.99m・燃焼室内幅 0.51m・煙道内幅 0. 不明。燃焼室は、竪穴部東壁を不整楕円形に掘り込んで構築される。燃焼室中央に火床面が確認できる。火床面直上の奥手には１の小皿が逆位で遺棄される。支脚は確認できない。煙道部はほとんど残存しておらず詳細不明。　**貯蔵穴**　確認できず。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　なし。　**出土遺物**　１の小皿はカマド内から出土。酸化焔焼成で、底径は口径の 1/2 程度を示す。２は床面直上から出土した棒状の鉄製品で、鉄製紡錘車の軸部の可能性がある。　**時期**　重複関係とカマド出土の１から、11 世紀と推定する。

Ｂ区Ｈ－７号住居跡（Fig. 9・15、PL. 4・5）

位置　X 180・181、Y 125・126　**主軸方向**　E－8°－N　**規模**　東西軸 3.41 m・南北軸（1.54）m・深さ 0.10 m（掘り込み面からの深さ 0.24 m）。竪穴部南半部のみ調査。基本層序Ⅳ層上面を本来的な掘り込み面とするが、Ⅵ層上面を確認面としたため、平面的な残存状態は悪く、硬化面と掘り方、カマドの使用面が残存するのみ。

面積　（3.76）㎡　**覆土**　As-C と炭化物を含む暗褐色土を基調とする。　**床面**　カマド手前から竪穴部中央にかけて、明瞭な硬化面。　**重複**　なし。　**カマド**　東壁で確認。全長 1.75m・燃焼室内幅（0.25）m・煙道内幅不明。燃焼室の構造は不明だが、崩落土に白色粘土の土塊を多く含むことから、本来は構築材に白色粘土を用いたものと推測できる。燃焼室中央付近でわずかに火床面が確認できるが、、被熱は弱い。支脚は確認できない。燃焼室と煙道部の境は不明瞭で、煙道は短く底面は平坦。煙道奥壁は強く傾斜して立ち上がり、煙出し部にいたる。燃焼室の掘り方は、ごく浅い土坑状に窪む。　**貯蔵穴**　南東隅角で確認。長軸 0.73 m・短軸 0.58 m、深さ 0.10 m。貯蔵穴脇から出土した２の刀子は、刃部が折れ曲がる。　**柱穴**　確認できず。　**壁周溝**　確認できず。　**掘り方**　全体的に起伏は少ないが、南西隅角が不整円形に浅く窪む。中央には不整円形の床下土坑が３基重複する（Ｄ１～３）。Ｄ３→Ｄ２→Ｄ１の順に作り替えられており、Ｄ１は全面に、Ｄ２・３は壁面に白色粘土が貼付されている。しかし火床面や被熱の痕跡はなく、鍛造剥片等も出土しなかった。掘り方南東部では粘土塊や３・４の椀形鍛冶滓が出土。これら掘り方の状況から、本跡には小規模な小鍛冶との関連が想定できる。　**出土遺物**　１の坏は床下土坑のＤ１内から出土。酸化焔焼成で、底径は口径の 1/2 以下を示す。　**時期**　床下土坑であるＤ１出土の１から、10 世紀後半と推定する。

（2）道路状遺構

A区R－1号道路状遺構（Fig. 9～11・14、巻頭図版1・2、PL. 2・3・5）

位置　X 187～190、Y 94～96　**主軸方向**　N－3°－W　**規模**　長さ（5.56）m・上幅10.39 m・下幅5.08 m・深さ3.10 m　**形状**　総社砂層を掘り抜いて開削された、切通し状（掘割状・オープンカット工法）の路体をもつ。横断面の形状は箱状。通行面である路面部から路肩部は、路体中央に向かって緩く傾斜し、中央は溝状に窪む。切通しの両壁はほぼ垂直に立ち上がり、中位に両側溝をもち、上半は緩やかに傾斜しながら漏斗状に立ち上がる。調査部分の路面部に路線方向の傾斜はないが、本跡南側に連続する同一遺構である蒼海（17街区）R－1の路面北端部標高と比較すると、勾配6.56°・11.5%の北側へ下る斜路となる。　**重複**　なし。　**覆土**　路面から約45cm上位の覆土下層にAs-B、その上層にはAs-Kkの一次的堆積層が観察できる。これら火山灰より上層は、As-Bを含む黒褐色～暗褐色土を基調とし、途中に部分的な硬化面（SPAの6層）が確認できる。火山灰より下層は、As-Cと炭化物を含む黒褐色土を基調とし、路面部までの間に硬化面は確認できない。路面②（新段階）直上には、細粒の砂質土が堆積しており、洪水堆積砂の可能性がある（SPAの29層）。　**As-Kk直上の状態**　As-Kk降下時の路体断面形状は、自然堆積の進行したレンズ状を呈する。最深部の路体中央付近には成馬の骨・歯が散乱し、廃絶後埋没過程の路体に廃棄ないし流入したものと判断できる（Fig. 9、PL. 2左下）。なお、馬の骨・歯は、As-Bよりも下層の覆土最下層（SPAの27・28層）からも出土しており、こちらは道路廃絶直後に廃棄ないし流入したものと判断できる（Fig.10）。　**As-B直下の状態**　As-B降下時の路体断面形状も、自然堆積の進行したレンズ状を呈する。降下時の旧地表面は軟らかいが、一方で馬蹄痕や耕作痕などの細かな起伏は確認できない。硬化面も確認できない（Fig. 9、巻頭図版2右下）。　**砂岩採掘坑**　路体西壁に重複するD1～3は、路体の覆土最下層（SPAの28層、SPBの6層）を掘り込み、As-B直下の堆積土（SPAの20層、SPBの1層）に覆われる。よって掘削時期は、本遺構が道路の本来的機能を失った直後で、かつ埋没が進行する以前と推定できる（Fig.10・11）。掘削順序は、最初に路体壁面の総社砂層を方形に大きく抉り（D3）、次にD3の北壁と南壁を拡張して総社砂層を掘削し（D2）、最後にD3の北壁を拡張して総社砂層を掘削する（D1）。類似の土坑は、古代の大溝である蒼海（9・10）W－1の北壁などに確認でき、これらには、本遺跡近辺の竪穴住居跡カマド構築材として普遍的に確認できる、砂岩切石の採掘坑の可能性が指摘されている。

側溝　路体両壁の中位、垂直の壁面から漏斗状の緩い立ち上がりへ形状が変化するあたりに、路体に並行する直線溝が確認でき、覆土にAs-Bを含まないことから（SPAの18・22層）、本跡に付属する側溝と判断した。両側溝の間隔は芯々距離で6.75 m。幅は東側溝0.52 m、西側溝0.57 m。土坑連結工法の構造はもたず、幅狭で、断面形状は弧状、底面は平坦。なお、側溝より外側の緩やかな立ち上がりは路側部にあたると判断できる。　**路面②（新段階・Fig10）**　路面②は、As-Bより下層で確認できる2面の硬化面のうち上位に形成されたもので、本遺構が本来的に機能した最終段階の路面部と判断したが、一部は路面①（古段階）と硬化面が共有されており、その変化は漸移的である。硬化面は路体底面の中央に3.02 mの幅で確認できる。中央部は路面①と硬化面・砂礫敷きを共有し、西側は路盤構築土から地山の総社砂層直上が硬化、東側は路面①の路肩に形成された三角堆積層（SPAの30層）が硬化する。路面部の側縁から路体両壁の間に硬化面は確認できず、壁面の崩落によると判断できる総社砂層の土塊も散在しており、通行度の低い路肩部と判断できる。　**路面①（古段階・Fig11）**　路面①は、As-Bより下層で確認できる2面の硬化面のうち下位に形成されたものだが、本跡南側に連続する同一遺構である蒼海（17街区）R－1や蒼海（30）A－1の路面形成過程を参照するに、道路開削の最初段階の路面部とは考え難い。路体底面の中央を、幅1.50 m・深さ0.16mほど掘り込んだ溝の中に、幅1.19 mの硬化面が確認できる。硬化面は、後述する砂礫敷きの範囲に対応し、砂礫敷きの直上が直接に路面部として使用されたと判断できる。路面②同様、路面部の側縁から路体両壁の間に硬化面は確認できず、路肩部と判断できる。　**砂礫敷き**　路面①（古段階）は、非常に良く締め固められた砂礫敷きを伴う。砂礫敷きの厚さは5～10cmほどで、

中央部がアーチ状にやや高い。直径 0.5 ～ 10cm の亜角礫を主体とし、２の瓦や土師器・須恵器の細片を含み、間詰めに極粗粒砂を含む。礫の岩種は、偏光顕微鏡による岩石剥片の分析や肉眼観察によれば、前橋泥流（浅間火山）に由来するものが多く、新榛名火山（二ッ岳など）を起源とするものや赤城火山（鈴ヶ岳など）を起源とするものを含み、その組成は、調査区の北側を流れる牛池川河床礫の組成とも良く似ている。これらの点から、砂礫敷きの敷設には、近辺の中小河川から採取した亜角礫を中心に、瓦や土器の破片など集落内の廃棄物も再利用したと推測でき、そこにさほど強い計画性を読み取ることはできない。　**路盤**　路床東半は、総社砂層ブロックを主体とする路盤構築土によって、路肩部の傾斜が調整されているが（SPA の 32 ～ 36 層）、転圧等の造作は確認できない。　**波板状凹凸面**　確認できず。　**路床**　路床は総社砂層の最下部から前橋泥炭層に達する。掘削単位や工具痕などの起伏は確認できない。　**出土遺物**　路面②直上から出土した遺物は１の甕のみ。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具の痕跡を明瞭に残すが、細片のため詳細不明。２は砂礫敷きに転用された瓦の破片。細片のため図示しなかったが、砂礫敷き内からはほかに、三日月高台を含む灰釉陶器４片、擬格子タタキを含む須恵器甕胴部 17 片、土師器甕・坏 10 片のほか、人の歯１片を検出した。３～５は As-B より下層の覆土下層出土。３の段皿は内面中位に段を有し、短い三日月高台が付く。下層からはほかに、羽釜１片、酸化焔焼成を含む須恵器坏 12 片が出土した。なお４の甕や５の蓋のほか、模倣坏５片なども下層に含まれるが、これらは主体とする遺物の帰属時期よりも古く、周囲の集落跡から混入したものだろう。また、やはり細片のため図示しなかったが、As-B 直下の旧地表面からは酸化焔焼成の須恵器坏２片などが出土した。　**時期**　本跡の調査結果から開削時期は推定しがたい。砂礫敷きに転用された数少ない土器片のうちで、時期的な下限となるのは灰釉陶器の三日月高台細片で、その施工時期は９世紀後半頃と推定でき、２の瓦片が含まれる点とも整合的である。本来的な機能が停止した時期について、本跡の調査範囲に限っては、廃絶から As-B 降下までの間に、ある程度の自然堆積層が形成されており、時間差を見積もる必要がある。砂礫敷きから As-B 直下の層位の中で時期的な下限となる遺物群は、３の段皿や羽釜、酸化焔焼成の須恵器坏であり、一方で酸化焔焼成の須恵器小皿は組成に含まない。以上の点を勘案するに、切通しは 10 世紀代には廃絶した可能性を指摘できる。ただし、本跡南側に連続する同一遺構である蒼海（17 街区）Ｒ－１では、As-B の直下まで路面の硬化層が連続し、本跡の状況と整合しない。本跡の東西には後続する時期の切通しも確認できないことから、おそらく、廃絶後放棄されて、溝状に窪地化した切通しは迂回され、路線全体としては As-B の降下前後、すなわち平安時代末頃までは踏襲されたものと推測できる。　**備考**　道路状遺構の構造分解（各部位名称）については基本的に小鹿野 2003 に依拠し、近江 1994・2006、山村 1993 を参照した。砂礫敷きの岩種については、中島啓治氏の主催する岩石学研究グループに鑑定をご協力いただいた。

Ｂ区Ｒ－１号道路状遺構（Fig. ８）

位置　Ｘ 174・177、Ｙ 126・127　**主軸方向**　Ｅ－９°－Ｓ　**規模**　長さ（11.1）ｍ・幅（2.27）ｍ　**形状等**　南東－北西に走向する。掘り込みは確認できない。　**重複**　Ｈ－３・５、Ｗ－１、Ｄ－６、Ｘ－１と重複。新旧関係はＨ－５→Ｘ－１→Ｈ－３→Ｗ－１、Ｄ－６→本遺構。　**覆土**　路面部の構築土は As-B を含むにぶい褐色土を基調とする。　**硬化面**　遺構確認面直上が不整形な帯状に硬化する。硬化は顕著。側溝や波板状凹凸面などの構造は伴わない。　**出土遺物**　なし。　**時期**　重複関係と覆土に As-B を含むことから、12 世紀以降と推定する。

（３）溝跡

Ａ区Ｗ－１号溝跡（Fig.11）

位置　Ｘ 181 ～ 185、Ｙ 95・96　**主軸方向**　Ｅ－ 12°－Ｎ　**規模**　長さ（9.40）ｍ・上幅 0.70 ｍ・下幅 0.48 ｍ・深さ 0.23 ｍ　**形状等**　東西に走向する。断面やや不整形なＵ字状。底面は起伏が多い。　**重複**　Ｂ区Ｈ－１・３、Ｂ区Ｄ－１と重複。新旧関係はＢ区Ｈ－３→Ｂ区Ｈ－１→Ｂ区Ｄ－１→本遺構。　**覆土**　As-B を含む暗褐色土を基調とする。　**出土遺物**　覆土中から志野焼の碗や土師器・須恵器の甕・坏、瓦などが出土したが、細片のた

め詳細不明。　**時期**　重複関係から、近世以降と推定する。

Ｂ区Ｗ－１号溝跡（Fig.12）

位置　Ｘ 176、Ｙ 126・127　**主軸方向**　Ｎ－１°－Ｗ　**規模**　長さ（4.28）ｍ・上幅 0.64 ｍ・下幅 0.34 ｍ・深さ 0.39 ｍ　**形状等**　南北に走向する。断面逆台形状。底面はほぼ平坦。　**重複**　Ｂ区Ｒ－１と重複。新旧関係は本遺構→Ｒ－１。　**覆土**　As-C を含む暗褐色土を基調とする。　**出土遺物**　覆土中から須恵器の坏・壺、土師器の坏・甕や瓦が少量出土した。いずれも細片のため詳細不明だが、酸化焔焼成の須恵器坏片を含む。　**時期**　重複関係と出土遺物の傾向から、９～ 10 世紀と推定する。

（4）土坑、ピット（Fig.12・13・15）

Ｂ区Ｄ－１～４・６・７は、出土遺物の傾向から、平安時代の土坑と判断した。Ｂ区Ｐ－６・９の底面には、白色粘土が付着する。出土遺物の傾向と重複関係から、平安時代のピットと判断した。底面に白色粘土が付着する類似の遺構に、Ｂ区Ｈ－７の床下土坑（Ｂ区Ｈ－７Ｄ１～３）があり、これらは一連の遺構群の可能性がある。

なお、各遺構の計測値については、Tab. ２に示す。

（5）性格不明遺構

Ｂ区Ｘ－１号性格不明遺構（Fig. ８）

位置　Ｘ 176 ～ 177、Ｙ 127　**主軸方向**　不明　**規模**　長さ（1.21）ｍ・幅（1.01）ｍ・深さ 0.45 ｍ　**形状等**　平面形は不明。断面形は緩い孤状で、底面は平坦。　**重複**　Ｂ区Ｈ－３・５、Ｂ区Ｒ－１と重複。新旧関係はＢ区Ｈ－５→本遺構→Ｂ区Ｈ－３→Ｂ区Ｒ－１。　**覆土**　As-C を含む黒褐色土を基調とする。　**出土遺物**　覆土中から須恵器甕や北武蔵型坏が出土したが、細片のため図示しなかった。　**時期**　出土遺物の傾向と重複関係から、６世紀後半以前と推定する。　**備考**　本跡は竪穴住居跡の隅角部の可能性もあるが、床面の硬化は確認できず、壁面の形状も緩やかで、断定しがたい。調査範囲も狭小で詳細不明のため、性格不明とする。

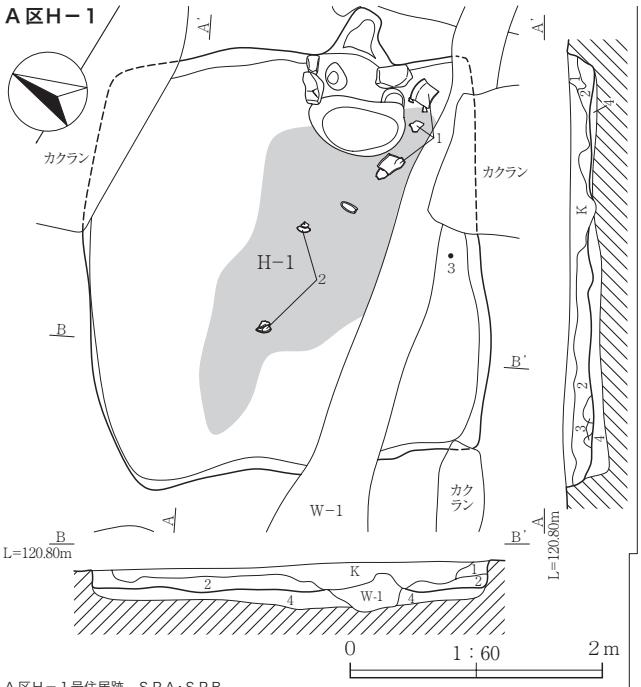
（6）遺構外出土遺物

遺構外から際立った遺物の出土はない。Ｂ区Ｈ－４に重複する倒木痕の捻転土層中から、諸磯ｂ式の深鉢が 12 片出土したが、いずれも細片のため図示しなかった。

Tab. ２　土坑、ピット計測表

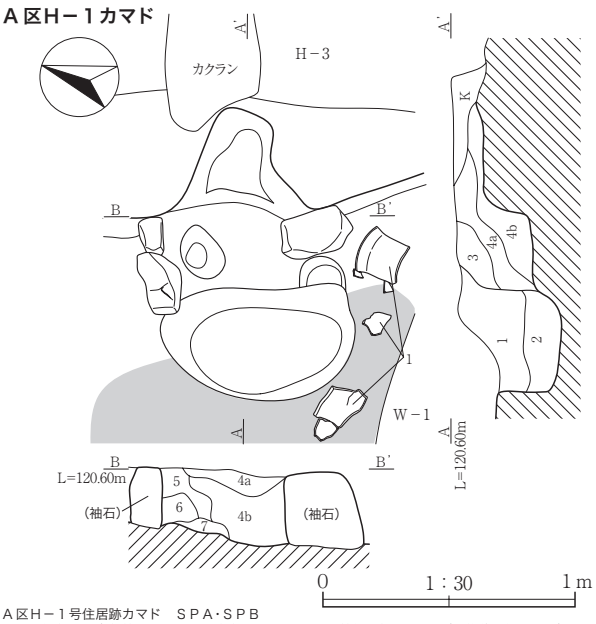
遺構名	位　置	長軸	短軸	深さ	平面形状	主な遺物	時期	備　　考
A区 D－1	X 182・183 Y 94・95	3.50	(1.98)	0.14	不整楕円形	染付小碗	近世以降	As-B を含む。 A 区 W-1 に切られる。 火床面あり。
A区 D－2	X 187 Y 95	2.58	0.73	0.21	長方形	陶器鍋	近世以降	As-A・As-B を含む。
A区 D－3	X 186 Y 95	1.28	0.98	0.17	不整楕円形	鉄製釘	近世以降	As-A・As-B を含む。 A 区 D-4 を切る。
A区 D－4	X 186・187 Y 94・95	1.58	0.84	0.14	不整楕円形	－	近世以降	As-A・As-B を含む。 A 区 D-3 に切られる。
A区 D－5	X 190 Y 95	1.62	1.00	0.24	隅丸長方形	－	近世以降	As-A・As-B を含む。 A 区 D-6 を切る。
A区 D－6	X 191 Y 95	1.08	0.75	0.16	隅丸長方形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 D－7	X 191 Y 95	0.86	0.62	0.27	楕円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 D－8	X 192 Y 95・96	1.33	0.65	0.49	長楕円形	－	中世以降	As-B を含む。 底面に硬化面。
A区 D－9	X 190 Y 96	0.74	00.69	0.32	円形	－	中世以降	As-B を含む。
B区 D－1	X 174 Y 126	1.77	1.21	0.39	隅丸方形	須恵器坏（酸化焔焼成）、貝巣穴痕軟質泥岩	9 ～ 11 世紀	Hr-FA・As-C を含む。 ピット付属。
B区 D－2	X 175 Y 126	(1.45)	1.46	0.78	楕円形	須恵器小皿（酸化焔焼成）、土釜	10 ～ 11 世紀	As-C を含む。 ピット付属。
B区 D－3	X 174 Y 126	1.22	1.17	0.53	楕円形	須恵器坏（酸化焔焼成）	9 ～ 11 世紀	B 区 D-5 に切られる。
B区 D－4	X 174 Y 126・127	1.22	(0.88)	0.32	楕円形	灰釉陶器壺	9 ～ 10 世紀	As-C を含む。 B 区 D-5 に切られる。
B区 D－5	X 175 Y 126	1.43	1.26	0.23	隅丸方形	－	中世以降	As-B・As-C を含む。
B区 D－6	X 175 Y 126・127	1.03	0.84	0.32	隅丸方形	灰釉陶器瓶類	9 ～ 10 世紀	Hr-FA・As-C を含む
B区 D－7	X 179 Y 126	(0.87)	0.53	0.20	不整楕円形	羽釜、丸瓦	9 ～ 10 世紀	B 区 H-4 を切る。 B 区 H-6 に切られる。
B区 D－8	X 179 Y 126	0.67	0.60	0.14	不整円形	－	中世以降	B 区 H-6 を切る。
A区 P－1	X 182 Y 94	0.44	0.41	0.10	円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－2	X 182 Y 94・95	0.71	0.58	0.26	楕円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－3	X 182 Y 94	0.45	0.43	0.23	円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－4	X 183 Y 94	0.38	0.36	0.13	円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－5	X 182 Y 94	0.53	(0.42)	0.13	［円形］	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－6	X 182 Y 94	(0.78)	(0.57)	0.11	（楕円形）	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－7	X 182 Y 95	0.29	0.27	0.26	円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－8	X 184 Y 95	0.43	0.32	0.11	楕円形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 P－9	X 185 Y 94	0.22	0.21	0.11	円形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－10	X 187 Y 94	0.62	0.49	0.14	不整方形	－	近世以降	As-A を含む。
A区 P－11	X 187 Y 95	0.34	0.26	0.12	円形	－	近世以降	As-A・As-B を含む。
A区 P－12	X 190 Y 95	0.25	0.23	0.26	円形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 P－13	X 191 Y 95	0.27	0.24	0.39	円形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 P－14	X 191 Y 95	0.23	0.21	0.23	円形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 P－15	X 193 Y 95	0.61	0.48	0.37	不整形	－	中世以降	As-B・As-C を含む。
A区 P－16	X 192・193 Y 95	0.56	0.43	0.34	楕円形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 P－17	X 193 Y 95	0.32	0.28	0.34	円形	－	中世以降	As-B を含む。
A区 P－18	X 193 Y 96	0.37	0.33	0.48	円形	－	中世以降	As-B を含む。
B区 P－1	X 173 Y 126	0.33	0.31	0.14	円形	土師器甕	古代	As-C を含む。
B区 P－2	X 173 Y 126	0.43	0.36	0.34	円形	－	古代	As-C を含む。
B区 P－3	X 176 Y 126	0.56	0.53	0.49	円形	－	古代	As-C を含む。
B区 P－4	X 177 Y 126	0.35	0.33	0.16	不整円形	－	古代	As-C を含む。
B区 P－5	X 177 Y 126	0.33	0.26	0.15	円形	黒色土器塊 須恵器坏・小皿	古代	As-C を含む。
B区 P－6	X 178 Y 126	0.53	0.49	0.14	不整円形	黒色土器塊 羽釜	9 ～ 11 世紀	As-C を含む。 底面に粘土付着。 B 区 H-4 を切る。
B区 P－7	X 176 Y 126	0.58	0.56	0.18	不整円形	－	中世以降	As-B を含む。 B 区 H-2 を切る。
B区 P－8	X 180 Y 126	0.33	0.26	0.09	円形	－	古代	As-C を含む。
B区 P－9	X 178・179 Y 127	0.42	0.36	0.11	円形	土師器甕	古代	As-C を含む。 底面に粘土付着。 B 区 H-4 を切る。

A区H－1



A区H－1号住居跡　SPA・SPB
1　暗褐色土　As-C少量。総社砂層ブロックやや多量。粘性、締まり弱。
2　暗褐色土　As-C、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。
3　黄褐色土　総社砂層ブロックやや多量。黒色土ブロックやや少量。粘性弱、締まりやや強。
4　黄褐色土　総社砂層ブロック主体。黒色土少量。粘性、締まりやや強。（床面構築土）

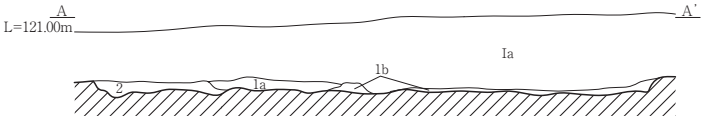
A区H－1カマド

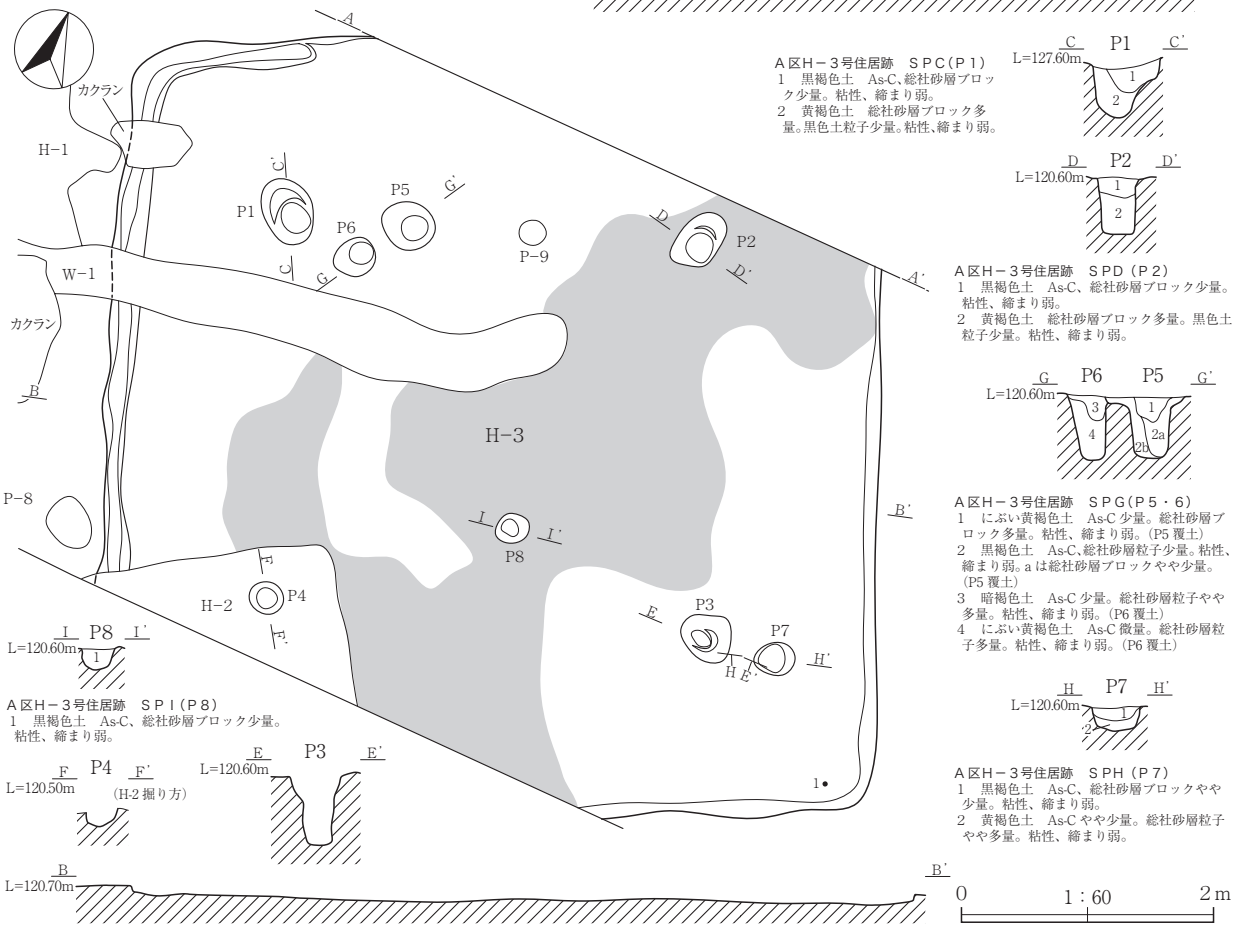


A区H－1号住居跡カマド　SPA・SPB
1　黒褐色土　白色粘土粒子、炭化物微量。As-C少量。粘性、締まり弱。（廃絶後の掘り込み）
2　暗褐色土　白色粘土ブロック、総社砂層ブロック中量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。（廃絶後の掘り込み）
3　灰黄色土　白色粘土ブロックやや多量。黒色土粒子少量。粘性、締まりやや弱。（天井崩落土）
4　暗褐色土　白色粘土ブロック、炭化物少量。As-Cやや少量。粘性、締まり弱。bは総社砂層粒子中量。
5　黒褐色土　As-Cやや多量。総社砂層ブロック少量。黒色土粒子多量。粘性、締まり弱。
6　にぶい褐色土　As-C、総社砂層ブロック少量。総社砂層粒子、黒色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。
7　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロック少量。総社砂層粒子、黒色土粒子中量。粘性、締まり弱。

A区H－3

A区H－3号住居跡　SPA
1　暗褐色土　炭化物、総社砂層ブロック微量。やや砂質。粘性、締まり弱。bはaに比べ総社砂層ブロック多量。
2　暗褐色土　As-C微量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。
4　黄褐色土　総社砂層ブロック主体。黒色土少量。粘性、締まりやや強。（床面構築土）





A区H－3号住居跡　SPC（P1）
1　黒褐色土　As-C、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。
2　黄褐色土　総社砂層ブロック多量。黒色土粒子少量。粘性、締まり弱。

A区H－3号住居跡　SPD（P2）
1　黒褐色土　As-C、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。
2　黄褐色土　総社砂層ブロック多量。黒色土粒子少量。粘性、締まり弱。

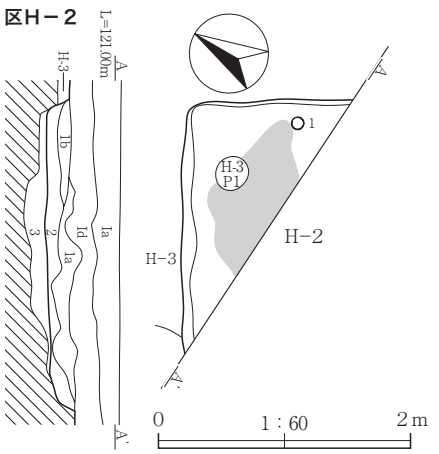
A区H－3号住居跡　SPG（P5・6）
1　にぶい黄褐色土　As-C少量。総社砂層ブロック多量。粘性、締まり弱。（P5覆土）
2　黒褐色土　As-C、総社砂層粒子少量。粘性、締まり弱。aは総社砂層ブロックやや少量。（P5覆土）
3　暗褐色土　As-C少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。（P6覆土）
4　にぶい黄褐色土　As-C微量。総社砂層粒子多量。粘性、締まり弱。（P6覆土）

A区H－3号住居跡　SPI（P8）
1　黒褐色土　As-C、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。

A区H－3号住居跡　SPH（P7）
1　黒褐色土　As-C、総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。
2　黄褐色土　As-Cやや少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。

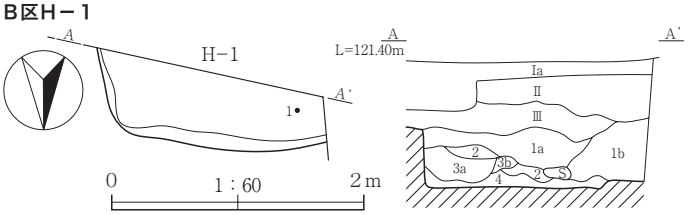
Fig.6　A区H－1・3号住居跡

A区H－2



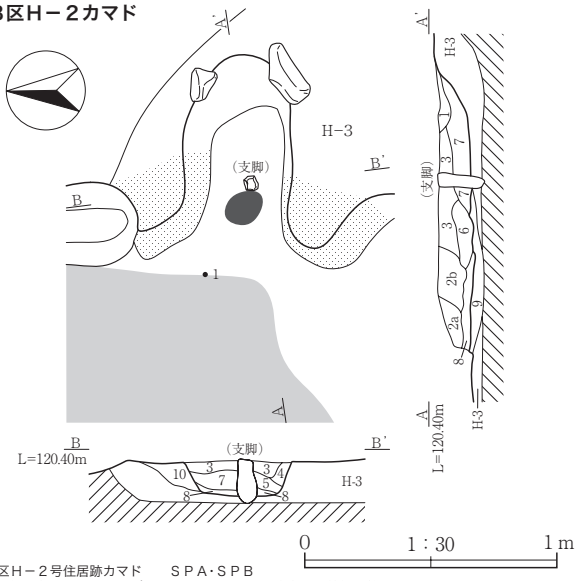
A区H－2号住居跡　SPA
1　暗褐色土　As-C やや少量。粘性弱、締まり中。a は総社砂層ブロックやや少量。
2　暗褐色土　炭化物微量。As-C、総社砂層粒子やや少量。粘性、締まり弱。
3　明黄褐色土　As-C やや少量。総社砂層ブロックやや多量。黒色土ブロックやや少量。粘性やや弱、締まりやや強。（床面構築土）

B区H－1



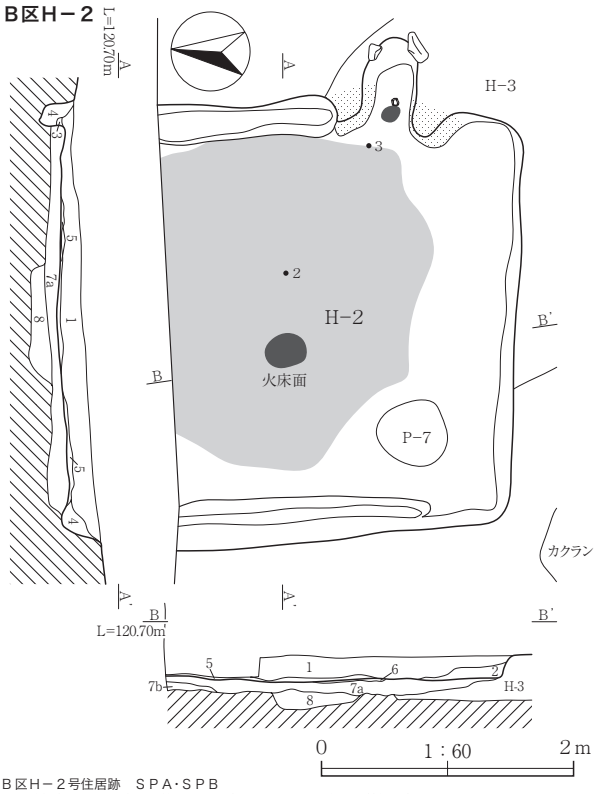
B区H－1号住居跡　SPA
1　暗褐色土　As-C、総社砂層粒子やや少量。粘性、締まり弱。b は小礫微量。
2　黒褐色土　Hr-FA 粒子、As-C 少量。粘性、締まり弱。
3　暗褐色土　As-C やや少量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。b は炭化物中量。
4　にぶい黄褐色土　As-C、総社砂層ブロック少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。

B区H－2カマド



B区H－2号住居跡カマド　SPA・SPB
1　褐灰色土　As-B やや多量。As-C 少量。炭化物微量。粘性、締まり弱。
2　にぶい黄橙色土　炭化物少量。白色粘土粒子やや多量。a は焼土ブロック、b は黒色土粒子やや多量。粘性、締まりやや弱。
3　灰黄色土　炭化物微量。白色粘土粒子多量。粘性、締まりやや強。
4　暗褐色土　焼土ブロック、白色粘土ブロックやや少量。As-C 中量。黒色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。
5　灰白色土　白色粘土ブロック主体。粘性やや強、締まり強。
6　暗褐色　焼土粒子、炭化物微量。総社砂層ブロック中量。粘性、締まり弱。
7　黒褐色土　炭化物少量。灰やや少量。As-C 微量。粘性、締まり弱。
8　黒色土　灰多量。総社砂層ブロック微量。粘性弱、しまりなし。（灰層）
9　暗褐色土　総社砂層ブロック、黒色土ブロック少量。粘性、しまり弱。（掘り方）
10　褐色土　白色粘土粒子多量。焼土粒子微量。粘性、締まりやや強。（袖構築土）

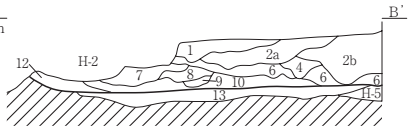
B区H－2



B区H－2号住居跡　SPA・SPB
1　暗褐色土　炭化物、総社砂層粒子微量。As-C やや少量。粘性、締まり弱。
2　黒褐色土　Hr-FA ブロック、淡色クロボク土ブロックやや少量。As-C、総社砂層粒子少量。粘性、締まり弱。
3　灰黄色土　白色粘土ブロックやや多量。As-C 少量。粘性、締まり弱。
4　暗褐色土　As-C 微量。粘性弱、締まりやや弱。
5　黒色土　炭化物の薄層。粘性弱、締まりなし。
6　褐色土　炭化物、As-C 少量。総社砂層粒子やや多量。粘性弱、締まり非常に強い。（貼床）
7　黄褐色土　総社砂層ブロック主体。黒色土少量。粘性弱、締まり強。b は黒色土ブロックやや少量。（床面構築土）
8　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロック主体。黒色土ブロックやや少量。粘性、締まり弱。（床下土坑覆土）

B区H－3

B区H－3号住居跡　SPA・SPB
1　黒褐色土　炭化物、総社砂層粒子少量。As-C 中量。粘性、締まり弱。
2　暗褐色土　As-C 中量。総社砂層粒子やや少量。粘性、締まり弱。a は総社砂層ブロックやや少量。
3　暗褐色土　炭化物、白色粘土粒子微量。As-C 少量。総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。a は白色粘土ブロック微量。
4　黒色土　As-C、総社砂層ブロック少量。黒色土ブロックやや多量。粘性、締まり弱。
5　黒褐色土　炭化物やや多量。白色粘土ブロック少量。粘性、締まり弱。b は白色粘土粒子やや多量。
6　暗褐色土　炭化物、総社砂層ブロック、黒色土粒子少量。As-C やや少量。粘性、締まり弱。
7　黒褐色土　As-C やや少量。総社砂層ブロック微量。黒色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。
8　暗褐色土　焼土粒子微量。白色粘土粒子、As-C やや少量。粘性、締まり弱。
9　黒色土　V層土の土塊。粘性、締まり弱。
10　黒褐色土　焼土粒子、炭化物少量。As-C やや少量。総社砂層ブロック微量。粘性、締まり弱。
11　黒褐色土　炭化物、白色粘土粒子少量。As-C やや少量。粘性、締まり弱。
12　にぶい褐色土　As-C 少量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。
13　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロックやや多量。黒色土ブロック中量。粘性やや弱、しまり強。（床面構築土）



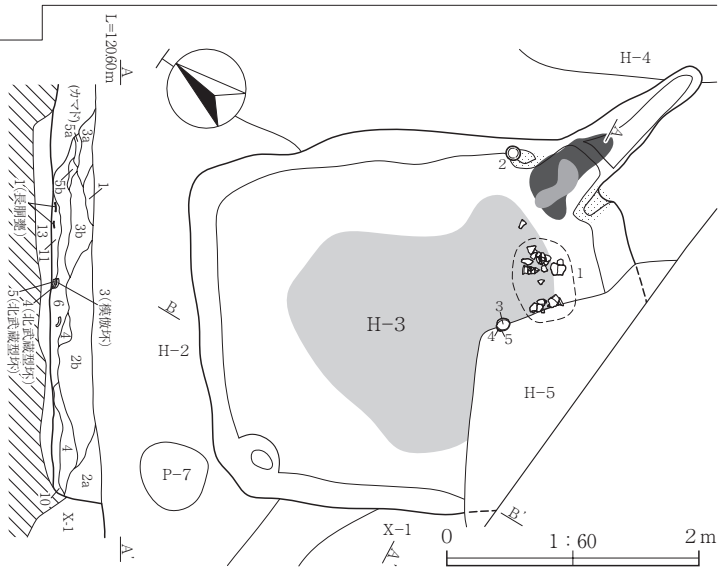
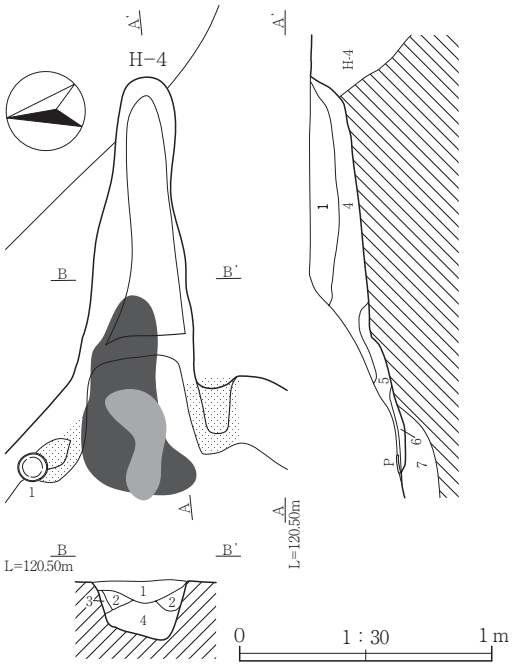


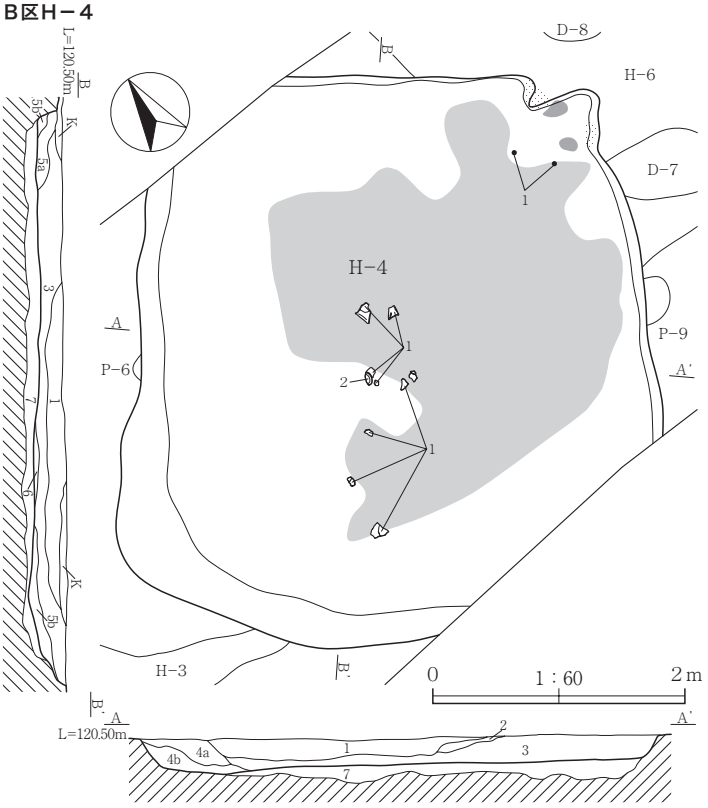
Fig.7　A区H－2、B区H－1～3号住居跡

B区H－3カマド



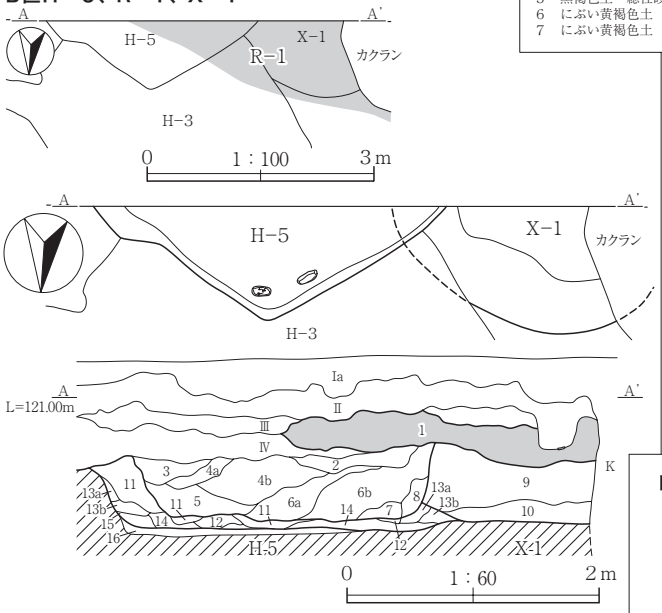
B区H－3号住居跡カマド　SPA・SPB
1　灰黄褐色土　焼土ブロック、As-C 少量。白色粘土粒子やや少量。小礫微量。粘性、締まり弱。
2　にぶい赤褐色土　焼土ブロックやや多量。灰、炭化物少量。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
3　暗灰色土　焼土粒子少量。暗褐色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。
4　暗褐色土　焼土ブロック、炭化物、As-C 少量。粘性、締まり弱。
5　にぶい赤褐色土　焼土ブロック中量。灰やや少量。As-C 少量。粘性、締まり弱。
6　灰色土　灰主体。焼土ブロック微量。粘性、締まりなし。（灰層）
7　にぶい黄褐色土　B区H-3SPA・SPBの13層と同じ。総社砂層ブロックやや多量。黒色土ブロック中量。粘性やや弱、しまり強。（床面構築土）

B区H－4



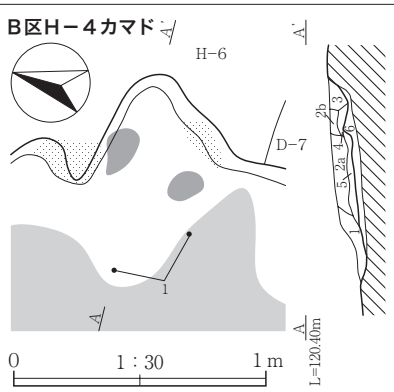
B区H－4号住居跡　SPA・SPB
1　暗褐色土　炭化物、白色粘土ブロック、As-C 少量。粘性、締まり弱。
2　黒色土　炭化物多量。暗褐色土ブロック少量。粘性、締まり弱。
3　暗褐色土　炭化物、総社砂層ブロック微量。As-C やや少量。粘性、締まり弱。
4　暗褐色土　炭化物微量。総社砂層ブロック、As-C 少量。総社砂層粒子やや少量。粘性、締まり弱。b は a に比べ総社砂層粒子多量。
5　黒褐色土　総社砂層粒子微量。黒色土粒子多量。粘性弱、締まりやや弱。b は総社砂層ブロック少量。
6　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロック中量。黒色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。
7　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロックやや多量。黒色土ブロックやや少量。粘性弱、締まりやや強。（床面構築土）

B区H－5、R－1、X－1



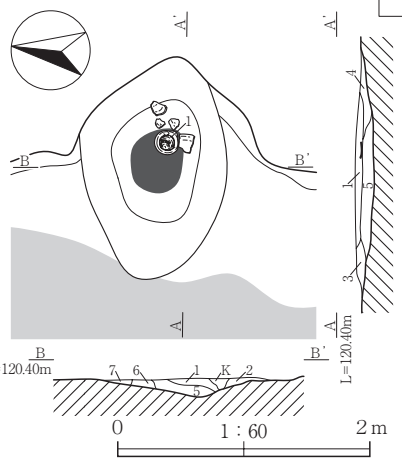
B区H－5号住居跡、R－1号道路状遺構、X－1号性格不明遺構　SPA
1　にぶい褐色土　As-B 多量。As-C、小礫少量。粘性弱、締まり強。（R-1 硬化層）
2　暗褐色土　炭化物微量。As-C 少量。粘性弱、締まりやや弱。（H-3 覆土）
3　黒褐色土　As-C やや少量。黒色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。（H-3 覆土）
4　暗褐色土　Hr-FA、As-C やや少量。黒色土ブロック少量。粘性、締まり弱。a は b に比べ黒色土ブロック多量。（H-3 覆土）
5　黒褐色土　焼土粒子少量。As-C やや少量。粘性、締まり弱。（H-3 覆土）
6　暗褐色土　B区H-3SPA・SPBの2層と同じ。総社砂層粒子やや少量。As-C 中量。粘性、締まり弱。a は総社砂層ブロックやや少量。（H-3 覆土）
7　黒褐色土　炭化物少量。As-C 微量。黒色土粒子多量。粘性、締まり弱。（H-3 覆土）
8　暗褐色土　B区H-3SPA・SPBの6層と同じ。炭化物、総社砂層ブロック、黒色土粒子少量。As-C やや少量。粘性、締まり弱。（H-3 覆土）
9　黒褐色土　炭化物微量。As-C 中量。粘性弱、締まりやや弱。（X-1 覆土）
10　暗褐色土　As-C 中量。総社砂層ブロック少量。粘性弱、締まりやや弱。（X-1 覆土）
11　黒褐色土　炭化物、焼土粒子少量。As-C やや少量。粘性、しまりやや弱。（H-5 覆土）
12　明赤褐色土　焼土粒子多量。炭化物、As-C 少量。粘性、締まり弱。（H-5 覆土）
13　黒色土　As-C 中量。黒色土粒子多量。粘性、締まり弱。b は a に比べ As-C 少量。（H-5 覆土）
14　暗褐色土　焼土微量。炭化物やや少量。As-C 少量。粘性、締まり弱。（H-5 覆土）
15　黒褐色土　As-C、総社砂層ブロック微量。黒色土多量。粘性、締まりやや弱。（H-5 覆土）
16　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロックやや多量。As-C やや少量。黒色土ブロック中量。粘性弱、しまりやや強。（H-5 床面構築土）

B区H－4カマド



B区H－4号住居跡カマド　SPA
1　黒褐色土　白色粘土ブロック、総社砂層ブロック少量。炭化物微量。粘性、締まり弱。
2　浅黄橙色土　白色粘土粒子多量。白色粘土ブロック中量。粘性やや弱、締まりやや強。a は黒色土粒子やや少量。
3　灰黄褐色土　白色粘土ブロック、白色粘土粒子、総社砂層粒子中量。黒色土粒子やや多量。粘性弱、しまりやや弱。
4　黒褐色土　炭化物、灰やや多量。白色粘土粒子、総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。
5　暗灰色土　灰多量。白色粘土粒子微量。粘性弱、しまりなし（灰層）
6　黒褐色土　総社砂層ブロックやや少量。As-C 少量。黒色土粒子多量。粘性、締まり弱。（掘り方）

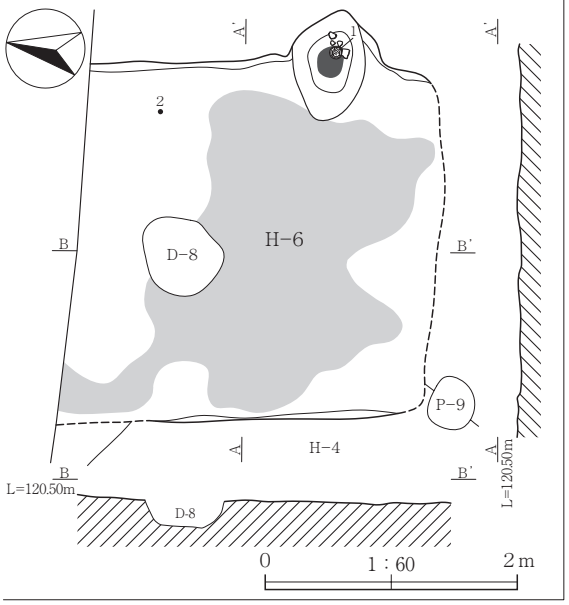
B区H－6カマド



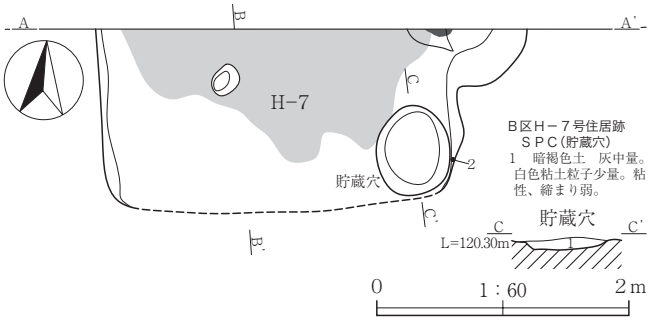
B区H－6号住居跡カマド　SPA・SPB
1　暗褐色土　焼土粒子、白色粘土粒子やや多量。炭化物少量。粘性、締まりやや弱。
2　褐灰色土　白色粘土粒子少量。As-C やや少量。黒色土やや多量。粘性、締まり弱。
3　暗褐色土　灰少量。As-C 微量。粘性、締まり弱。
4　にぶい褐色土　焼土ブロック、白色粘土粒子中量。黒色土粒子やや少量。粘性、締まり弱。
5　褐灰色土　焼土粒子微量。灰やや多量。粘性、締まり弱。
6　灰黄褐色土　白色粘土ブロック多量。黒色土ブロック少量。粘性やや弱、しまり弱。
7　黒褐色土　白色粘土ブロック微量。As-C 少量。粘性、締まり弱。

Fig.8　B区H－3～6号住居跡、R－1号道路状遺構、X－1号性格不明遺構

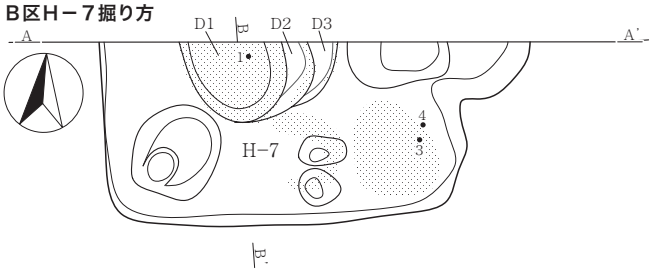
B区H－6



B区H－7

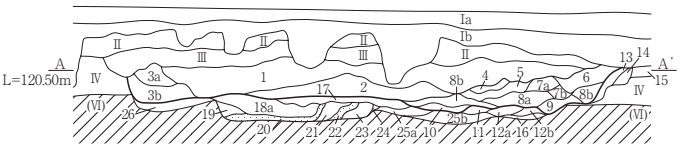


B区H－7掘り方

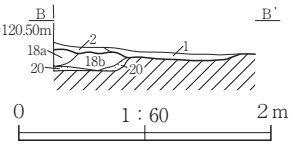


B区H－7号住居跡　SPA・SPB

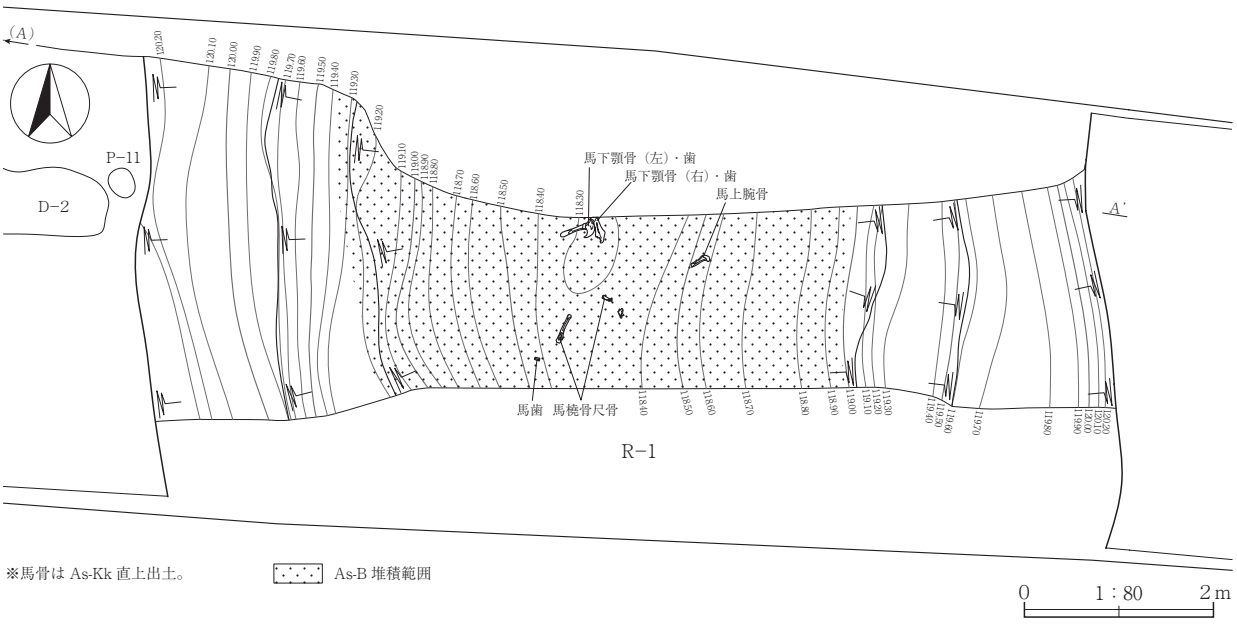
1　暗褐色土　炭化物、焼土粒子、白色粘土粒子微量。As-C 少量。粘性、締まり弱。
2　暗褐色土　炭化物、As-C 少量。総社砂層ブロック微量。粘性、締まり弱。
3　黒褐色土　炭化物少量。黒色土粒子多量。As-C 微量。粘性、締まり弱。b は a に比べ As-C 多量。
4　にぶい黄橙色土　白色粘土ブロック多量。粘性、締まり弱。（カマド崩落土）
5　暗褐色土　炭化物微量。白色粘土粒子中量。粘性、締まり弱。（カマド崩落土）
6　にぶい黄褐色土　白色粘土粒子やや多量。黒色土粒子少量。粘性、締まり弱。（カマド崩落土）
7　浅黄橙色土　焼土ブロック、白色粘土ブロック少量。白色粘土粒子多量。粘性、締まり弱。b は a に比べ白色粘土ブロック多量。（カマド崩落土）
8　灰白色土　白色粘土粒子主体。粘性、締まりやや強。b は黒色土ブロックやや少量。（カマド天井崩落土）
9　褐灰色土　白色粘土粒子、総社砂層粒子やや少量。粘性、締まり弱。
10　暗灰色土　灰主体。As-C 微量。粘性弱、締まりなし。（灰層）
11　橙色土　焼土主体。灰やや少量。粘性なし、締まりやや弱。
12　黒褐色土　灰やや多量。炭化物やや少量。粘性、締まり弱。a は白色粘土ブロック、b は焼土ブロック少量。
13　黒褐色土　V 層土主体。As-C やや少量。黒色土多量。（カマド煙道掘り方）
14　黒褐色土　13 層に類似。総社砂層ブロック少量。粘性、締まり弱。（カマド煙道掘り方）
15　黒色土　V 層土主体。炭化物、As-C 少量。粘性、締まり弱。
16　暗褐色土　As-C、総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。（カマド掘り方）
17　灰黄褐色土　焼土粒子、炭化物、総社砂層ブロックやや少量。白色粘土粒子中量。粘性やや弱、しまり強。（貼床）
18　暗褐色土　白色粘土粒子やや少量。粘性弱、締まりやや弱。b は a に比べ白色粘土粒子少量。（土坑 1 覆土）



19　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロック中量。粘性、締まり弱。（土坑 1 覆土）
20　灰白色土　白色粘土粒子主体。粘性やや強、締まりやや弱。（土坑 1 覆土）
21　暗褐色土　18 層に類似。白色粘土粒子やや少量。粘性、締まりやや弱。（土坑 2 覆土）
22　灰白色土　20 層に類似。白色粘土粒子主体。粘性やや強、しまりやや弱。（土坑 2 覆土）
23　暗褐色土　18 層に類似。白色粘土粒子やや少量。粘性、締まりやや弱。（土坑 3 覆土）
24　灰白色土　20 層に類似。白色粘土粒子主体。粘性やや強、締まりやや弱。（土坑 3 覆土）
25　にぶい黄褐色土　総社砂層ブロック中量。黒色土粒子やや多量。粘性弱、締まりやや強。a は b に比べ締まり強。（床面構築土）
26　黄褐色土　総社砂層ブロックやや多量。黒色土粒子やや少量。粘性弱、しまりやや強。（床面構築土）



A 区 R－1（As-B 直下検出状況）



※馬骨は As-Kk 直上出土。　　As-B 堆積範囲

Fig.9　B区H－6・7号住居跡、A区R－1号道路状遺構

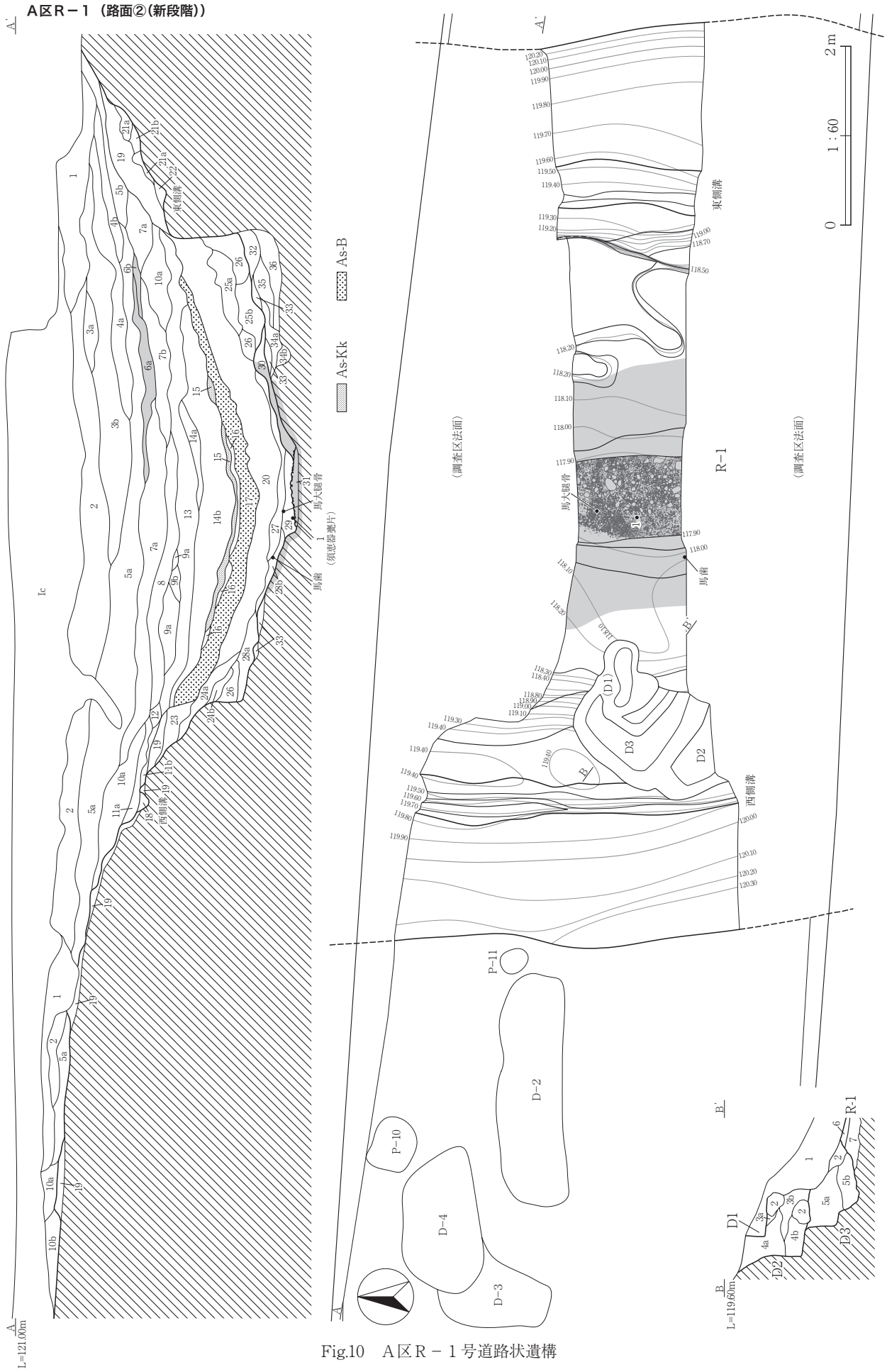
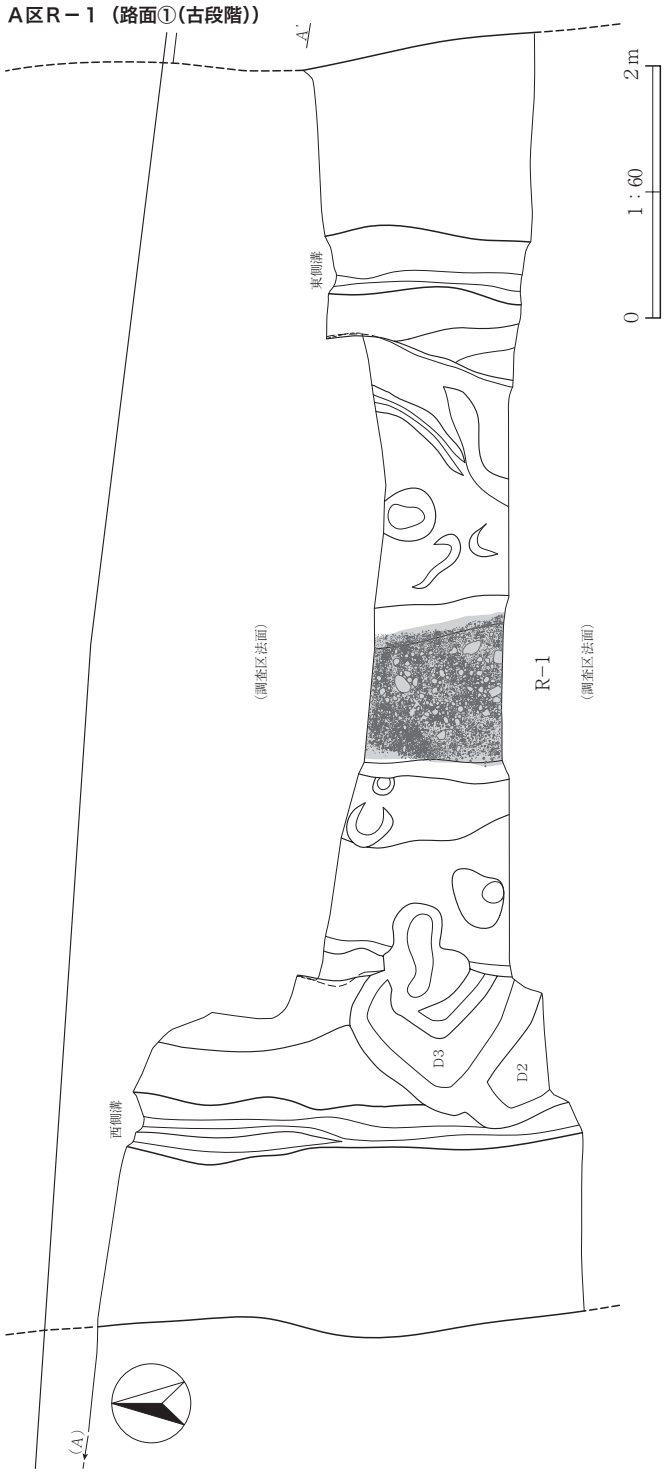


Fig.10　A区R－1号道路状遺構

A区R－1（路面①(古段階)）



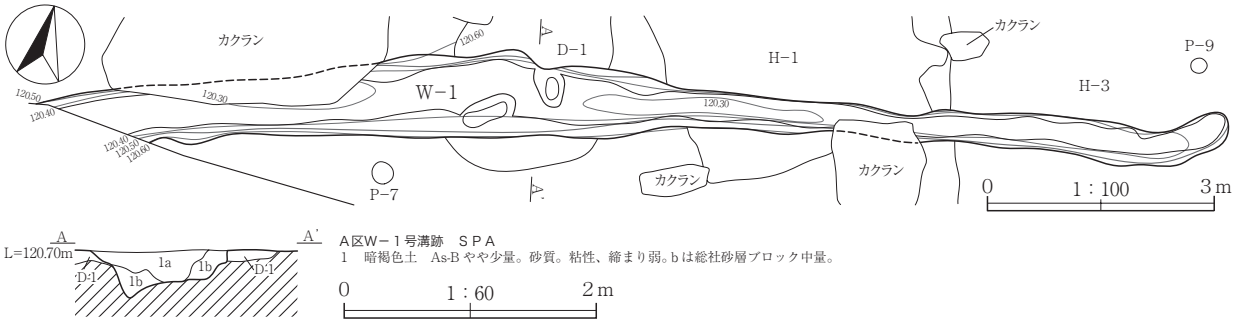
A区R－1号遺路状遺構　SPA

1　褐灰色土　As-Aやや少量。As-Bやや多量。やや砂質。粘性、締まり弱。
2　にぶい黄橙色　As-Aやや多量。Hr-FA、As-Cやや少量。粘性弱、締まり強。
3　暗褐色土　As-Bやや多量。炭化物、小礫微量。粘性弱、しまりやや強。aはbに比べ締まり強い。
4　暗褐色土　As-Bやや多量。小礫、総社砂層粒子微量。粘性弱、締まりやや強。bはaに比べ総社砂層粒子多量。
5　暗褐色土　As-Bやや多量。総社砂層ブロック少量。粘性弱、締まりやや弱。bは黒色土粒子含み、aに比べ黒味強い。
6　灰黄褐色土　As-Bやや多量。炭化物微量。総社砂層ブロック中量。小礫少量。粘性弱、締まり強。（硬化面）
7　暗褐色土　As-Bやや多量。炭化物、総社砂層粒子、少量。粘性弱、締まりやや強。aは総社砂層ブロック微量。
8　暗褐色土　As-B多量。総社砂層ブロックやや少量。7層に比べ黒味やや強い。粘性弱、締まりやや弱。（いわゆる“As-B混土層”の上部に相当。蒼海30の基本層序Ⅱ層に相当）
9　暗褐色土　As-B多量。粘性、締まり弱。aは総社砂層粒子、cは黒色土ブロックやや多量。
10　黒褐色土　As-Bやや多量。総社砂層粒子、黒色土粒子中量。bは総社砂層ブロック少量。粘性弱、締まりやや弱。
11　黒褐色土　As-B、黒色土粒子やや多量。炭化物微量。粘性、締まり弱。aは総社砂層ブロック少量。
12　黒色土　As-Bやや少量。総社砂層ブロック中量。黒色土粒子やや多量。粘性、締まり弱。
13　暗褐色土　As-B多量。炭化物、AsC少量。総社砂層粒子ややや少量。粘性、締まり弱。（いわゆる“As-B混土層”の上部に相当。蒼海30の基本層序Ⅱ層に相当）
14　黒褐色土　As-B多量。小礫微量。ややや砂質。粘性、締まり弱。bはaに比べAs-B多量。（いわゆる“As-B混土層”の下部に相当。本遺跡と蒼海30の基本層序Ⅱ層に相当）
15　灰色火山灰土　灰色細粒火山灰。粘性、締まり弱。（As-Kk（浅間粕川テフラ）の一次的堆積層）
16　暗褐色土　As-B主体。暗褐色土粒子ややや少量。粘性、締まり弱。（As-B ～ As-Kk間の堆積土）
17　褐灰～暗赤灰色火山灰土　最上部は桃色細粒火山灰。以下、黒褐色粗粒火山灰～灰色砂質細粒火山灰のフォール・ユニットが3～4層細分できる。粘性、しまりなし。（As-Bの一次的堆積層）
18　黒褐色土　AsCやや少量。総社砂層ブロック中量。粘性、締まり弱。（西側溝覆土）
19　褐色土　AsCやや少量。総社砂層粒子ややや多量。粘性、締まり弱。
20　黒褐色土　炭化物、AsC、総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。（As-B直下の堆積土。硬化面は形成せず、非常にやわらかい）
21　にぶい黄褐色土　As-B少量。黒色土粒子多量。粘性、締まり弱。aは総社砂層粒子、bは総社砂層ブロックやや多量。（壁面崩落土）
22　黒褐色土　18層に類似。炭化物、総社砂層粒子少量。AsCやや少量。粘性、締まり弱。（東側溝覆土）
23　黒色土　AsCやや多量。黒色土ブロック多量。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
24　にぶい黄橙色土　炭化物、AsC微量。総社砂層粒子やや多量。粘性、締まり弱。aはbに比べ黒味やや強い。
25　暗褐色土　炭化物少量。AsC中量。総社砂層粒子多量。粘性、締まり弱。aは黒色土ブロック、bは総社砂層ブロック量。
26　淺黄色土　AsC中量。黒色土ブロック少量。総社砂層ブロック多量。粘性、締まり弱。（壁面崩落土）
27　褐灰色土　炭化物微量。AsC少量。総社砂層粒子ややや少量。ややや砂質。粘性、締まり弱。
28　にぶい黄橙色土　AsC少量。総社砂層粒子多量。aは総社砂層ブロック多量。
29　明褐灰色土　AsC少量。小礫微量。砂質。湿性。粘性、締まり弱。
30　暗褐色土　AsCややや少量。総社砂層粒子中量。粘性弱、しまり非常に強い。（路肩の三角堆積に形成された硬化面。路面②(新段階)＝最終段階の路面）
31　灰白砂礫土　礫石安山岩や安山岩などAs山岩の亜角礫（径0.5 ～ 10㎝前後）を主体とし、著しく摩滅した土師器・須恵器・瓦の細片を包含する。間詰めに灰白色の極粗粒砂を含む。粘性なし、締まり非常に強い。（路面①～②(古～新段階)の砂礫敷き）
32　灰黄褐色土　総社砂層の土塊。灰黄褐色シルト主体。粘性、締まり弱。（路盤構築土）
33　灰黄色土　総社砂層ブロック多量。暗褐色土粒子ややや少量。粘性、締まり弱（路盤構築土）
34　褐灰色土　総社砂層ブロックややや少量。暗褐色土粒子ややや多量。粘性、締まり弱。
35　灰黄褐色土　総社砂層ブロックややや多量。暗褐色土粒子ややや少量。粘性、締まり弱。（路盤構築土）
36　明青灰色土　総社砂層の土塊。明青灰色シルト主体。粘性、締まり弱。（路盤構築土）

A区R－1号道路状遺構　SPB(D1～3)

1　黒褐色土　SPAの20層と同じ。炭化物、AsC、総社砂層ブロックやや少量。粘性、締まり弱。(R-1AsB直下堆積土)
2　黄褐色土　総社砂層の土塊。粘性なし、しまり強。(D2・3埋戻し土ないし壁面崩落土)
3　黒褐色土　1層に類似。炭化物、AsC少量。総社砂層ブロックやや多量。粘性、締まり弱。bはaに比べ総社砂層粒子やや多量。(D2埋戻し土)
4　淡黄色土　総社砂層粒子多量。(D2埋戻し土ないし壁面崩落土)
5　明黄褐色土　総社砂層ブロック多量。黒色土粒子ややや少量。粘性、締まり弱。bはaに比べ総社砂層ブロック多量。(D2埋戻し土ないし壁面崩落土)
6　にぶい黄橙色　SPAの28層と同じ。AsC少量。総社砂層粒子多量。粘性、しまり弱。(R-1下部堆積土。)
7　灰黄色土　SPAの33層と同じ。総社砂層ブロック多量。暗褐色土粒子ややや少量。粘性、締まり弱。(R-1掘り方)

A区W－1



A区W－1号溝跡　SPA

1　暗褐色土　As-Bやや少量。砂質。粘性、締まり弱。bは総社砂層ブロック中量。

Fig.11　A区R－1号道路状遺構、W－1号溝跡

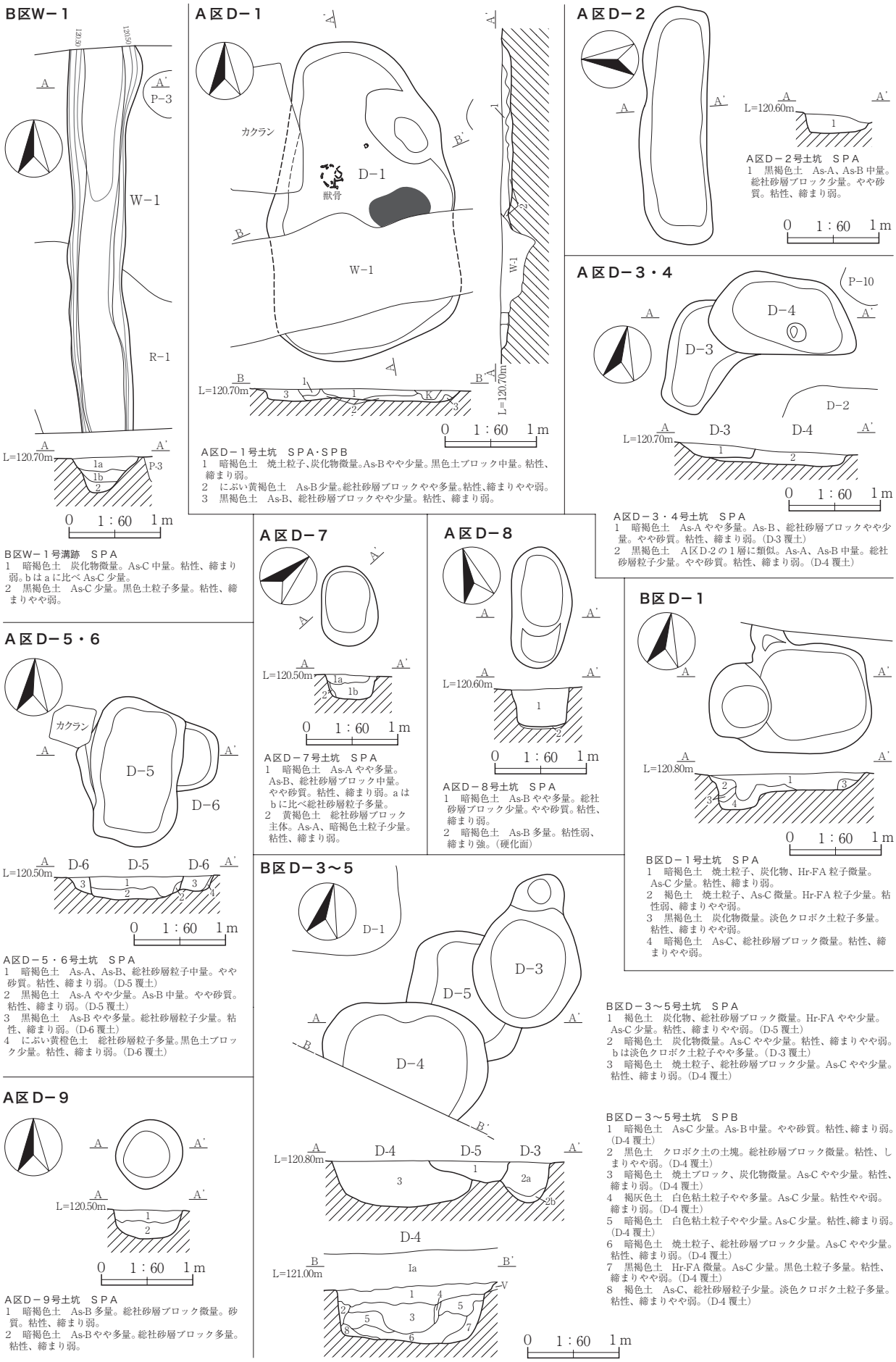


Fig.12　A区D－１～９号土坑、B区W－１号溝跡、B区D－１・３～５号土坑

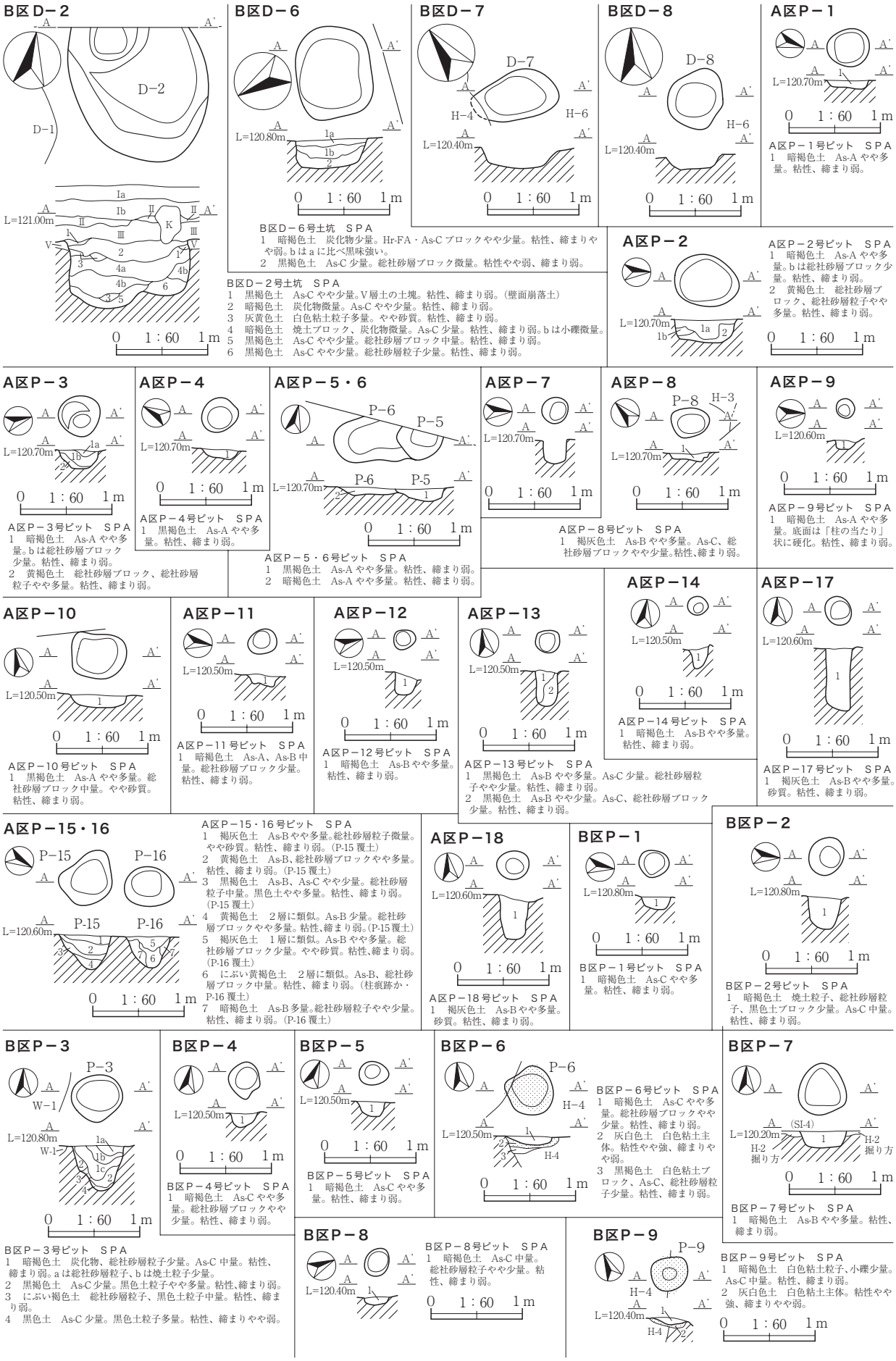


Fig.13　A区P－1～18号ピット、B区D－2・6～8号土坑、B区P－1～9号ピット

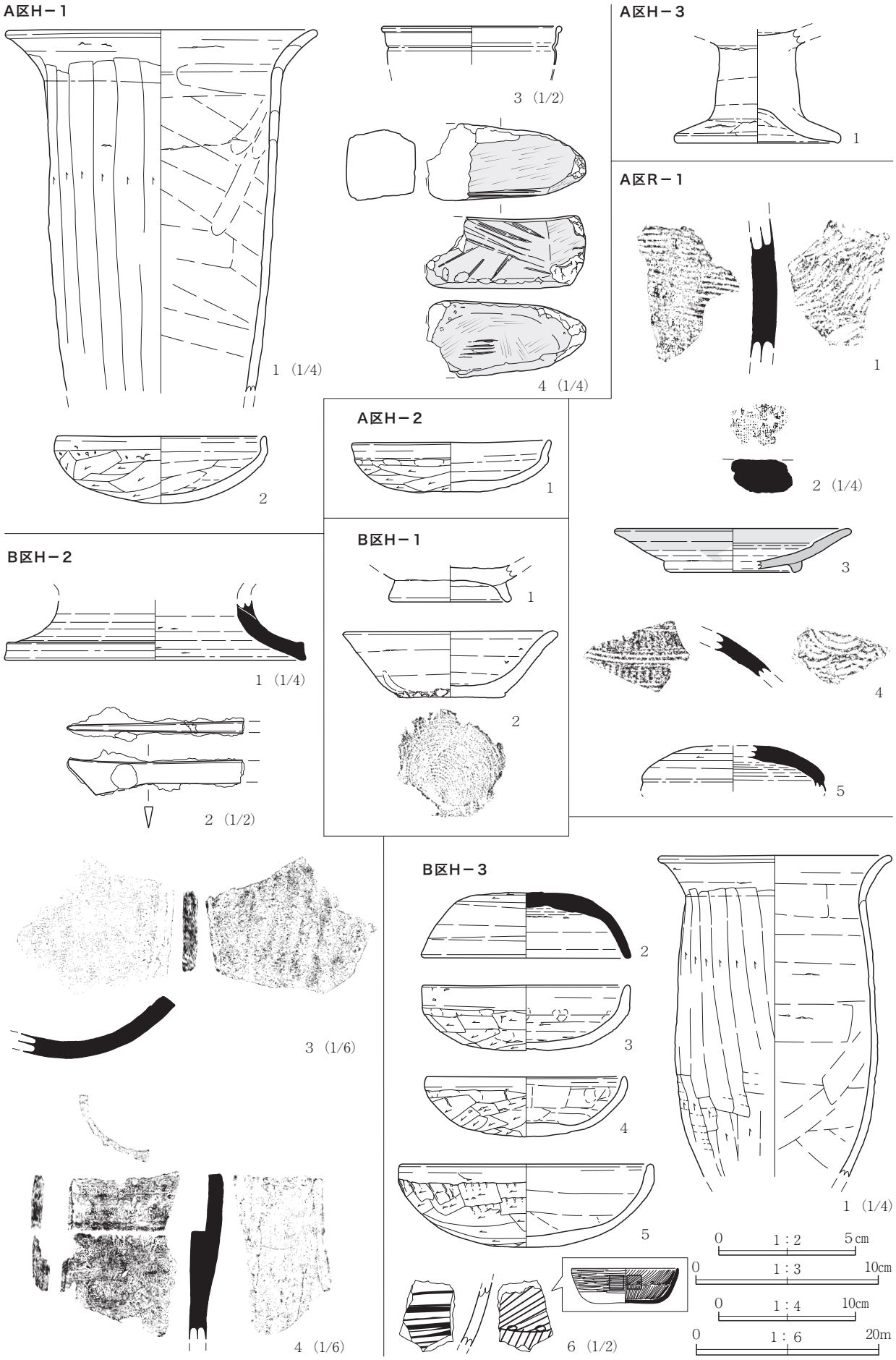


Fig.14　A区H－1～3、A区R－1、B区H－1～3出土遺物

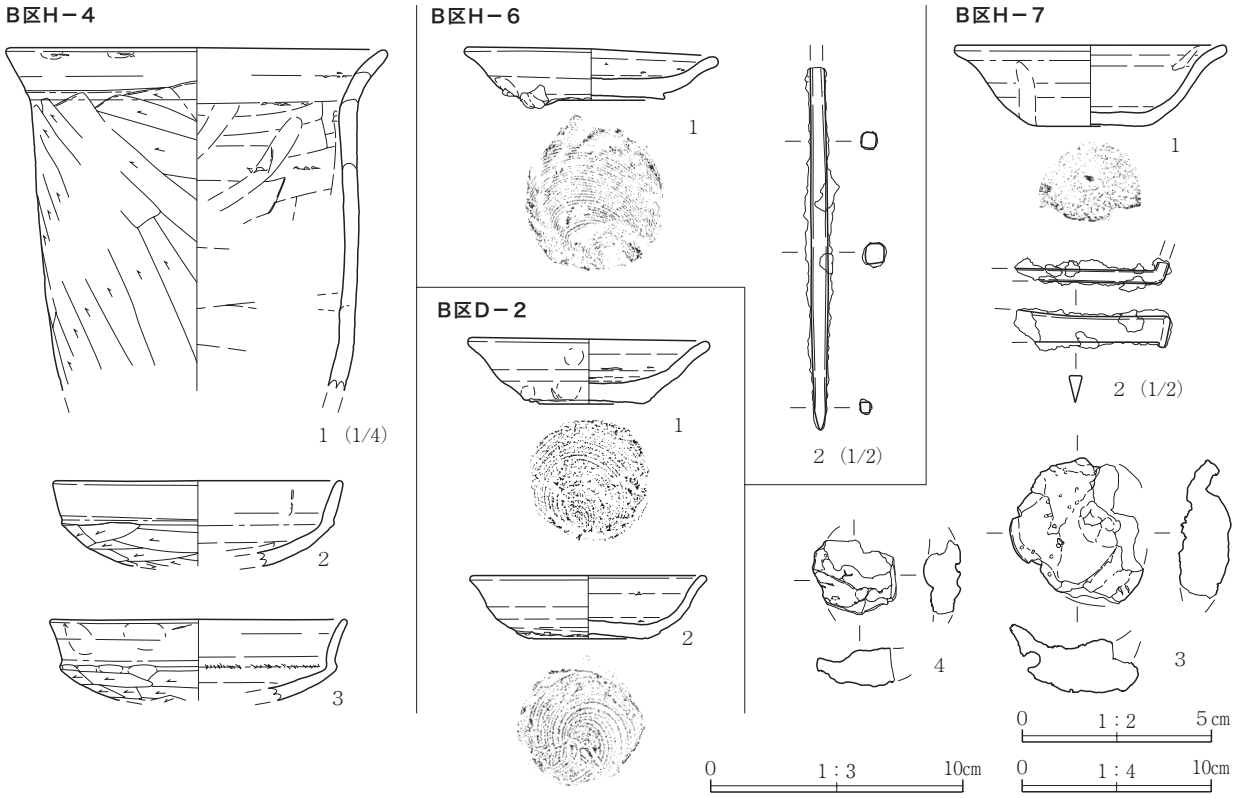


Fig.15　B区H－4・6・7、B区D－2出土遺物

Tab. 3　出土遺物観察表

A区H－1

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.1～3	土師器 長胴甕	22.7	－	(26.7)	角閃石、石英、軽石粒	良好	外面：明褐色 内面：明褐色	外面：口縁部ヨコナデ→胴部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	1/3 残存。 床面直上。
2	No.6・7	土師器 坏	11.4	－	3.8	白雲母細粒、黒色細粒	やや不良	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。底部ナデ。	完存。北武蔵型坏。 床面直上。
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
3	No.8	鉄製品 鉈	〔6.4〕	－	1.4	鉄	－	－	1.2g	口端部玉縁状。口縁部に沈線。	口縁部破片。 覆土上層。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
4	覆土	石製品 砥石	(11.6)	5.6	5.4	凝灰岩	－	灰黄色	403.9g	－	1/2 残存。 覆土。

A区H－2

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.1	土師器 坏	10.6	－	3.0	角閃石、白雲母細粒、チャート	良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。	完存。須恵器蓋模倣坏。 床面直上。

A区H－3

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.1	土師器 高坏	－	〔8.8〕	(6.0)	角閃石、軽石粒、赤色岩片	良好	外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	外面：ヨコナデ。 内面：ユビナデ→脚端部ヨコナデ。	脚部残存。 床面直上。

A区R－1

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.1	須恵器 甕	－	－	8.1	長石、チャート	堅緻	外面：青灰色 内面：青灰色	外面：平行タタキ。 内面：同心円当て具。	胴部破片。 路面②（新段階）直上。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	舗石内	瓦 不明	(4.3)	(4.5)	2.2	長石、白色岩片	堅緻	凹面：青灰色 凸面：青灰色 断面：灰赤色	凹面：布目痕。摩滅顕著。 凸面：不明（剥離）。摩滅顕著。	破片。 砂礫敷きに転用。
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
3	下層	灰釉陶器 段皿	〔13.0〕	〔7.2〕	2.3	夾雑物なし	堅緻	外面：灰白色 内面：灰白色	外面：回転ナデ→口縁部ハケナデによる灰釉施釉。底部回転ヘラケズリ→「角高台」貼付。釉調半透明。高台部摩滅顕著。 内面：回転ナデ→口縁部ハケナデによる灰釉施釉。有段。釉調半透明。底部摩滅顕著。	1/5 残存。 美濃産。光ヶ丘１号窯式期。 覆土下層（As-B 下）。
4	下層	須恵器 甕	－	－	(2.3)	白色岩片、赤色岩片	堅緻	外面：暗灰色 内面：灰色 断面：灰赤色	外面：平行タタキ→カキメ。自然釉付着。釉調灰黄色。 内面：同心円当て具。	肩部破片。 覆土下層（As-B 下）。
5	下層	須恵器 蓋	－	－	(2.5)	石英、白色岩片	堅緻	外面：暗灰色 内面：暗灰色 断面：灰赤色	外面：天井部回転ヘラケズリ→口縁部～天井部下端回転ナデ。有稜。 内面：回転ナデ。	破片。 覆土下層（As-B 下）。

B区H－1

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
1	No.1	須恵器 高台付坏	－	6.6	(2.0)	赤色岩片	良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：底部回転糸切り→高台貼付。 内面：回転ナデ。	底部残存。酸化焔焼成。 覆土下層。
2	覆土	須恵器 坏	11.8	5.9	3.8	石英、長石	良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：回転ナデ→底部回転糸切り。 内面：回転ナデ。	4/5 残存。酸化焔焼成。 覆土。

B区H－2

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
1	カマド	須恵器 甑	－	〔22.0〕	(4.4)	長石	やや 堅緻	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面：回転ナデ。 内面：回転ナデ。		底部破片。 カマド内。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	No.5	鉄製品 刀子	(6.4)	0.8	0.4	鉄	－	－	10.5g	－	刃部残存。 覆土最下層。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
3	No.3 カマド	瓦 平瓦	(16.1)	(17.0)	1.7	長石、白色岩片	堅緻	凹面：にぶい橙色 凸面：にぶい橙色 断面：灰色	凹面：側縁～側面ヘラナデ。布目痕。 凸面：ナデ。		破片。 カマド内。
4	カマド	瓦 丸瓦	(17.7)	(10.7)	3.3	長石、白色岩片	堅緻	凸面：にぶい橙色 凹面：にぶい橙色	凸面：ヘラナデ。 凹面：ユビナデ。狭端面・側縁～側面ヘラナデ。布目痕。		1/4 残存。有段式。 カマド内。

B区H－3

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
1	No.3・4	土師器 長胴甕	17.2	－	(23.7)	角閃石・長石・軽石粒	良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面：口縁部ヨコナデ→胴部縦位ヘラケズリ。やや小型。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラナデ。コゲ付着顕著。		1/2 残存。 カマド内。
No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
2	No.1	須恵器 蓋	11.6	－	(3.6)	長石・白色粒	堅緻	外面：灰色 内面：灰色	外面：回転ナデ→天井部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。		完存。 床面直上。
3	No.5	土師器 坏	〔11.4〕	－	3.5	角閃石・長石・軽石粒	やや 不良	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。 内面：底部ナデ→口縁部ヨコナデ。		1/2 残存。須恵器蓋模倣坏。 床面直上。4・5と重なる。
4	No.6 上	土師器 坏	10.6	－	3.4	長石・軽石粒・赤色岩片	やや 不良	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面：底部ナデ→口縁～底部上半ヘラナデ→口端部ヨコナデ。		1/2 残存。北武蔵型坏。 床面直上。3・5と重なる
5	No.6 下	土師器 坏	〔14.0〕	－	4.5	白雲母細粒・黒色細粒	やや 不良	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。 内面：底部ナデ→口縁～底部ヨコナデ。		1/2 残存。北武蔵型坏。 床面直上。3・4と重なる。
6	覆土	土師器 暗文坏	－	－	2.4	白・黒色細粒	良好	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面：横位ミガキ。 内面：体部中位を横位の螺旋状暗文で区画し、上下二段に放射状暗文を施文。暗文は非常に細密。		細片。畿内系暗文坏。 覆土。

B区H－4

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
1	No.1～4・7～11・13・覆土	土師器 長胴甕	20.2	－	(18.6)	黒色岩片	やや 良好	外面：黄橙色 内面：黄橙色	外面：口縁部ヨコナデ→胴部斜位ヘラケズリ。 内面：胴部ヘラナデ→ユビナデ→口縁部ヨコナデ。ヨゴレ付着。		上半 3/4 残存。 覆土最下層。
2	No.5	土師器 坏	〔11.5〕	－	(3.5)	白雲母細粒・長石・黒色細粒	良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ→底部ヘラケズリ。稜部弱い沈線状。 内面：ヨコナデ。		1/5 残存。須恵器蓋模倣坏。 覆土最下層。
3	カマド	土師器 坏	〔11.8〕	－	(3.4)	白雲母細粒・石英	やや 良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。 内面：ヨコナデ。		1/5 残存・須恵器蓋模倣坏 カマド内。

B区H－6

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
1	No.7	須恵器 小皿	10.1	5.9	(2.5)	結晶片岩・白雲母細粒	良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：回転ナデ→底部回転糸切り。 内面：回転ナデ。		完存。酸化焔焼成。 カマド内。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	No.2	鉄製品 不明	(9.7)	0.5	0.5	鉄	－	－	7.8g	－	端部残存。 床面直上。

B区H－7

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
1	No.3 土坑1	須恵器 坏	〔10.8〕	4.4	3.2	角閃石・黒色粒	やや 不良	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	外面：回転ナデ。底部回転糸切り。粘土・煤付着。 内面：回転ナデ。粘土・煤付着。		1/2 残存。酸化焔焼成。 土坑1（床下土坑）内。
No	出土位置	種別、器種	長さ	幅	厚さ	材質	焼成	色調	重量	器形、成・整形、文様等の特徴	残存状況・備考
2	No.2	鉄製品 刀子か	(4.2)	(1.9)	0.4	鉄	－	－	4.2g	端部屈曲。	刃部破片。 床面直上。
3	No.4	鉄滓 椀形鍛冶滓	(5.5)	(5.2)	1.9	鉄滓	－	－	56.9g	気泡あり。	2/3 残存。 掘り方。
4	No.5	鉄滓 椀形鍛冶滓	(3.1)	(2.8)	1.2	鉄滓	－	－	24.0g	気泡あり。磁着。	1/4 残存。 掘り方。

B区D－2

No	出土位置	種別、器種	口径	底径	高さ	胎土	焼成	色調	器形、成・整形、文様等の特徴		残存状況・備考
1	覆土	須恵器 小皿	9.6	4.7	2.7	石英・黒色細粒	良好	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	外面：回転ナデ→底部回転糸切り。 内面：回転ナデ。		3/4 残存。酸化焔焼成。 覆土。
2	覆土	須恵器 小皿	〔9.4〕	〔4.6〕	2.6	角閃石・軽石粒	良好	外面：橙色 内面：橙色	外面：回転ナデ。底部回転糸切り。 内面：回転ナデ。		2/5 残存。酸化焔焼成。 覆土。

Ⅵ　発掘調査の成果と課題

本遺跡で調査した、古代道路のＡ区Ｒ－１号道路状遺構は、過去の調査で存在が確実視されており、牛池川の渡河地点である本地点の道路構造の把握が、今回の大きな調査課題となった。予想どおり現れた遺構は、牛池川の浸食崖を３ｍ以上も開削した切通し状の路体と、砂礫敷きの強固な路面部をもち、隣接地点から勾配 6.56 度前後で牛池川へ下る斜路になっていた（Fig.16）。今日の発掘調査員に馴染み深い、地山掘削における作業通路の斜路は、勾配 30 度を上限とし、15 度以上は滑り止めを設けよとされるから（労働安全衛生法労働安全衛生規則第五百五十二条）、この道路状遺構には、現代の水準にもかなう安全な登坂が考慮されたと推察できる。いわば“通行の質”を意識した道路構造なのだが、その意味を考えるに本区は狭い。そこで本章では、既調査例と比較しつつ、この道路状遺構の巨視的な構造や帰属時期、性格について、若干の検討を加えてみたい。

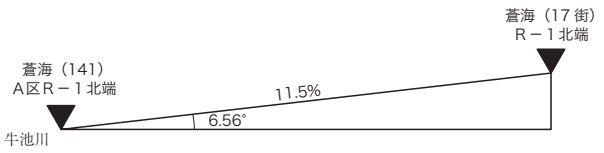


Fig.16　Ａ区Ｒ－１号道路状遺構の勾配

A区R－1号道路状遺構の周辺調査例　本跡に関連する遺構は、2000年に元総社宅地遺跡（※以下「宅地」）第11・12トレンチで最初に確認された。蒼海城の堀跡の可能性が指摘されたが、一方で遺構上部に黒色土器埦を含む住居跡が重複するとの記載もあり、詳細は不明であった（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2000）。2008年には宅地11・12トレンチに接する蒼海（14）5トレンチでも同様の遺構が確認された。覆土にAs-Bが混入しないことから古代の「大溝」と判断され、上野国府域西端部との関連が指摘された（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2008）。続く2009年には、蒼海（21）27地点と蒼海（23）24地点で南北方向に直進する溝跡が確認された。出土遺物や重複関係から10～11世紀の年代観が与えられ、上野国府との関連が指摘された。（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2009a・b）。2010年には蒼海（30）で南北方向の道路状遺構が確認され、重複関係により7世紀以降から中世以前の所産と推定されている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団2010a）。

2011年から始まった上野国府等範囲内容確認調査（※以下「国府」）では、これら既調査例も「大溝④」として検討対象になった。蒼海（14）5トレンチの隣接地点に設定された国府6トレンチで「大溝」が再確認され、中層に硬化面をもつことが確認された（前橋市教育委員会2013a）。2012年には「大溝④」の北側範囲確認のため国府12トレンチが設定されたが関連遺構は確認されず、中途で走向が変化ないし途切れる可能性も指摘された（前橋市教育委員会2013b）。2013年にはこれらの調査成果をふまえ、「大溝④」は「区画溝B」と改称され、北側を東西に走向する「区画溝A」（Fig.17右図a）との遺構形状の類似性から、国府12トレンチの南側でL字に屈曲する同一の区画溝との推定案が提出された（前橋市教育委員会2015）。

国府調査による「区画溝」の検討が進む中、同一域内で進む区画整理事業に伴う発掘調査では、新たな事例も報告された。2016年には蒼海（17街区）で、蒼海（30）から続く道路状遺構が確認され、切通し状の路体をもち、北方の牛池川を渡河して山王廃寺の方向へ向かう直線道路の可能性が想定された（前橋市教育委員会2016a）。

ふまえて同年、国府調査では「区画溝B」が再検討され、上野国新田郡家の調査例を参考に、一連の調査例は国府域を南北に縦断する一筋の直線道路である可能性が指摘された。また同年には国府29トレンチで溝跡が確認され、この付近を境に、溝幅が大きく変化することも指摘された（前橋市教育委員会2016b）。同様の溝跡は、2015年に国府40トレンチでも確認された。同年の検討では、これら遺構群の変遷過程が検討され、各地点の埋

Tab. 4　関連遺構等一覧

地点	遺跡名	遺構名	全長	上幅	下幅	深さ	断面形態	走向方向	硬化面	葉理	砂堆	洗掘	埋戻し	火山灰	重複関係	付属構造	推定時期	備考
1	元総社牛池川B区	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	6c以降～12c以前	牛池川低地平野内。洪水堆積物。該当遺構なし。
2	**蒼海(141)**	**A区R-1**	**(5.56)**	**10.39**	**5.08**	**3.10**	**漏斗状～箱状**	**N-3°-W**	**最下層**	**×**	**下層**	**×**	**×**	**As-Kk As-B**	**本跡→砂岩採掘坑**	**切通し状・路面部・砂礫敷き・路肩部・側溝・路側部・路盤**	**不明～10c**	**牛池川へ下る。路面部2時期あり（As-B以前）。**
3	蒼海(17街)	R-1	(16.35)	6.20	1.93	1.34	逆台形状	N-8°-W	最下層～下層	×	×	×	×	As-Kk As-B	－	切通し状・路面部・砂礫敷き・側溝・路盤	8c後以降～12c以降	路面部2時期あり（As-B以前）。
4	蒼海(30)	A-1	(23.80)	6.38	4.55	0.26	浅い箱状	N-3°-W	最下層	×	×	×	×	－	7c住居跡→本跡→蒼海城堀跡	「開削凹地型道路」・路面部・砂礫敷き・路肩部・側溝・路盤	7c以降～12c以前	路面部2時期あり。
5	国府12トレンチ	－	－	－	－	－	－	－	×	×	×	×	×	－	－	－	－	該当遺構なし。
5	宅地2トレンチ	－	－	－	－	－	－	－	中層ヵ	×	×	×	×	－	－	路面部ヵ・路盤ヵ	不明	表土直下に硬化層との記載。
6	蒼海(14)5トレンチ	W-32	(14.00)	(5.00)	3.5	1.17	逆台形状	N-10°-W	×	×	×	×	×	－	本跡→井戸跡（時期不明）	（切通し状）	不明～12c以前	
7	宅地11トレンチ	南北溝	(13.45)	(1.25)	(0.83)	1.50	(逆台形状)	N-5°-W	×	×	中層	×	×	－	－	（切通し状）	不明～12c以前	国府6トレンチW-2と一部重複。
7	国府6トレンチ	W-2	(3.04)	5.32	3.47	1.11	逆台形状	N-10°-W	中層	上層	下層	×	×	－	本跡→中世以降溝跡	（切通し状）・路面部	不明～12c以前	宅地11トレンチ南北溝と一部重複。
7	宅地12トレンチ	南北溝	(1.22)	(2.55)	(2.19)	0.90	(逆台形状)	N-2°-E	×	×	下層	×	×	－	－	（切通し状）	不明～12c以前	
8	国府29トレンチ	W-2	(6.80)	2.75	2.40	0.57	弧状～逆台形状	N-10°-W	×	×	×	×	×	－	本跡→蒼海城堀跡	－	不明～10c前半	路体東側溝ないし、並走する区画溝か。
9	蒼海(23)	24地点W-4	(14.13)	2.35	0.30	0.42	弧状	N-8°-W	×	×	W-4a下層	×	×	－	本跡W-4b→本跡W-4a→蒼海城堀跡→15世紀後半以降土坑	－	W-4a:11c以降 W-4b:10～11c	新旧2時期あり。路体東側溝ないし、並走する区画溝か。蒼海（21）27地点W-1に接続。
9	蒼海(21)	27地点W-1	(23.02)	2.82	0.38	0.41	弧状	N-8°-W	×	×	W-1a下層	×	×	－	本跡W-1b→本跡W-1a→蒼海城ピット群	－	W-1a:11c以降 W-1b:10～11c	新旧2時期あり。路体東側溝ないし、並走する区画溝か。蒼海（21）27地点W-1に接続。
10	国府40トレンチ	W-1	(1.00)	(2.15)	0.20	0.35	弧状～逆台形状	N-10°-W	×	下層	上～下層	×	×	－	土坑(時期不明)→本跡	－	不明～12c以前	新旧2時期あるか。路体東側溝ないし、並走する区画溝か。
11	蒼海(138)	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	蒼海城堀跡の重複により消失。
12	蒼海(93)	W-1	(5.03)	0.68	0.24	0.15	箱状～弧状	N-8°-W	－	－	－	－	－	－	本跡→中世溝跡	－	不明～12c以前	埋没後にAs-B混土の硬化面。路体東側溝ないし、並走する区画溝か。

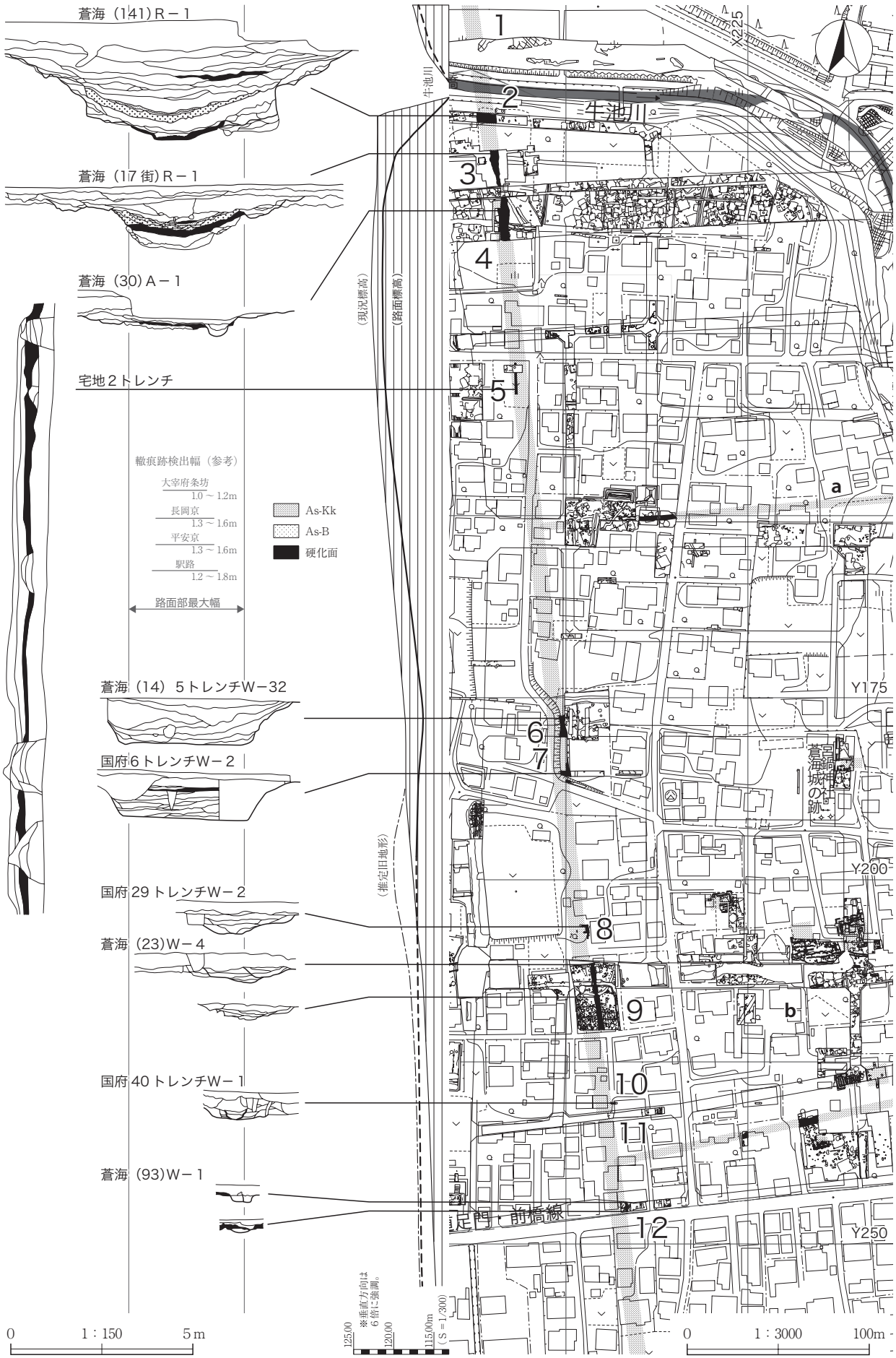


Fig.17　A区R－１号道路状遺構の推定路線と関連遺構

没状況と硬化面の層位から、10 世紀代に廃絶した区画溝の埋没過程に道路状遺構が形成され、その機能も As-B の降下以前に失われたとの変遷案が示された（前橋市教育委員会 2017a）。なお直近では、2017 年に蒼海（93）で溝跡が確認され、蒼海（21）27 地点から続く同一の溝跡と判断されている（前橋市教育委員会 2017b）。

過去の検討を概観するに、Ａ区Ｒ－１号道路状遺構の関連遺構群は現在、一連の道路状遺構と認識されている。一方、国府 29 トレンチ付近を境とする溝幅の規模差や開削の時期については検討の途上にあるといえる。

Ａ区Ｒ－１号道路状遺構の概要　本跡の詳細はⅤ章を参照されたい。ここにその特徴を挙げると、①路体の特徴－Ａ深い切通し状：Ｂ箱状（上半漏斗状）の断面形、②路面の特徴－Ａ砂礫敷き：Ｂ緩い勾配：Ｃ新旧２時期：Ｄ路面最大幅３ｍ前後、③付属構造の特徴－Ａ側溝：Ｂ路盤（部分的）：Ｃ波板状凹凸面なし、④路線の特徴：Ａ牛池川へ下る、⑤時期の特徴－Ａ開削時期不明：Ｂ 10 世紀代に廃絶、⑥その他の特徴－Ａ下層に As-B・As-Kk の一次的堆積層：Ｂ廃絶直後に砂岩採掘坑　と、まとめることができる。

地点２～７の共通点　上記特徴について、推定路線上の関連遺構と比較し、この道路状遺構の巨視的な構造を推察する。なお以下では、Fig.17 右の地点番号を用いて記述を進める。遺構名の対照は Tab. 4 を参照されたい。

まず、ほぼ同一の路面幅が推定できる地点２～７を比較する。地点３は本跡に隣接するので共通点が多く、側溝と部分的な路盤を備え、新旧２時期の路面部をもつ。路体は徐々に切通し状へ移行しており、本跡へ続く切通しの端緒部にあたる。ただし砂礫敷きは部分的で、本跡の砂礫敷きも、こうした部分的な路面補修に伴うと判断できる。同様の砂礫敷きは地点４まで点々と続く。

地点４も同様に、側溝と部分的な路盤を備え、新旧２時期の路面部をもつ。台地上を通行するため切通しはないが、路体は浅く窪んでおり「開削凹地型道路」（坂爪 2008）の形状をとる。地点５に関連遺構はない。しかし、宅地２トレンチでは表土直下全面に硬化面がある。層序から新しい時期のものとされるが、硬化面以下の層序に As-B 混入に関する記載はなく、現在の認識状況を勘案し、再検討の必要もあるだろう。硬化面より下層にも掘り込みが存在し、あるいは路盤をもつ可能性もある。

地点６・７では再び切通しをもつ。側溝や路盤はもたず、硬化面は部分的で中層より上位に存在するので、当初は国府に関連する「大溝」の一部として開削され、後の埋没過程で道路として利用された可能性が指摘されるが（前橋市教育委員会 2017a）、その溝幅、底面の水平性、推定路線との位置関係を考慮するに、「大溝」と同時に、当初より道路としての機能を有した可能性もあろう。再び切通し構造となる点については後述する。

地点８～12 の相違点　以南の地点でも関連遺構は確認されるが、構造に大きな相違点がある。地点８～10 では、新旧２時期の溝跡が確認される。溝幅は地点７以北の路面幅に比べると狭い。硬化面は形成されず、断面形は浅い弧状で、底面の水平性も低い。路面部や路盤そのものとは考えにくく、むしろ「国庁Ｃ案推定域」周辺の掘込地業建物跡群（Fig.17 右図ｂ）との関連が強い区画溝ともいえる。地点 12 では溝幅も減少し、やはり路面部や路盤そのものとは考えがたい。溝跡の上層に硬化面が形成されるが、その層中には As-B を含む。

「道路」か「区画溝」か　本跡にかかる関連遺構群の性格は、道路状遺構と溝跡ないし大溝（区画溝）の二面性をもつが、この認識は地点７・８間を境とする遺構形状の不整合に起因している。

地点７以南の一帯は蒼海城本丸に近く、その地形改変の影響を強く受けた区域である（前橋市教育委員会 2013b など）。この区域内にある蒼海（65）では、周辺調査における遺構確認面の層序と現況地形、蒼海城縄張図（山崎 1978）の比較から、地形改変の具体が検討された。これによれば、本来の地形は牛池川や染谷川の流下方向と同様、北西から南東へ緩やかに下る台地だったようである（Fig.18、前橋市教育委員会 2016c）。

推定される旧地形を、本跡にかかる関連遺構群の推定路線方向へ三次元的に変換してみると、地点４と地点７・８間の２箇所に、台地上の緩やかな頂部があることに気付く（Fig.17 中央）。中でも地点７・８間の頂部へ向かう地形変化は、地点４付近のそれと比べ大きく、この部分の路線の水平性を確保するために、地点６・７は台地上にも関わらず、切通し状の路体をもつとも推測できる。地点６・７以南の地形は緩やかに南へ下り、本来の地

形も変化に乏しいと推測できるが、蒼海城の地形改変による影響はとくに大きい。そのため路体は、切通し状の構造をもたず、本来は地点４にみられるような「開削凹地型道路」ないしは平地状のような掘り込みの浅い路体構造であったものが、地形改変によって消失している可能性もある。結果、東側に付属する側溝や、側溝に共有された区画溝のみが残存し、現在の現象を作り出しているのではなかろうか。

本跡にかかる関連遺構群の推定路線は、直進性を保ちながら推定国府域を南北に縦断している。国府域周辺の「地割り」については、その推定プランや設定時期に関して議論の多いところだが（近藤 1981、木津 1999 など）、このような線形をもつ道路状遺構が、その「地割り」と無関係とは考えがたい。「道」そのものが社会的に意味される境界性の問題や、古い絵巻物に残る道路の描写を引き合いに出すまでもなく、この一連の遺構群は道路状遺構であると同時に、強い区画性を本質的に有するのだろう。禅問答のようになったが、ここでは開削の当初より道路であると同時に区画施設でもあった可能性を指摘しておきたい。

時期と変遷　一連の道路状遺構は、７世紀以降に開削され、12 世紀初頭より前には埋没したことが把握されている。そこでここでは出土遺物の詳細を、既存の編年（鈴木 1984、坂口・三浦 1986、桜岡 1991、群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997、尾野 2008 など）に拠りつつ点検し、時期を考えてみる。

Fig.19 には、この道路状遺構で出土した土器類のうち、器形の詳細がわかるものを集めた。【A】以前の土器群は他の土器群との時期差が大きく、周辺他遺構から混入したものだろう。道路状遺構に関連しうる土器としては【A】が最も古相を示す。北武蔵型坏で口縁部は短く直立する。路面部より下層の路盤構築土内から出土しており、覆土出土の他の土器群よりも遺構への帰属性は高いものと判断できる。【B】は【A】との間に空白期間がある。いずれも灰釉陶器で、屈曲の強い口端部や短い三日月高台がみられ、光ヶ丘１号窯式期に相当すると判断できる。【C】の須恵器坏は口径に対する底径の比率が半分を切る。酸化焔焼成の高台付坏や羽釜とは時期的に共伴しうる。【D】には酸化焔焼成や黒色土器の坏と埦がある。黒色土器の埦は、地点７の上層から出土している。【E】には酸化焔焼成の小皿と灰釉陶器の稜皿がある。稜皿は、稜部の器形変化がやや不明瞭で高台はごく短く、丸石２号窯式期に相当すると判断できる。道路状遺構に関連しうる土器としては【E】が最も新相を示し、新旧２時期の溝跡が重複する地点９に集中していることから、新段階の溝跡に伴う土器群と推測できる。ただし上記は、あくまで組成上の分類であり、残念ながら層位的に検証されたものではないことをことわる。

道路状遺構の変遷は、半数程度の地点に確認できる砂堆の層位と硬化面を鍵層として考えてみる。地点９では旧段階の溝跡に砂堆があり、その後に新段階の溝跡が再掘削されている。地点７では下層から中層に砂堆があり、その上層に硬化面がある。地点３では砂堆はないが、硬化面の直上にAs-Bの一次的堆積層が確認できる。そして地点２では最終段階の硬化面の直上に砂堆がある

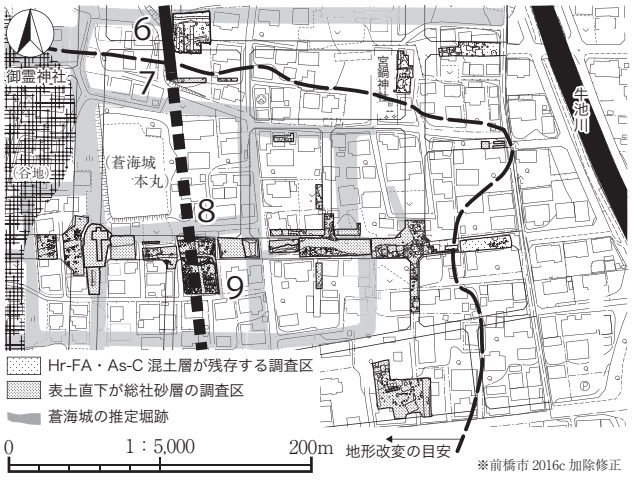


Fig.18　蒼海城築城以降における地形改変の想定 6～9 地点付近

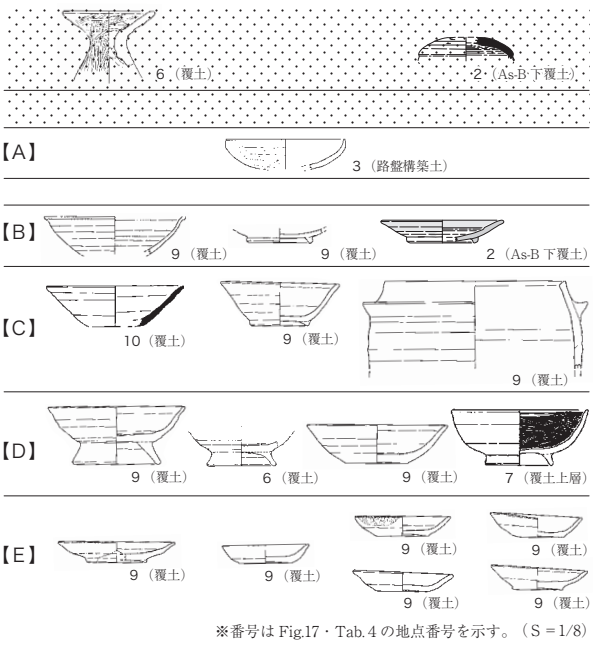


Fig.19　A区R－１号道路状遺構と関連遺構の出土土器

が、As-B 降下までの間に堆積土が形成されている。なお、同様の砂堆は、自然の流路と判断される蒼海（27・28）W－３・15 にも堆積しており、この溝跡は 10 世紀後半の住居跡を破壊し、12 世紀以降の溝跡に破壊されている（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010b・c）。

これらの点を総合するに、この道路の開削は古く見ても８世紀前半を遡ることはないのではなかろうか。主な使用期間は９世紀後半から 10 世紀後半と推測でき、その後、洪水などに起因するとみられる砂堆の影響によって、A 区 R － 1 号道路状遺構のある牛池川渡河地点付近は放棄され、砂岩採掘坑に転用されている。1968 年の米軍撮影航空写真（『109V82RSP R1250 71G 6APR48』）を参照すると、渡河地点は西へ 30 m程度移動し、現在の「薬師橋」付近に切通しがみられ、渡河地点そのものの変更が想定できる。台地上では水害後も路線が維持され、再び硬化面が形成されたり、側溝ないし側溝を共有する区画溝が再掘削された可能性がある。道路としての本来的な規模は、As-B の降下を待たずして 11 世紀代には失われていたと推定できるが、部分的には As-B 降下後にも硬化面が確認でき、ある程度の期間、道としての機能は維持していたものと想定できる。

小結と展望　本遺跡 A 区 R － 1 号道路状遺構は、登坂容易な斜路と強固な路面部を特徴とし、関連遺構群の構造を巨視的に概観しても、路線の水平性や平坦度を強く意識した設計意図がうかがえる。「切通し状」や「開削凹地型道路」や「大溝」は、その意図が地形的制約を克服しながら具体化されるにあたっての形態差と捉えたい。こうした水平性がもつ意味については、それ自体を中央集権的な統治機構のもつ観念を具現化する「装置」とみる解釈があるが（坂爪 2008）、本章では現実の通行面に限って展望しよう。太田市の上強戸遺跡群では８世紀中頃の車輪部材が出土しており（群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009）、該期にはすでに車両の利用が確認できる。車両の通行には、人馬そのものに増して路線の水平性が問われよう。該期の車幅は、轍痕跡の分析では 1.0 ～ 1.8 m程度とされ（竹井 1996）、３m前後の路面部幅をもつ本跡は充分に通行可能といえる。文献では、乗車は８世紀末から９世紀にはじまり、それ以前は荷車としての軍事利用が専らで、牽引は主に牛であったと指摘される（松本 1991）。ちなみに、蒼海（121）では 10 世紀の埋没谷から牛の下顎骨が出土しており、こうした蓄力として重宝されたものなのだろうか（前橋市教育委員会 2017c）。奇しくも、A 区 R － 1 号道路状遺構が渡河する川の名は「牛池」である。この地名は国府関連地名として議論される一方（近藤 1981、川原 2011）、「ウシ」地名には幹線道との関連性も指摘される（坂井 1989）。ともあれ、国府域という地勢とその流通・経済機構の維持において車両は有用で、本跡のような道路の設計意図にも、その通行が意識された可能性はあろう。そしてその交通路は、北は山王廃寺西側の南北古道、南は「日高道（上野国府南面古道）」（近藤 1981）に接続し、群馬郡域の広域的な南北交通路の一端を担っていた可能性すら想定されるのである。

蒼海土地区画整理事業も進み、本章で論じた古代道路にかかる調査予定地点もいよいよ少ない。限られた調査地点の有効な記録調査に、推測の多い本考察の反証を託し、展望としたい。

付記　元総社蒼海遺跡群（141）R－1号道路状遺構砂礫敷き　礫の同定

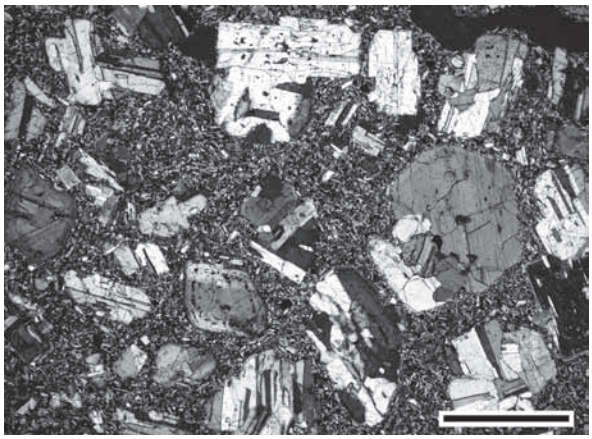
中島啓治・中村正八・吉川和男・関　茂雄

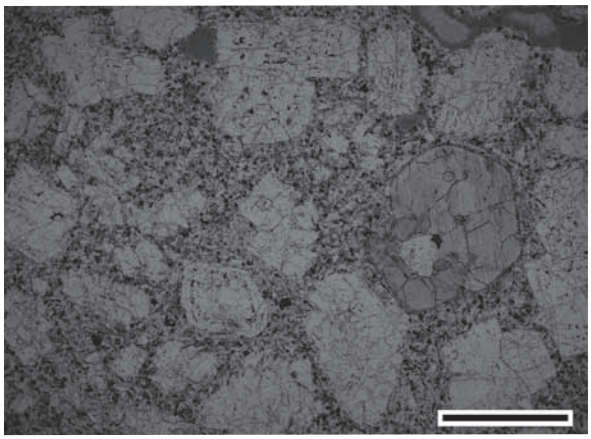
岩石顕微鏡写真は、対物レンズ４倍を用いた（fig.20）。

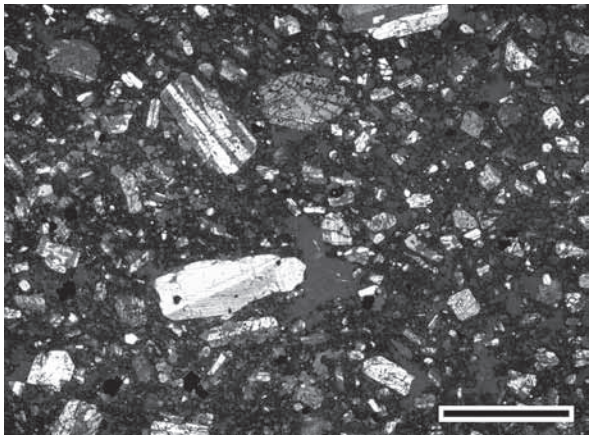
砂礫敷き２は、火山岩石礫中の微小空隙中に二次鉱物が形成される特徴から、赤城火山の起源と考えられる。例として、鈴ヶ岳などが挙げられる。

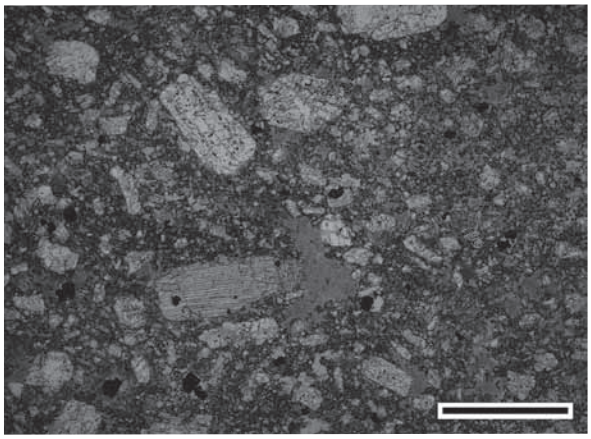
砂礫敷き６は、角閃石の周縁にオパサイト縁が見られ、新榛名火山の起源と考えられる。例として、二ッ岳などが挙げられる。

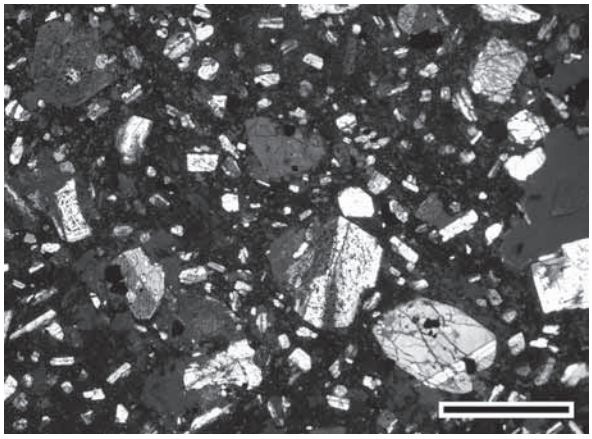
その他については、起源は定められないが、礫の大きさや形状からは、前橋台地の地下に拡がる前橋泥流（浅間火山）からの可能性もある。砂礫敷き３・４など。

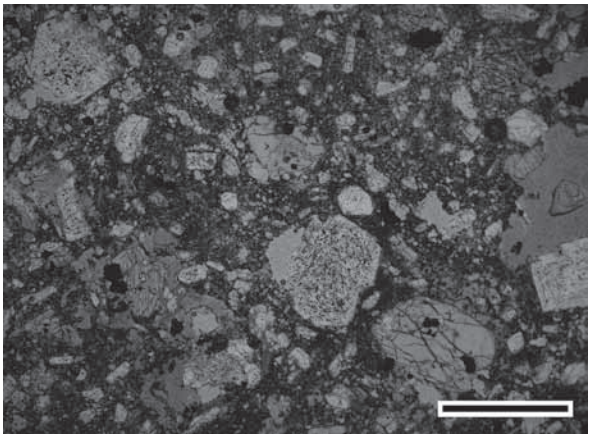

A区R－１砂礫敷き２　直交ニコル　スケール１mm

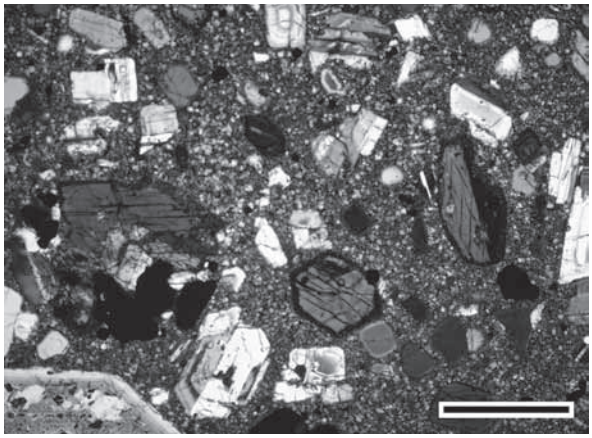

A区R－１砂礫敷き２　単ニコル　スケール１mm


A区R－１砂礫敷き３　直交ニコル　スケール１mm


A区R－１砂礫敷き３　単ニコル　スケール１mm


A区R－１砂礫敷き４　直交ニコル　スケール１mm


A区R－１砂礫敷き４　単ニコル　スケール１mm


A区R－１砂礫敷き６　直交ニコル　スケール１mm

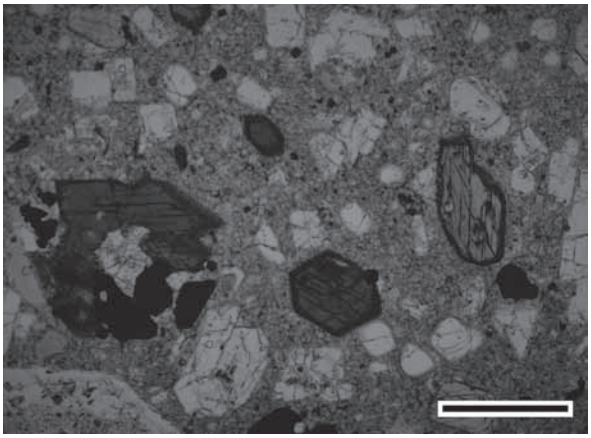
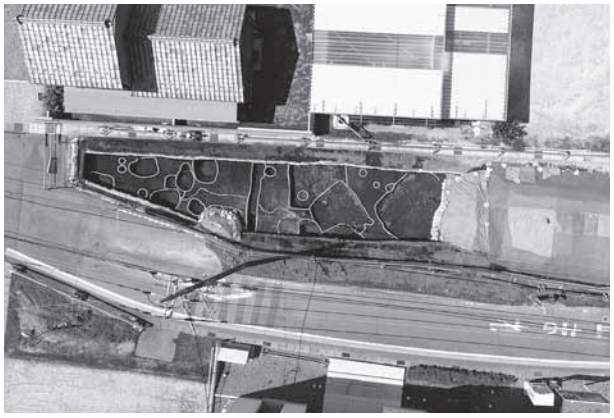
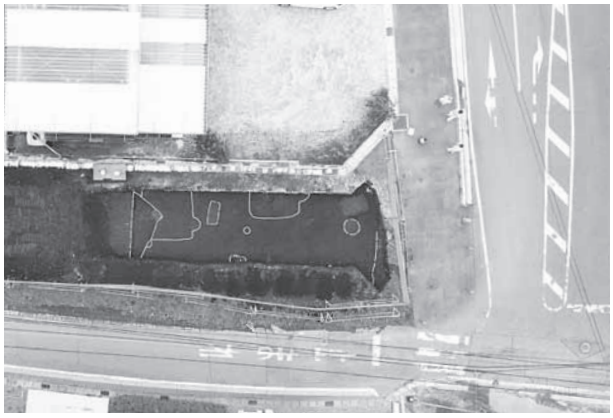

A区R－１砂礫敷き６　単ニコル　スケール１mm

Fig.20　A区R－１号道路状遺構砂礫敷き　偏光顕微鏡写真

A区　全景（上が北）



B区西半部　全景（上が北）



B区東半部　全景（上が北）

A区H－1　全景（南西から）

A区H－1カマド　全景（南西から）

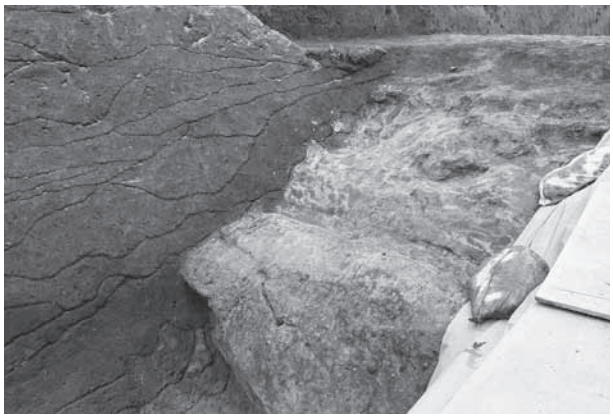
A区H－2　全景（北西から）

A区H－3　全景（北東から）

Ａ区Ｒ－１路面②（新段階）　検出状況（西から）

Ａ区Ｒ－１路面①（古段階）　検出状況（西から）

Ａ区Ｒ－１西壁中段平坦面　検出状況（南東から）



Ａ区Ｒ－１東壁中段平坦面　検出状況（南西から）

Ａ区Ｒ－１As-Kk直上馬骨　出土状況（南から）

Ａ区Ｒ－１　調査風景（北西から）

Ａ区Ｒ－１路床　検出状況（西から）

Ｂ区Ｈ－１　全景（北から）

Ｂ区Ｈ－２　全景（西から）

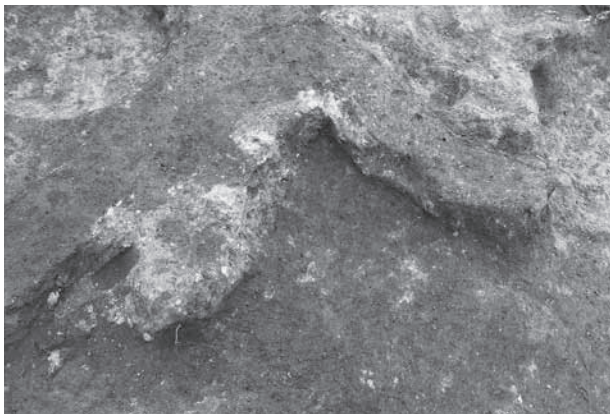
Ｂ区Ｈ－２カマド　全景（西から）

Ｂ区Ｈ－３　全景（北西から）

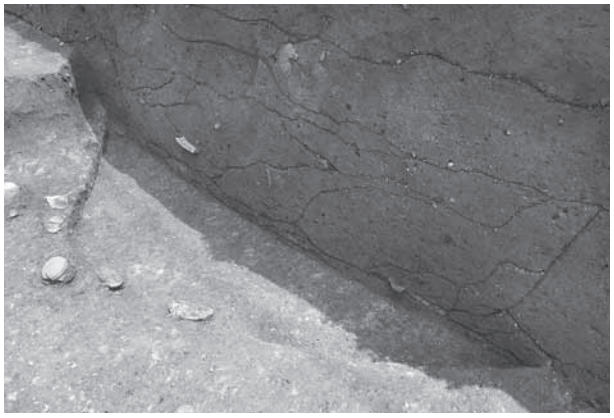
Ｂ区Ｈ－３カマド　全景（西から）

Ｂ区Ｈ－４東半部　全景（南西から）

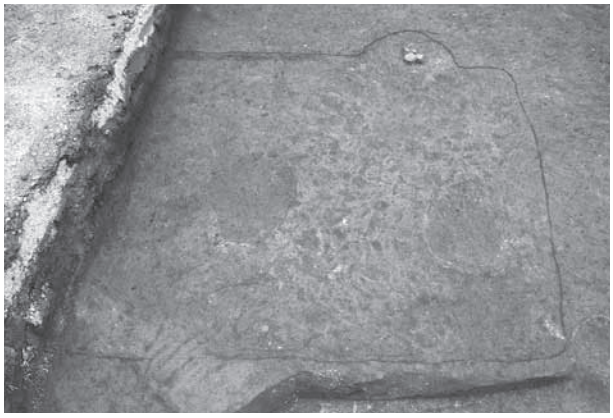
Ｂ区Ｈ－４西半部　全景（北西から）



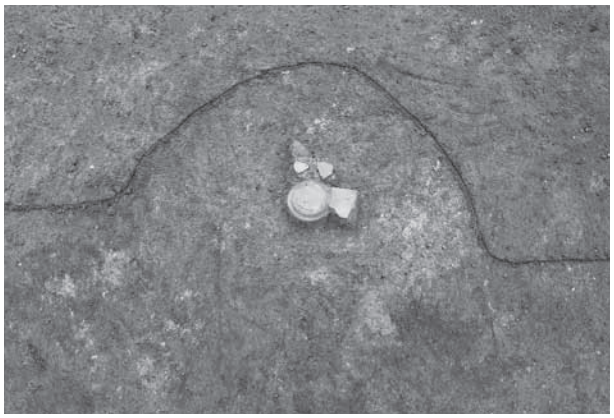
Ｂ区Ｈ－４カマド　全景（西から）



Ｂ区Ｈ－５　全景（北西から）



Ｂ区Ｈ－６　全景（西から）



Ｂ区Ｈ－６カマド　全景（西から）

Ｂ区Ｈ－７　全景（南から）

Ｂ区Ｄ－２　全景（南から）

Ａ区　調査風景（北東から）

A区H - 1 - 1（1/4）

A区H - 1 - 2

A区H - 1 - 4

A区H - 1 - 3（1/2）

A区H - 3 - 1

A区R - 1 - 3

—

A区R - 1 - 1

A区H - 2 - 1

B区H - 1 - 1

B区H - 1 - 2

B区H - 2 - 1

—

B区H - 2 - 3（1/6）

B区H - 2 - 2（1/4）

B区H - 3 - 1（1/4）

—

B区H - 2 - 4（1/6）

B区H - 4 - 1（1/4）

B区H - 4 - 2

B区H - 4 - 3

B区H - 6 - 2（1/2）

B区H - 3 - 2

B区H - 3 - 3

B区H - 7 - 1

B区H - 6 - 1

B区H - 3 - 4

B区H - 7 - 2（1/2）

B区D - 1 - 貝巣穴痕軟質泥岩

B区D - 2 - 2

B区H - 3 - 5

—

B区H - 7 - 3

B区H - 7 - 4

B区D - 2 - 1

—

B区H - 3 - 6（1/2）

報告書抄録

ふりがな	もとそうじゃおうみいせきぐん（141）
書名	元総社蒼海遺跡群（141）
副書名	前橋都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	中村岳彦
編集機関	技研コンサル株式会社
	〒371－0031　群馬県前橋市下小出町１-15-３
発行機関	前橋市教育委員会
	〒371－0853　群馬県前橋市総社町３-11-４
発行年月日	2020年10月30日

ふりがな	ふりがな	コード		位置		調査期間	調査対象面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
もとそうじゃおうみいせきぐん 元総社蒼海遺跡群 （141）	まえばししもとそうじゃまち 前橋市元総社町 1811-3、1812-1、 1860-1、1860-2、 まえばししそうじゃまちそうじゃ 前橋市総社町総社 3090-4、3090-9、 3090-10、3090-12、 3090-13、3091-1、 3091-2、3091-3	102016	2A255	36° 23′ 31″	139° 2′ 12″	2020.06.12 ～ 2020.07.20	559㎡	前橋都市計画事業 元総社蒼海土地区 画整理事業

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元総社蒼海遺跡群 （141）	集落	古墳時代	住居跡　３軒	土師器 （長胴甕・坏・高坏）	
		飛鳥時代	住居跡　３軒	須恵器（蓋） 土師器（長胴甕・坏） 畿内系暗文坏	Ｂ区H-3号住居跡の覆土中から、飛鳥Ⅲ～Ⅳの畿内系暗文坏（平城宮分類坏Ａ）の細片が出土した。
	交通	奈良時代	道路状遺構　１条	灰釉陶器（段皿） 須恵器 （甑・坏・小皿） 瓦（丸瓦・平瓦） 鉄製品（刀子）・鉄滓 砥石 貝巣穴痕軟質泥岩 獣骨（ウマ）	推定上野国府域を南北に縦断する道路状遺構の一部であるＡ区R-1号道路状遺構は、周辺調査例の検討から、奈良時代に開削されたと推測できる。牛池川の渡河地点に向かって下る、切通し状の路体を備えた斜路で、10世紀代に廃絶する。
	集落	平安時代	住居跡　４軒 土坑　６基 ピット　８基		
	交通 その他	中・近世	道路状遺構　１条 土坑　11基 ピット　19基	獣骨（ウマ）	

元総社蒼海遺跡群（141）

前橋市都市計画事業元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2020年10月15日　印刷
2020年10月30日　発行

発行　前橋市教育委員会文化財保護課
〒371－0853　群馬県前橋市総社町３-11-４
TEL　027-280-6511

編集　技研コンサル株式会社
印刷　朝日印刷工業株式会社